

---

# FAIRY TEIL 空に輝く星竜の咆哮

颯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FAIRY TAIL 空に輝く星竜の咆哮

### 【コード】

N0168V

### 【作者名】

颯

### 【あらすじ】

魔法が普通に売り買いされる世界そこにあるたくさんの魔導士ギルドのひとつ、フェアリーテイル。そこに一人の青年が来た。彼は、竜食い<ドラゴンイーター>を字に持つ、滅竜魔導士<ドラゴンスレイヤー>のラルド。ドラゴン、レギオンを父に持ちこの世でたった一つ炎と風、二つの滅竜魔法が使えた少年であった！！誤字、脱字とうがありましたら教えてください。題名変えました！！これからもお願いします。

## プロローグ

ここはファイオーレ王国の南端に拠点を置いている闇ギルド、レイブンスピリットである。が・・・

??side

メンバー? 「竜食い<ドラゴンイーター>だ!」

?? 「ここがレイブンスピリット・・・」

メンバー? 「なんだてめーはうちのギルドになんのようにだ」

俺は答える

「闇ギルドのなかでも強いって聞いたんでな。腕試しだよ」

言い終わると俺はその男に接近し右腕を閃かせた。

メンバー? 「うわああ〜」

男は壁をめり込ませ気絶した。

メンバー? 「くそこれでも食らいやがれ」

そいつは俺に魔導散弾銃をうってってきたが、そんなもの、俺にはきかない

?? 「炎竜の咆哮!」

メンバー? 「なんだと!?!この俺の銃が・・・ぐわああ〜!」

それから数分後

「っは。こんなもんかよ。闇ギルドのなかでも強いって言うからここを選んだのに、たいしたことないな。」

メンバー？「強い……。っ！まさかこいつフェアリーテイル！？」

？？の肩に乗っている小さいロボット？「ん。それはなんだ？答えろ」

メンバー？「ヒイツ！そ、それはこの国で一番強いとされている魔導士ギルド……です。」

？？「フーン。楽しみだなあ」

ロボット「いくのか？」

？？「ああ。楽しみで仕方がねえんだよ。俺の心躍らせるギルドであるといいな……」

## お知らせ

お知らせ1

2011年8月12日を持って感想を制限なしで受けられるように  
出来ました。

今まではユーザーからしか出来なく、誤字、脱字等あればよろしく  
お願いしますと書いてあったのに、  
本当に申し訳ございません。

ですがこれからは出来るので、どしどし感想、またはご指導宜しく  
お願いします！！

今後ともお願いします！！未熟ですが・・・がんばります。

ここでお知らせ2

ラルドの剣の名前を考えているのですがいい名前が見つかりません。

そこで、皆さんにこの剣の名前を決めるためにアンケートをとりたい  
と思います。この剣の特徴は

? 刀身が蒼く、蒼穹の空を思ふような色合いの剣

? 命令1つで魔物のような顔が剣から出てきて相手の魔力を喰らい、  
自分の魔力へと変える

の2つです。カタカナ、漢字、問いません。

期限は、ファントムロードのジョゼとラルドの一騎打ちをする時くらいがbestです。

アンケートの方法は感想ページの一言のところにおねがいします。

皆さん、どうか宜しくお願いします。

えくと10月22日・・・本日を持ってロックマンゼロを執筆いたしました。

そちらの方もぜひお読みください。

## キャラ紹介

オリキャラ1

名前：ラルド

容姿：黒色の瞳に、金がかかった茶色い髪に、黒のジーパンに、白いタンクトップ、赤と黒の半袖のパーカーを着ていて、茶色の指が見える革手袋をしている。グレイよりもかっこいい。

使える魔法：炎竜の滅竜魔法

ナツの魔法に炎竜のくをつけたバージョン

(炎の色は、蒼)

嵐竜の滅竜魔法

嵐竜の吐息1味方および自分の傷をを回復させる

嵐竜の堅翼1両腕に強化させた風魔法で防御する。

(アイスメイク：シールドの薄緑バージョン)

ウインドカッター風で相手を切り刻む。

サイクロン1竜巻を起こし相手を攻撃する。

消滅魔法

メドローアー炎と風を融合させ強大な破壊エネルギーを生み出し、弓のよう

に放つ。

滅竜剣義

炎覇獄竜陣1相手を巻き上がる炎の渦に自分ごと閉

じ込め鳳凰の如く体に炎

を纏わせ1気上昇する奥義

絶破蒼竜牙ー相手と距離をあけ高速で近ずき剣を回転しながら突き刺し吹

き飛ばす奥義

の魔法は第18魔法：雷雲を司りし一角獣デーマから使えなくなりました。

星竜の滅竜魔法

星竜の咆哮ー口から銀色に輝くプレスを放つ

星竜の碎牙ー魔力を纏った牙で攻撃する

星竜の銀炎ー右手で作った銀色の炎をぶつける。ナツの煌炎をイメージして

ください。

星竜の銀嵐ー左手で作った銀色の風をぶつける。銀炎と一緒に使う事が出来る

レアバードー背中に純白の澄んだ羽が生やしそれを使って攻撃したり、飛んだりする

星竜の翼爪ーレアバード使用中のみ使用可能。翼に魔力を溜め放出しながら

あいてにその翼を当てる

## ユニゾンレイド

雷凰らいおう霸碎はさい哮こうーラルドのプレスとティアの雷撃を交差

させ合体させ

た合体魔法。その魔法は

どんな物も砕く

ドラゴンヴォイスー自分の魔力のうち全体から3分の1程度を消費し魔力量

を格段に上げ、全ての能力値を

底上げする強化魔法

ドラゴンヴォイス：ゼロフォームー楽園の塔にて使

用、紹介します。

備考：かつて、各地のを転々とし闇ギルドを破壊しながら旅をしている最中、レイブンスピ

リット破壊しあとでそのメンバーである者にフェアリーティールというギルドを聞き入

る事を決めた。

オリキャラ2

名前：ゼロ

容姿：ロックマンゼロ公式サイトを見てください。

使える魔法：なしー体に魔力はあるがそれをうまく使えないため、ラルドに魔力を与えた。

備考：ロックマンゼロに出でくるゼロ。だが、ラグナロクを破壊した衝撃で異世界つまりこ

の世界に飛ばされて大破しているゼロをラルドが見つけたが、サイズが小さく

なってしまう、ハッピーたちと同じぐらいになった。以後元の世界に戻るためラルド

とともに調べている。第9魔法：別れと新たな力で元の世界に戻っていった。

オリキャラ3

名前：ティア

容姿：額にはユニコーンのように一本の角が生えていて、たてがみや尻尾などの体毛を持つが、皮膚は鱗状であり、角は雷を纏っている。なおかつ体が蒼い。

使える魔法：蒼い雷

雷撃―角に溜めた電気を圧縮させ放つ、プレスとよく似ている

テンペスト―雷雲を発生させる

落雷―上空から雷を4〜5発落とす

真雷―テンペスト使用時のみ使用可能。雷雲から特大の雷を7〜8発打ち込む

放電―体中から電気を流して攻撃する

帯電一体に電気を溜め細胞を活性化させ、身体能力と魔力を大幅に上げる魔法

雷突ー帯電の使用時のみ使用可能。体に電気を纏い突進する

#### 雷獣奥義

雷破珀烈晶ー雷を結晶化させ、それを飛ばして攻撃する。数により飛ばす結晶が少ないほど威力と速さが増す変幻自在の魔法である

#### ユニゾンレイド

雷凰霸碎哮ーラルドのプレスとティアの雷撃を交差させ合体させた合体魔法。

その魔法はどんな物をも砕く

備考：ラルドの義理の姉であり、聖十大魔道士にも匹敵する力を持つ。ラルドに会うまでは

ディーマと呼ばれほとんどの記憶を失い暴れていたが、第1

8魔法：雷雲を司りしー

角獣ディーマでラルドのプレスをくらった瞬間に全てを思い出した。以来、ラルドと

共に行動している。

設定の変更あり

## 第1魔法：フェアリーテイルへ

ラルドside

俺は今、魔導士ギルドの前にいる。

ゼロ「ここがフェアリーテイルか・・・」

俺の肩に乗っているゼロが言った。

ラルド「うーん多分そうだろうと思うけど・・・」

俺はあいまいにこたえる。

ゼロ「・・・ここですごくして俺の世界へかえられるのか？」

ラルド「心配するな。必ずかえしてやる。必ずな」

ゼロ「・・・ああ・・・」

ラルド「さあて中に入るか。」

俺は一度深呼吸をして目の前の扉を開けた。・・・が

ドーン ガンガン パリーン

ラルド&ゼロ「・・・」

俺は、否俺たちはその光景を目の前にして絶句した

??「たち「誰かナツを止める〜!」「うるせー!」「ぐはあ!」

ラルド&ゼロ「なぐつた〜!」

??「たち「ナツ!勝負しやがれ!」

ゼロ「いやまず服きろよ」

ナイスゼロ!冷静なツツコミだしかし

ラルド「これは何だ?どつかの戦争k。ぐへえ!」

ゼロ「ラルド!」

俺が誰かにぶつかって吹き飛んだ。なんだこいつは!?!「漢〜」つて言いながらまた戦場へ

ラルド「っち。手荒いかんげいだまつたく。」

刹那また人とぶつかつた否飛んできた奴にあたった。

ラルド「つくそ〜。次飛んできた奴ぶつとばしてやる。」

さらにまた人が飛んできた。だが

ラルド「仏の顔も・・・3どまでだ〜!」

??「ぐわあー!」

っお。さっきパンツ一丁だった奴だ。これが変態の末路だ読者のみ

なさま。

ゼロ「おいラルド！何してる！？」

ラルド「飛んできた奴殴り飛ばした。それに飛んでくる奴がわるいんだよ」

ゼロ「この戦場を見た限り好きで飛んでいないと思うが・・・」  
ラルド「気にするな」

簡単コントをし、その後も俺に飛んでくる者たちを殴り飛ばしながら受付にいった。

ラルド「スイマセン。このギルドに入りたいんですが・・・」

??「つあ。はいそれじゃここに名前を書いてね」

ラルド「はい。わかりました。」

俺はこの紙にラルド・エグフィードと書いた。

ラルド「できました。」

ミラ「はい。これであなかもフェアリーテイルの一員よ。私の名前はミラジエーンよ。これからもよろしくね」

ラルド「はい。よろしくお願いします。」

ミラ「フツッ。ここでは敬語はつかわなくていわよ。」

ラルド「そうですかそれはよかったです。」

なぜなら俺は敬語が苦手だからだ。

ラルド「えつとマスターはどこにいるんだ？」

ミラ「マスターは今定例会にいつてていないわよ」

ラルド「そつか。ありがとうな」

ミラ「どういたしまして。」

??「大変だ」変態&ツリ目」「あ?」「??」「エルザがかえってきた!」「あ!?!?!?」「」

ラルド「エルザって誰?」

ミラ「そうね、学校で言う。風紀委員ね。・・かなり恐ろしい」

さつきケンカしていたやつらの豹変振りといい。あれはマジだ。

エルザ「ん、君は?」

ラルド「はっはい。僕はつい先ほどここに入りました。ラルド・エグフィールドと申します。」

ゼロ「・・・おい。完全に敬語になってるぞ」

当たり前だよ!だって怖いもん。

エルザ「そつか。わたしはエルザ・スカーレットだこれからもよろしくな。ところで、ナツとグレイはるか?」

グレイ「ここにいるぜ〜エルザ？」 ナツ「アイ」

エルザ「実は2人に頼みたいことがある。仕事先でやっかいな話を耳にした。本来ならばマスターの判断をあおぐトコなんだが早期解決がのぞましいと私は判断した。二人の力を貸してほしい。ついてきてくれるな」

グレイ「え!?!」 ナツ「はい!?!」

エルザ「出発は明日だ。準備をしておけ。詳しくは移動中に話す。」

ミラ「エルザ、ナツ、グレイ今まで想像もしたことなかったけど…これってフェアリーテイル最強チームかも…」

へえ〜

ラルド「つまりそれほどすごい敵がいるってことだろう？」

ミラ「え、ええそうね。多分」

だったらやることはひとつだ。

ラルド「エルザ！待ちな!!--それに俺も行かせる!!--」

ギルドの皆「『『『『『『『『はあー!!--?!』』』』』』』」

さ〜てシヨウウの始まりだ。

**第2魔法：うえ！3対1？かかってこいてんだ（前書き）**

お気に入り登録数1件ありがとうございます。

これからもがんばっていきますのでお願いします。

## 第2魔法：っえ！3対1？かかってこいてんだ

エルザ side

ラルド「エルザ！待ちな！！それに俺もいさせる！」

「「「「「「「はあ〜！！？」」「」「」「」「」

エルザ「分かっているのか？私たちが倒しに行くものはそんなじゃそこの魔導士ではないぞ」

ナツ&グレイ「「いやいや。俺も聞いてないから。」」

ラルド「ああ、構わない。連れて行ってくれるか？」

この男の目、長年戦い続けてきた目だ。だったら

エルザ「いいだろう。ただし条件がある。ナツ、グレイと私3人相手に10分もつたら・・・いいだろう連れて行ってやるぞ。」

ラルド「えっと・・・つまり3対1で10分耐えたらいいというわけだな。」

エルザ「ああ、それでかまない。」

ナツ「なんで俺が・・・」グレイ「別にしないでいいぞ。後でエルザに殺されるぞ。」

ナツ「あ？っつせえたれ目が！」グレイ「なんだとこのツリ目g・・・」

エルザ「いいか！！？二人とも。」

ナツ「あい。「グレイ」も、ももちろんだぜエルザ」

エルザ「そうかならば外でやるぞ」

どれほどのものなのか、見せてもらおうぞ。

エルザ side 終了

ラルド side

ミラ「それじゃ審判はこの私、ミラジエーンが行います。尚賭けはエルザチームとラルドでやっていたいただきます。」

なんだと。賭け？そんなものエルザたちに賭けるだろうな。・・・  
お、ゼロは俺に入れてくれたやつばお前は相棒だよ・・・

ミラ「それでは、スタート!!」

まずはお手並み拝見だな。

エルザ「ナツ」ナツ「オウ。火竜の咆哮!!」

ラルド「何!?!火の滅竜魔法だ?!?!」

あつたつたら食ってやるしかねよな。俺は異空間にしまつてある剣を取り出し命令した。『喰らえ』とその瞬間、魔物のような顔が剣から出てきてナツの魔法を喰らつた。

ラルド「ほう。うまいか？どうだ？」

グレイ「なんだと！？ナツのブレスを食つただと？」

ラルド「いや。この剣は特殊であ。相手、自分の魔法を食つことを取り込み俺の魔力に変換することが出来るんだ。」

エルザ「そんな剣は聞いたことがないぞ。」

当たり前だこの剣は・・・

ラルド「この剣は俺の親父、ドラゴンのレギオンの特別製だ。知られちゃあ困るよ。それじゃ今度はこっちのターンだ。」

グレイ「アイスメイク：ランス！！」

俺の眼前に迫ってきた氷の槍。俺はそれを・・・

ラルド「炎竜の翼撃！！」  
溶かした。

グレイ「何！？」

ラルド「吹っ飛べ！サイクロン！」

俺は風の魔法で竜巻を作りだしグレイに当てた。

グレイ「ぐあゝ〜！」ラルド「まずは1人」

ナツ「火竜の煌炎！！」ラルド「つく！」

破壊力満点だなだけど

ラルド「甘い！！炎竜の鉄拳！！」ナツ「何、うわあ〜！」ラルド  
「よしこれで、あと1人」

とわずかに気が緩んでしまった瞬間

エルザ「明星、フォトンスライサー！！」ラルド「！速い、ぐはあ  
！」

つち今のは結構きいたなしようがねえ

ラルド「これで最後だ。右手に宿りし全てを燃やし尽くす竜の炎よ、  
左手に宿りし全てを切り刻む竜の風よ、二つをあわせて、くらいや  
がれ！消滅魔法メドロア！！」

ラルドside終了

エルザside

あれは何だ、あれほどの魔法は・・・避けられない！！

ラルド「くらいやがれ！消滅魔法メドローア！」

速いならば

エルザ「換装！金剛の鎧！」

受け止める「うおおおー！！」鎧にひびが入っていくがそれもつかの間メドローアを防ぎきった。

エルザ「ハア・ハア・っぐ」

パリーン！鎧が砕けた私の負けだな。

ラルド「ハア・ハア・あれを防ぎきるとはさすがだ。あれ以上の技はしんどいからな、すげえもんだよ。」

エルザ「いや今回は私の負けだ。強いなお前」

ラルド「じゃあまづは嵐竜の吐息！」

エルザ「何をした？」

ラルド「治癒魔法だよ。多分向こうで倒れている2人も」

ナツ「強いなお前。なあ、名前は？」

ラルド「ラルド・エグフィードだ。よろしく。んであそこにいるのが」

ゼロ「ゼロだ。」

ナツ「そうか俺はナツ・ドラグニルだ。」

グレイ「俺はグレイ・フルバスターだよろしくな。」

ラルド「ああよろしくな。」

エルザ「それはそうとこっちが負けたんだ連れて行くどころか頼む。」

ラルド「ああ了解。また明日な」

エルザ side 終了

ラルド side

ラルド「あっスタンプ押すの忘れてた。」

ミラ「はい持ってきたわよ。」

ラルド「おおサンキュー」

ミラ「それでどこにする？」

そうだなあやっぱりこのグローブの下かな

ラルド「それじゃここ。右手の甲で。色は赤だな。」

ミラ「はいポンっと。それじゃ明日皆のことお願いね。」

ラルド「ああ。まかせろ。じゃあな。」

ラルド「なあゼロ」

ゼロ「どうした？」

俺は少しためて言った。

ラルド「ここ楽しいなあ」

ゼロ「だな」

このとき2人は知らなかった。いまだに経験したことのない冒険が幕をあげたことを

金髪の美女「あたしのでばんはあああ〜!!!?!?」

### 第3魔法：皆の魔法（前書き）

ラルドは、滅竜奥義なしの状態でエルザと同じぐらいです。  
チートにはしません。

### 第3魔法・皆の魔法

ゼロ said

ゼロ「なあ。集合場所はどこだ？」

ラルド「マグノリア駅だ。電車に乗ったことないから楽しみなんだ。」

そういえば俺とラルドが会ったのは2年前だがずっと歩きだったな。おっと、このままでは昔話になってしまふな。あれがマグノリア駅か。あれはナツとグレイと・・・あれは誰だ？

ゼロとラルドは知る由もないだが、前回まで空気だった今作のヒロインだ。

ゼロ&ラルド「・・・空気だったんだ。」

とそこにそのヒロインが来た。

??「はじめましてラルドさんゼロさん、同じ時期に入ってくれる魔導士がいたのでうれしかったです。」

ラルド「え」と・・・君は？」

ルーシィ「あつすみません。申し遅れました、ルーシィです。よろしくお願ひします。」

ゼロ&ラルド「ルイージ？」

ルーシィ「ルーシィよー!!」

すごいツッコミだ。シエルでもこんなにはツッコまないぞ。シエルとはゼロが前いた世界の科学者だ14〜16歳の

ラルド「冗談だ。あと敬語をやめるとさん付けはなしだ。いいか、ルーシィ?」

ルーシィ「うん、分かった。よろしくねラルド、ゼロ」

ラルド「ああこちらこそ」

俺の体はハッピーなみに小さいんだが何で皆スルーなんだろうな。何?そういうもんだよと認識させるさせるようにしている!?!?おのれえゝ作者、後でブツ飛ばす

ラルド「なあほかの皆は?」

ルーシィ「エルザ以外はあそこに・・・でもケンカしていて・・・」

ラルド「任せろ。こついう時はゝゝ」と言うんだ。」

ルーシィ「なるほど分かったわ。」

ゼロ「何を言ったんだ?」

ラルド「見てりゃ分かるって。」

グレイ「てめエ。なんでいつも布団なんか持ってんだよ。」

ナツ「寝るために決まってるんだろ アホか お前。」

ルーシィ「（くらえラルド直伝）あー！！エルザさん！！！！」

刹那2人の体が上下した。

グレイ「今日も仲良くいつてみよー。」 ナツ「アイさー。」

ルーシィ「これ面白いかも。」

グレイ&ナツ「騙したなテメエ！！」

ルーシィ「ラルドが教えてくれたもん。」

ナツ&グレイ「ラルド！！」「ラルド「知らん。」

ゼロ「・・・すごい効果だな。」

ラルド「ああ。俺もびっくりしたよ。」

数分後

エルザ「すまない・・・待たせたか？」



シュポ〜 ガタン ゴト ガタン ゴト

ナツ「ハア ハア ハア……」ぐて〜

グレイ「なさけねえなあなつはよオ・うつとし異から別の席いけよ・・ツーかそれ以前に列車乗るな!! 走れ!!」

ナツ「う……」

ゼロ「……いつもこうなのか？」

グレイ「乗り物絶対酔い症。こいつだけの病気みてーなもんだ。」

乗り物絶対酔い症とか聞いたことねえよ。こいつ専用の病気が……可哀想だ。

エルザ「まったくしかたないな……私の隣に來い。」ナツ「あい」

エルザはため息をついた後左腕を閃かせた。      ボス!!

その腕はナツの腹にめり込み、声を出さずに気絶した。

エルザ「少しは楽になるだろう。」

ゼロ&ラルド&グレイ&ルーシー「……恐ろしい……」

「」

ルーシー「そういえば私皆の魔法ナツ以外は知らないなあ。ラルドはどんな魔法を使うの？」

ラルド「俺は炎と風の滅竜魔法とこの剣に魔力を宿して攻撃する滅竜剣義とドラゴンヴォイスっていうんだが・・・」

ゼロ「それは言うな。禁術なんだろうっつ？」

ラルド「・・・だな。エルザは？」

ハッピー「エルザの魔法はきれいだよ。地がいっぱい出るんだ。あいての」

ルーシィ「きれいなもの？それ？」ラルド「お前の美的センスを疑うな」

エルザ「たいしたことはない。私は 그레이の魔法のほうがかれいだと思うぞ」

그레이「そうか？ふん！！」

瞬間、周りの気温が一気に冷え 그레이の手の上にフェアリーテイルのマークが現れた。

ラルド&ルーシィ「うわあ」「」

ほう。たしかにきれいだなあ。

그레이「氷の魔法さ」ゼロ「氷ってお前似合わないな。」「 그레이「ほっとけ。」「

ルーシィ「氷に火だからあんたたち仲悪いのね！！！！単純すぎてか

わいー。」

グレイ「・・・どうでもいいだろう？そんなこと。」

否定はしないんだな。

ルーシィ「最後に私ね。私は精霊魔法を使うの。使える精霊は黄道十二門の金牛宮のタウロス、宝瓶宮のアクエリアス、巨蟹宮のキャンサー、そしてこつちがお店とかで売っているやつで、時計座のホロロギウム、南十字座のクルツクス、琴座のリラ、子犬座のプルーよ。」

こつしてみるとみんな色々な魔法が使えるんだな。

エルザ「さてそれでは本題に入ろう。」

魔法紹介が終わり、この時に聞いたララバイという単語に深い疑問を抱き戦いに行く俺たちだがまさかあんなことになるとは、この時誰も思っていなかっただろう。

## 第4魔法：ララバイをめぐって

エルザ side

エルザ「さて本題に入ろう。先の仕事帰りだ。オニバスで魔導士が集まる酒場へ行った時、少々気になる連中がいてな・・・」

エルザの回想

ビード「コラア！！酒遅エぞ！！！！たくよオなにモタモタしてんだよ！！！！」

なんだあいつらは闇ギルドの一員か？

男1「ビード、そうカツカするな。」

男2「うん」

ビード「これがカツカせずにいられるかってんだ！！！！。せえっかくララバイの隠し場所を見つけたってのにあの封印だ！！なんなんだよアレはよオ！まったく解けやしねえ！！！！」

男1「バカ！！声がでけえよ。」

男2「うん。うるせ。」

カゲちゃん？「あの魔法の封印は人数がいれば解けるなんてものじゃないよ。後は僕がやるからみんなはギルドに戻っているといいよ。」

エリゴールさんに伝えといて、必ず3日以内にララバイをもって帰るって。」

ビード「マジか!? 解き方を思いついたのか?」

男1「おお!! さすがカゲちゃん!!」

-----  
-----  
エルザ回想終了 エルザ said 終了

ラルド side

ララバイ? なんだ? 妙に引つかかるなあ。 たしかどこかで...

ルーシィ「子守歌・眠りの魔法かしら。」

いや違うなんだこの感じはいやな予感がする。

エルザ「わからない... しかし封印されているという話を聞くと、かなり強力な魔法だと思われる。」

グレイ「話が見えてこねえなあ... 得体の知れねえ魔法の封印を解こうをしている奴らがいる... だがそれだけだ。仕事とかもしれねえしなんて事アねえ。」

ゼロ「待てグレイ。エルザほどの魔導士が推測で俺たちを集めるは

「ずがない。ちがうか?。」

エルザ「そう。初めはそう思っていた。エリゴールという名を思い出すまではな。闇ギルド鉄の森<アイゼンヴァルト>のエース、死神エリゴール、暗殺系の仕事ばかりを遂行し続けた字だ。本来暗殺依頼は評議会の意向で禁止されているのだがアイゼンヴァルトは金を選んだ。」

ラルド「お。着いたみてえだ。降りようえぜ。」

皆が降り、エルザが話しを再開する。

エルザ「結果6年前に魔導士ギルド連盟を追放された。」

グレイ「なるほどねえ。」

エルザ「不覚だった・・・あの時エリゴールの名に気づいていれば・・・全員血祭りにしてやってもを・・・」

ラルド「なるほど。その場にいた連中だけならともかく、ギルドまるまる1つ相手となると・・・」

エルザ「ああ。奴らはララバイなる魔法を入手し何かを企んでいる。私はこの事実を看過する事はできないと判断した。・・・鉄の森<アイゼンヴァルト>に乗り込むぞ。」

グレイ「面白そうだな。」

ラルド「フェアリーテイルに入って初の戦いだ・・・腕がなるな。」

ゼロ「……俺の戦闘シーンはあるのだろうか……」

ルーシィ「来るんじゃないかった……」

ハッピー「汗すぎだつて。「ルーシィ」汁つて言うなってあれ？」

ゼロ「どうした？ルーシィ。」

ルーシィ「ナツがないんだけど」

ルーシィ以外「……はあ……！！！！……」

エルザ「なんとということだ。あいつは乗り物に弱いというのにつ！  
！とりあえず私を殴ってくれ！」

ルーシィ「まあまあ……」

エルザ「そういう訳だつ！列車を止める……」

管理人「ど……どという訳??(汗)」

ゼロ「フェアリーテイルの奴らはみんなこつという感じなのか……」

グレイ「オイ！！俺はまともだぞ。」

ラルド&ルーシィ「変態」「露出魔」のどこが??」

エルザ「っ！！ハッピー」「ハッピー」「あいさー！！」「ガゴン

なんて奴らだフェアリーテイル……まさか緊急停止信号を押すとは・

・  
・

ラルドside終了

同時刻ナツside

ナツ「列車が止まった。ん？」

あれは何だ三つ目のどくろの・・・笛か？

カゲヤマ「み・・・見たな！！」

ナツ「うるせえ。さっきはよくもやってくれたな。」

俺はイラついてんだこいつ・・・ぶっ飛ばす！！

ナツ「お返しだ！！火竜の鉄拳！！」

ナツ「ハエパンチ・・・なんてな。」

カゲヤマ「てめえ〜。」

放送「先ほどの急停車は誤報によるものと確認できました。間もなく発車します。」ナツ「マズ〜。」

カゲヤマ「つく。逃がすかあつ！！アイゼンヴァルトに手え出したんだ！ただで済むと思うなよ！！！」

ナツ「こつちもテメエの顔くツラ>覚えたぞつ！！さんざん俺たちをバカにしゃがって！！！」

しゅぽ〜あ出発した。

ナツ「今度は外で勝負してやばるう〜。うぷつ。とう！！！」

窓を突き破り外へダイブしたそんな俺を待っていたのは・・・

ラルド&エルザ「ナツ」

エルザたちは魔導四輪で追いついてきたが・・・

グレイ「何で列車から飛んでくるんだよ！！！」

ルーシィ「どーなってんのよ！！！」

俺とグレイの額がぶつかった。

ナツ&グレイ「ぎゃあああああ！！！！」

ナツside終了

ラルドside

エルザ「ナツ！！無事だったか！？」

ゼロ「・・・すごい偶然だなあ。作者が仕込んだんじゃないか？」

当たり前だろう。仕込んだにきまっている。でないとこんな偶然・・・  
ププ

グレイ「いてーっ！！何しやがるっ！！！！ナツてめえっ！！！！」

グレイがものすごい顔して問うた。

ナツ「今のショックで記憶喪失になっちまった！！誰だ オメエ。  
くせえ」

グレイ「何イ！！？」

ナツ「エルザ、ハッピー、ルーシィひでえぞ！！オレを置いていく  
なよ！！！」

ゼロ&グレイ「おいおい・・・ずいぶん都合のいい記憶喪失だな・・・」

・・ゼロ、お前はやっぱりツツコミが向いてるよ・・・多分

エルザ「無事でなによりだよかった」ナツ「硬ッ！」

エルザはナツを引き寄せた。否鏡に打ち付けた。

ナツ「無事もんかつ！！列車で変な奴に絡まれたんだ！！！！なんつったかな？たしか、アイ・ゼン・ヴァルト？」エルザ「バカモノおっ！！！」ナツ「ん？？ごあつ。」

・・・つえ？殴り飛ばした？

エルザ「アイゼンヴァルトは私たちの追っている者だ！！！」

ナツ「そんな話初めて聞いたぞ・・・」

エルザ「なぜ私の話をちゃんと聞いていないっ！！！」ナツ「  
？　？　??」

ルーシィ「（あんたが気絶させたせいだからっ）」

エルザ&ナツ以外「くくくく」・・・うわあ〜。理不尽だよ・・・  
「くくくく」

この時この2名を除く者たちはシンク口率100%だっただろう。

エルザ「いますぐ追う。特徴は？」

ナツ「あんまり特徴はなつかたな・・・でも1つだけ。なんかドク口つばい笛持ってた。三つ目のドク口だ。」

ラルド「なんだよそれは。気持ち悪い・・・」

ルーシィ「三つ目のドクロの笛・・・」

ハッピー「どうしたの？ルーシィ？」

っお。ハッピー数少ない出番の一つだな（＾ｖ＾）

ルーシィ「ううん・・・まさかね・・・あんなの作り話よ・・・でも・・・その笛が呪歌だとしたら・・・子守歌・・・眠り・・・死・・・！！！！その笛がララバイだ！！！！ララバイ・・・死の魔法！！！」

エルザ「何！？」 グレイ「呪歌？」 ラルド「・・・なんだそれは？」

ルーシィ「禁止されている魔法のひとつに呪殺つてあるでしょう？ララバイはもつと恐ろしいの・・・それは聴いたもの全てを呪殺する。集団呪殺魔法ララバイよ！！！」

ゼロ「なんだと！！！？」

さっきの違和感はそれか！！

ラルド「いったいあいつらの目的は・・・何なんだ！！！？」

## 第5魔法：燃え上がる蒼き炎、怒れる嵐

三人称 side

ここはクヌギ駅・・・いつもと違うのは・・・

ルーシィ「あいつら・・・列車を奪ったの？馬車や船とかならわかるけど列車って・・・」

ハッピー「あい・・・レールの上しか走れないし、奪ってもそれほどメツリトないよね。」

グレイ「ただしスピードはある。何かをしでかす為に奴等は急がざるをえないという事か？」

ゼロ「もうひとつ。列車での移動をされてほしくないのかもしれない。」

ルーシィ「もう軍隊も動いてるし、捕まるのは時間の問題じゃない？」

エルザ「だといいがな。」

ラルド「それはないだろう。」

ルーシィ「どうして？」

ラルド「相手は闇ギルドとはいえ魔導士ギルドだ。軍隊ていどが鎮圧できるとは思えない・・・」

エルザ「仕方がない・・・飛ばすぞ!!」

グレイ「エルザ、飛ばしすぎたぞ!! S E プラグが膨張してんじゃねーか。」

エルザ「あの笛が吹かれれば大勢の人が死ぬ・・・音色を聴いただけで人が死んでしまっただぞ。」

グレイ「わかってけど。やつらの目的もはっきりしてねえ。一戦交える可能性もある。」

ゼロ「いざという時にお前の魔力が尽きてしまては元も子もない。」

ゼロは口数は多いとは言えないが鋭いところをついてくるんだよな。

エルザ「構わん。いざとなれば棒切れでも持って戦うさ。」

ハッピー「オイラ。ルーシイに言いたいことがあつただけど・・・  
忘れた。」

ルーシイ「何？」

ハッピー「だから忘れたんだったば。」

ルーシイ「気になるじゃない。思い出してよ。」

ハッピー「う〜ん何だろう。ルーシィ・・・変・・・魚・・・おいしー・  
・ルーシィ・・・変」

ルーシィ「変つてなによ!!」

ゼロ「いいッッコミだな。」

お前もいいッッコミするよゼロ。

ナツ「気持ち悪い。降ろしてくれ・・・」

ラルド「なんなら俺がメドローアで吹き飛ばしてやるよ。」

ナツ「うおお〜・・・」

声にならないほど気持ち悪いのか、弱点だなこりゃあ。

エルザ「・・・何だあれは。」

エルザの言葉とともにその視点を見たフェアリーテイルたち。その  
目線の先には。

オシバナ駅から煙が上がっていた。

三人称 side 終了

ラルドside

エルザ「中の様子は？」

トナカイみたいな係員「な．．．なんだね君は？？うほお！」「ゴッ

エルザ「中の様子は？」

係員「は？」「ゴッ

エルザ「中の様子は？」

係員2「ヒイ！！」

．．．説明する必要もないだろう。エルザが質問したあと答えられなかった人に頭突きしているとは。

ルーシィ「即答できる人しか要らないのね．．．」

グレイ「だんだん分かってきただろう？」

ラルド&ゼロ「「やっぱりこういう人しかいないのか．．．フェアリー  
テイルは．．．」」

アイツとは関わりたくなかったな・・

ルーシィ「ていうかナツを背負うのは私の役!!?」

ちなみにナツは列車、魔導四輪、ルーシィのトリプルコンボでダウンしている。

エルザ「中へ行くぞ」グレイ「おう」ゼロ「行くぞ」ハッピー「あい」ラルド「・・頑張れ・・」

ルーシィ「シカト・・ていうか何にがんばればいいの?」

中に入っていくと軍隊と思われる小隊が全滅していた。

エルザ「・・やはり・・ラルドの言いつとつりか。」

グレイ「急げ!ホームはこっちだ!!!」

・  
・  
・

皆「「「「「!?!?!?!?!」」」」」



ルーシィ「そんな事したって権利は戻ってこないのよっ!!」

エリゴール「ここまで来たらほしいのは、権利、ではない、権力、だ。権力があれば全ての過去を流し未来を支配することもできる。」

ラルドside終了

ゼロside

奴等はきずいていない。静かく、だが激しく燃えたつぎている。竜食い<ドラゴンイーター>の内なる蒼き炎を・・・

ルーシィ「あんたバツカじゃないの!!」

カゲヤマ「残念だなハエども。」

ナツ「この声!!」

カゲヤマ「闇の時代を見ることなく死んじまうとは!!」

ルーシィ「きゃあ」

エルザ「しまった!!」

ナツ「やっぱりお前かあっ!!」  
「ボゴオ

さすがナツだこういう時に役に立つ。

ルーシィ「復活」

ナツ「今度は地上戦だなあ！！」

そろそろキレるな・・・これは・・・

ラルド「・・・言いたいことはそれだけか？」

静かに・・・だが、溶岩のような熱を帯びた声が奴等に這い上がる。

ラルド「テメエら全員・・・絶ってー許るさねえ！！！！」

久しぶりに見えるかな・・・あいつの本気を

エリゴール「(かかったな・・・フェアリーテイル。多少の修正はあったが・・・これで当初の予定通り。笛の音を聴かせなきゃならねえ奴がいるんだ。必ず殺さねえといけねえ奴がいるんだ！！！！)」

次回へ

## 第6魔法：争奪戦

ルーシイside

ルーシイ「こっちはフェアリーテイル最強チームよ。覚悟しなさい。」

ゼロ「俺たちもそうなのか？」

ルーシイ「もちろんじゃない。」

エリゴール「あとはまかせたぞ。俺は笛を吹きに行く。身のほど知らずのハエどもに・・・アイゼンヴァルトの・・・闇の力を思いしらせてやれい。」パリーン！！

逃げた！！？あっちのブツロクに行ったの？

ラルド「ナツ！グレイ！エルザ！三人で奴を追え！あいつらは俺とゼロ！ルーシイでやる！！」

ルーシイ「あの数を私が？」

ナツとグレイは不満そうな表情であるが・・・

エルザ「行くぞ！！ナツ！グレイ！！」

ナツ&グレイ「もちろん・・・」

最強チーム解散しちゃったわね・

敵は約200人ぐらい・魔力が持つかしらか・

あ。二人どっか行っちゃた。

ラルド「行くぞ。ルーシイ。」

ルーシイ「うん」

男「ほう、女のほうはいい女だなあ。」

男2「とつとと片付けて・・・見せ物にしてやるうぜえ。」

ラルド「だまれ。」

ラルド怖い・・・

ラルド「その口・・・二度と開かないようにしてやるぜ!」

彼はひとつの刀身が蒼く、蒼穹の空のような剣を取り出したそして  
こしにしまった。

ラルド「炎竜の翼撃!!咆哮!!」

ルーシイ「凄い・・・」

男3「くそ遠距離魔法マジクバスター!!」

ラルド「甘い!喰らいな。」

男3「何？俺の魔法を喰らっただとう？」

ラルド「くらえ。ウインドカッター！！」

男3「ぐわ〜〜！！」

強いでも多分彼は

ゼロ「本気ではない。だが見ている。」

どういう意味だろう？と首を傾げていると。

ラルド「ツチ！面倒だ！一気に仕留める！！」

ラルド「行くぞ！魔力強化魔法！！ドラゴンヴォイス！！！」

ルーシイ「side終了」

三人称「side」

ラルド「ドラゴンヴォイス！！！」

刹那。「何か」が変わった。

ルーシイ「何？あれ・・・」

彼女が驚くのもふしぎではない。彼は今、紅い髪に、回りに纏う紅いオーラ、否紅い魔力が目に見えるほど溢れ出していた。そして雰囲気までも、

ラルド「すべてを滅しつくせ・・・ドラゴンの末裔よ・・・」

焦るアイゼンヴァルト、だが・・・

ラルド「・・・くさえ・・・古代魔法・・・エンシエント・ノヴァ・・・」

上空に巨大な魔方陣ができるとそこからメドロアによく似た大量の光の矢が降り注いだ。彼らは声にならない悲鳴をあげて地に倒れた・・・

ラルド「・・・ドラグナーモード解除。・・・つくやべエ。魔力が・・・」

ルーシィ「ラルド!!」

ルーシィが駆け寄り肩を貸した。

ラルド「すまない。ルーシィ。」

カラツカ「・・・まさかお前竜喰いか?」

ルーシィ「竜喰い?」

ゼロ「闇ギルド内での字だ。表の世界にはあまり広まっていないが

な。」

ラルド「ああ。そう呼ばれている。」

カラツカ「どつりで・・・勝ち目がないな・・・」

同時刻：定例会場

「マカロフ様。手紙です。」

マカロフ「ん？」

ミラ「マスター。定例会ご苦労様です。実はマスターが留守の間とても素敵なことがありました。」

マカロフ「ほう。」

ミラ「エルザとナツとグレイにこの三人をまとめて相手した勝った、ラルドとルーシィとハッピーがチームを組んだんです。これってフエアリーテイル最強チームだと思っんです。報告しようと思っいお手紙しました。それでは。」

マカロフ「（なんて事じゃあっ！！本当に町ひとつぶしかねんっ！！しかもエルザたちを負かす？定例会は今日終わるし明日には帰れるが・・・それまで何もおこらんでくれ）」

それは儂い願いだともうじき気付くだらう・・・

場所は戻り

グレイ「ラルド!!」

ラルド「どうした？」

グレイ「アイゼンヴァルトの本当の標的はこの町の先だ!!じーさんどもの定例会場・・・奴はそこでララバイを使うつもりだ!!」

ラルド「なんだと!!?じゃあゼロの予想は正しかったのか。」

グレイ「しかも魔風壁で、出られない。」

ラルド「じゃあみんなを駅前に集める!そこで対策をたてる。」

グレイ「分かった。」

ラルド「行くぞ。ルーシィ。」

ルーシィ「了解。」

駅前

ラルド「ん?そいつは?」

ナツ「ああ。俺がぶっ飛ばして、アイゼンヴァルトの奴が剣を刺したんだ。カゲってんだ」

ラルド「・・・そうか。でどうする？」

ナツ「そうだ。精霊！！あれでエバルーの時場所を移動したろ？あれをつかえば。」

ハッピー「エバルーの時・・・あー！！ルーシイこれバルゴの鍵だよ。バルゴは契約を解除している。バルゴは地面を移動できるし。」

ゼロ「！！魔風壁の下を通り抜けられる。」

ルーシイ「貸して！！・・・省略・・・開け処女宮の扉！！バルゴ！！契約している時間はないの地面を掘ってここからでたいの。お願い。」

バルゴ「かしこまりました。」

ラルド「よし！！魔風壁をでた！！ってナツとハッピーはあいつを追ったか・・・俺はナツを追う。みんなも後から来てくれ。」

彼は風魔法を使い高速で走っていった。

数分後

ラルド「ん？あれは。どうなってんだ？これは」

ハッピー「あい。なんかエリゴールが風を纏っちゃって、ナツの攻撃がまったく効かないんだよ」

ラルド「こいつはちょっとヤベエな。」

ハッピー「・・・ねえラルド。滅竜魔導士って感情で魔法がパワーアップするよね。」

ラルド「まあそうだけど・・・」

ハッピー「ムリ、ナツじゃ勝てないよ。グレイに任せよう？」

ナツ「！！！！」

ラルド「（なるほどな）いやルーシィで余裕だろう。あんな奴よりも「強い！！」しな。」

ナツ「っ！！！！なんだとおおおおっっ！！！！俺が倒してやるよ！！！」

エリゴール「これほどの超高熱魔法・・・まさかいたのか！！？滅竜魔法の使い手がっ！！？」

ナツ「火竜の剣角！！・・・どうだハッピー、ラルド！！！」

エリゴールを倒した・・・強いなこいつ。

ハッピー「あいさすがはサラマンダーのナツです。」

ラルド「まさかあの状況で勝つとはな。」

ナツ「お前らさっき何て言った。」

ハッピー「猫の記憶力はしょぼいものなので・・・」

ナツ「俺じゃあこいつに勝てねえからエルザがどつとか言っただろ  
う！！！！」

ナツはエリゴールを鷲掴みして問うた。

ハッピー&ラルド「うわ〜」。猫よりしょぼい記憶力・・・」

ラルド「まあ勝ったからいいんじゃないかねえの？」

ナツ「・・・ま、いつか。」

三人称side終了

ラルドside

数10分後

カゲがララバイを持って逃走した・

ナツ「あんのヤロオオオ!!!」

ラルド「助けてやったのにどっとう神経してんだよ。」

エルザ「追っぞ!!!」

俺らが定例会場についたときはもう吹く寸前だったが・

グレイ「いた!!!」ナツ「じっちゃん!!!」

あれがフェアリーテイルのマスターか・

オカママスター「しっ。今いいところなんだから見てなさい。」

だ・誰だ?この変態は・

エルザ「青い天馬くブルーペガサスのマスター!!!」

ラルド&ゼロ「なんだと~~~~っっ!!!」

マカロフ「どうした早くせんか。さあ。」

カゲ「(なんだ!吹けよ!俺!吹くだけで俺たちの目的が達成されるんだ!そしたら・・・)」

マカロフ「なにも変わらんよ・」

マスターが喋りだした。カゲヤマはビクッと震えた。

マカロフ「弱い人間はいつまでたっても弱いまま・・・しかし弱さのすべてが悪ではない、もともと一人じゃ不安だからギルドがある・・・仲間がいる！強く生きる為に寄り添いあつて歩いていく・・・不器用な者は人より多くの壁にぶつかると、遠回りするかもしれない、しかし明日を信じて踏み出せばおのずと力は湧いてくる！強く生きようと笑っていける。そんな笛に頼らなくてもな。」

カゲ「参り・・・ました」

カゲは頭を下げてララバイを離した。

ナツ「じつちゃん」エルザ「マスター！」グレイ「ジーさん！」

ナツたちがマスターに近づいていく。

ナツ「ジツちゃんスゲエな！ぺしぺし」

エルザ「ナツ・・・そう思うならマスターの頭をぺしぺし叩くな」

マカロフ「なんじゃおまえらおつたのかっ！！・・・ん？お前さんは・・・」

ラルド「このたびギルドに入りました。ラルド・エグフィードです。よろしく願います。」

マカロフ「おうそつかそつか。よろしくな、ラルド。」

刹那・・・声が聞こえた・・・

ララバイ「カカカ、どいつもこいつも根性ねえ魔導士共だ」

ララバイから声がしたのが聞こえた。幻覚かと思ったが、

ララバイ「もう我慢できん・・・ワシが自ら食ってやるっ」

そしてララバイから煙がでてきた

ルーシィ「ふ・・・笛が喋ったわよゼロ！」

一番驚いているルーシィがゼロに言った

ラルド「煙が形になっていく・・・」

ララバイ「貴様らの魂を魂をな！」

こいつと戦うのか・・・面倒だな。そして煙は体が木のようなものでできた人型の怪物になった。

次回ララバイVS最強チーム!!

## 第7魔法：ララバイVS最強チーム

ラルドside

ララバイ「貴様らの魂を食らおう。」

・・・魂ってうめえのか？

グレイ「おいナツ！！魂ってうまくねえと思うから戦いに集中しろ！！」

ラルド&ナツ「そうなのか？」

ボブ「黒魔導士ゼレフ・・・魔法界の歴史上最も凶悪だった大魔導士の何百年も前の負の遺産がこんな時代に姿を現すなんて・・・」

冷や汗をかいてはいるが笑っている・・・

ララバイ「さあてどいつの魂から頂くのか・・・決めた全員まとめてだ！」

すると呪歌を発動させようとしていた。

ラルド「行くぞ皆！！ショウタイムだ！！」

俺の声にあわせ一斉にララバイへとかけよりエルザが足を半ばほどまで切り裂いた。

ララバイ「っちーこしやくな。」

ララバイは口から炎を出し俺とエルザはよけるが

ラルド「つく。しまった!!」

ブレスはギルドマスターのところへ向かったが、

グレイ「アイスメイク：シールド!!」

グレイが花のような巨大なシールドを高速で作りマスターたちを守った。

ナツがララバイの体を上り

ナツ「火竜の鉤爪!!」

顔を蹴った・

グレイ「行くぞ!! アイスメイク：ランス!!」

怯んだ今だ!!

エルザ「換装：黒羽の鎧!!」

黒羽の鎧とは一撃の破壊力を増大させるものだ。

ナツ「火竜の煌炎!!」グレイ「アイスメイク：フローズンアロー!!」

3つの魔法がララバイにあたり、あとは弱った木偶の坊だけだった。

ララバイ「グアーーー！！まだだ。まだ終われんぞ！！」

甘いんだよ！！

ラルド「まだ俺がいるんだよ！！くらえ！！魔力強化魔法！ドラゴンヴォイス！！」

瞬間俺の理性が飛び、のこっているのは戦闘本能だけだった。

ラルド「滅竜剣義・・・絶破蒼竜牙・・・」

ララバイ「グワーーー！！」

ララバイは吹き飛び跡形もなく消えた。いくつかの問題をのこした。  
・  
・

ラルド「・・・ドラグナーモード解除。やべ、もう魔力が空っぽだよ。」

マカロフ「見事」

「なんじゃあの魔法は・・・」「あんな魔法は見た事がない。」「いや俺は知っているぞ。闇ギルドを潰し回っている、竜食いのラルドだ！！」「なんだそれは？」「おれも詳しくは知らないが・・・多分あいつで間違いない。」

いろんなギルドが口論している姿を見てマスターは高々にえ笑う。

マカロフ「かっくかっくかっくかっくどうじゃ！すごいじゃろ！！」

「いやあいきさつはよく分からんがフェアリーテイルには借りがで  
きちまったなあ」「うむ」

マカロフ「なんのなんの〜フヒヤヒヤヒヤヒヤ・・・ハ・・・」

マスターは急に驚き、逃げようとした。皆はマスターが見て驚いた  
方向を一齐に見た・・・そこには俺が残した傷跡があった・・・

「うああああああ！！！！定例会場があゝゝ！！！！」いやそれだけ  
ではない

「いや見る！！ララバイが通った所を！！山があったのがいつにま  
にか平地になりやがった！！！！」

へ？やべ！ドラグナーモードはコントロールできないからな・・・

逃げよう・・・

「捕まえるー！！！！」

ナツ「おし！！まかせとけ！！！！」

「お前は捕まる側だー！！！！」

ラルド「ごめんマスター。顔を潰したな・・・」

マカロフ「いいのいいの・・・どうせもう呼ばれないでしょう・・・?」

エルザ「ラルド!!お前はもう少し周りを見る!!」

ラルド「悪い・・・」

ルーシィ「企画外すぎるでしょ・・・」

グレイ「この世界の地図が・・・書き換えられる・・・」

ラルド「・・・許して?」

ゼロ「そんなわけにはいかない。ちゃんと罰させられる。」

ラルド「うそだろう?」

ナツ「楽しくなりそうだなあ。ラルド!!」

ラルド「ああ・・・」

ドラゴンヴォイスはあまり使わない。と心に決めた俺だった。

PS:ここら一帯の地図、及び生態系が崩壊したのはまた別の話であつた・・・

## 第8魔法：出会い

ラルド said

ラルド「・・・どこに住もうか・・・？」

俺はブルーだ。なぜなら・・・

ゼロ「そんなもの、誰かに聞いたらいんじゃないか？」

ラルド「でもなあ・・・よし。ルーシィあたりに聞こうか。」

住むところがないんだ。

場所はルーシィ宅

ラルド「・・・という訳で、俺は家に住もうと思うんだが、頼む。どこに住んだらいいのか教えてくれ。」

ルーシィ「えつと・・・分かったわ。どんなところがいいの？」

ゼロ「できるかぎり静かなところがいい。」

ラルド「それと、星がよく見えるところ。」

ルーシィ「星を見るの？」

ラルド「ああ。レギオンと一緒に見ていたんだ。俺の・・・父さんとの思い出さ・・・」

星はいい。星は父さんに教えてもらったもののひとつで、一番おれが好きなんだ・・・

ルーシィ「そう・・・分かった。探しておくね。」

ラルド「ありがとう。」

ルーシィ「ところでさ、2人はどうやって出会ったの？」

ラルド「ああ。あれは3年位前に・・・」

---

ラルドの回想

---

ラルド「ん？あれは・・・」

俺は近寄り、足を止めた。

ラルド「これはいつたい・・・」

辺り半径3メートルくらいの範囲に機械の部品のようなものが広がっていた。それは手であり、足であり、体、長い金の糸の束が転がっていたんだ。

ラルド「これ機械か？だったら・・・」

俺は辺りを見回し、部品を集めた。その中から壊れていない部品をくっ付け元に戻した。

ラルド「できた!!」

その機械はロボットだったそれがこいつゼロだった

ゼロ「ここは？」

ラルド「よお!ロボット。」

ゼロ「誰だ?お前は。」

あ。やべえ自己紹介してねえ。

ラルド「俺はラルドだお前は?」

ゼロ「ゼロだ・・・」

ラルド「ここはフィオーレ王国。魔法の世界だ。」

ゼロ「ここはエリアゼロじゃないのか・・・」

ラルド「エリアゼロ?お前次元漂流者か?」

ゼロ「なんだそれは。」

ラルド「次元漂流者っていうのは、俺がかつてにつけている名前なんだけど、簡単にいうともといた世界とは違う世界に、何らかの膨

大なエネルギーを浴びてきてしまった者のことを言う。で、俺はその人、物を処分、もしくはもといた世界に帰している。」

ゼロ「そうなのか？でもう一個、俺の体が10分の1くらいしかないんだ？」

ラルド「それは、簡潔に説明しよう。お前はまず大破していた。だが俺が生きているプログラムを増殖して、今のお前の体を作ったが・・・すまない今の俺の力ではそれが限界でしょうもなかった・・・」

ゼロ「そうか。ひとついいか？頼む。俺を元の世界に連れて行ってくれないか？・・・俺はまだ、自分が信じてきた者を守るといいながらこつちに来た・・・俺は皆を守りたい。頼む！！」

ラルド「あ。もちろんだ。」

ゼロ「えっ！？いいのか？」

ラルド「ああ。処分するのは物だけなんadena、俺はおまえを元の世界に連れて行ってやる。時間はかかると思うが、必ずな。」

ゼロ「・・・すまない。」

ラルド「いいって。じゃあ情報集めにいくか？」

ゼロ「ああ。」

ラルド「てなかんじだ。」

ルーシィ「それで。どうなの?」

ラルド「今、向こうの世界のシエルというものにコンタクトした。もう少しで迎えに来るさ・・・」

ゼロ「いつの話だ?聞いていないが。」

ラルド「今朝だよ。悪いな言い忘れていたよ。」

ゼロ「・・・そうか。だが、すまない。」

ラルド「守るべきもののために戦う。やっとお前の夢がかなうな・・・」

次回シエル登場!!ゼロもとの世界へ

## 第8魔法：出会い（後書き）

まだ早いと思うかもしれませんが、ゼロを元の世界に戻します。

この次回作をゼロの話につなげていきたいので宜しくお願いします。

ラルドにはゼロの力を受け継ぐ形で頑張ってもらいます。

詳細は次回へ

## 第9魔法：別れと新たな力・・・

前回から4日が過ぎた。

ゼロ「ここにシエルが来るのか・・・」

ラルド「ああ。やっとお前の世界に返せるよ。」

瞬間、空間が歪み2人乗りくらいのエアカーのようなものが出てきた。その中から金髪の12〜13歳くらいの女の子が出てきた。

シエル「ゼロ！！」

彼女はシエル。ラグナロクとの戦闘で行方が分からなくなったゼロを探していた。

向こうの世界では時間軸が異なっているが、約1年もの月日を得て再開した・・・

ゼロ「すまない。シエル。心配かけたな。」

シエル「いいのゼロ・・・あなたが戻ってくただけで・・・」

シエルの瞳は潤い、彼女の頬を1つの雫が流れた。

ラルド「ゼロの体は元に戻るのか？」

シエル「うんまかせて。新しい体にサイバールフ化したゼロを入れるわ。それでOKなはずよ。」

サイバーエルフとは、人間で言う、魂のようなものだ。それを別の体・・・とはいっても機械の体に移植する。

ラルド「そうか、ゼロ。今までありがとう。楽しかったよ。」

ゼロ「ああ。俺もだ。」

シエル「行きましようか。ゼロ。」

ゼロ「ああ。少し待ってくれ。」

シエル「・・・分かったわ。」

ゼロ「ラルド。この世界で過ごしてきた俺は少しだけだが魔力が宿った。その魔力すべてをお前にやる。」

ラルド「いいのか？」

ゼロ「ああ、構わない。元々俺にはいらぬ力だ。向こうに行っても使えないだろうしな。」

ラルド「・・・分かった。ありがたくもらうよ・・・お前の力。」

ゼロ「受け取れ。」

瞬間彼の体に変化があった。1瞬だが、彼の体はゼロそのものに見えた。

ラルド「あれ・・・なんにも感じない・・・」

ゼロ「もともと俺の魔力は少ない。がしばらくすればその魔力が増大し、お前の力になるだろう。」

ラルド「ありがとう。」

ゼロ「・・・じゃあラルド・・・」

ラルド「ああ。みんなを守ってやってくれよ・・・」

ゼロ「ああ。目の前に敵が現れたなら・・・叩き斬るまでだ!!」

シエル「ありがとう。ラルド君。その力・・・大切に使ってあげてね。」

ラルド「シエルさん。ゼロのこと・・・皆の事・・・宜しく願います・・・」

彼の瞳には涙が溢れている。

ラルド「ゼロ!!・・・元気で・・・」

ゼロ「ああ。ラルド。いつかまた会えるといいな・・・」

ゼロを乗せたエアカーは深い闇へと消え。そこには1人の青年が立っていた。

ラルド「・・・信じるものために戦う。お前の思い・・・俺が受け継いだぞ・・・ゼロ」

2人で過ごした3年間の思い・・・素晴らしかったと、彼は今、実

感じている・・・

## 第9魔法：別れと新たな力・・・（後書き）

この作品が終わる。もしくは平行して

ロックマンゼロ 紅い英雄の軌跡

というタイトルでラルドと別れた後の作品を書きます。  
ゼロは死んだ？いやそれはないと思います。

ラグナロク撃破後、ゼロからの応答はなかったが彼は生存していた可能性が高いです。また、その後ガーディアンの一員として行動していた可能性がわずかながら考えられます。

なぜならZの劇中に出てくる、シエルがガーディアンを結成したという話が出てくる場面に、画像内に「ガーディアン司令官のシエル」とゼロが共にいることから。

このことからゼロは生きていて、何らかの方法で死にライブメタルになったと考えられます。

## 第10魔法：エルザ&ラルドVSナツ

ルーシイside

アイゼンヴァルトによるギルドマスターを狙ったララバイ事件は一躍、大ニュースとなり国中に知れわたったの。あんな大事件の中心に自分がいたなんて未だに信じられないけど、あたしはいつもと同じ日常を送っています。ラルドっていう人がそこら一带の生態系を完全に崩壊させたんだけど、しばらくすれば元に戻るらしいの。

アイゼンヴァルトの人たちは捕まったけどエリゴールだけはまだ捕まってないらしいのフェアリーテイルに復讐とかいなければいいけど・・・

でもフェアリーテイルは最高のギルドよ。だから心配しないでねママ。

グレイ「これで家賃7万」は安いな〜いいところ見つかったなルーシイ。」

ルーシイ「・・・不法侵入ーーーーー!!!!!!しかも人ん家でぬぐなーーーー!!」

グレイ「ぐほお。ちょっと待て・・・誤解だ・・・!!服脱いでから来たんだ。」

ルーシイ「帰れ!!!!」

もうなんのよフェアリーテイルは〜

グレイ「種発前に言ってたナツとエルザ&ラルドが戦うんだよ。」

ルーシィ「つちよ本気なの！？だったら早くいなくなっちゃ。」

そして私と変態は家をあとにした。

フェアリーテイル前

エルザ「こうしてお前と魔法をぶつけ合うのは何年ぶりだろうか・・・」

ナツ「あのときはがきだったんだ。今日こそお前に勝つ！！」

ラルド「本当にいいのか？2対1で？」

ナツ「ああ行くぞ！」

マスター「始めいっ！！」

ラルド「行くぞエルザ！！」

エルザ「ああ。」

ラルド「炎竜の鉄拳！！」ナツ「火竜の鉄拳！！」

ラルドとナツの拳が交じり合い爆発が起きた。

ナツ「つく!!」

ラルド「・・・パワーはナツが上か・・・だったら。エルザ!!」

エルザ「まかせろ!! 換装：天輪の鎧!! サークルソード!!」

ナツにあたる瞬間に

ナツ「火竜の咆哮!!」

ナツは飛んでくる剣を破壊しつくした。でも

ラルド「滅竜剣義：炎覇獄竜陣!!」

ナツ「ぐわあ!!」

瞬間ナツを巻き上がる炎の渦にラルドごと閉じ込め鳳凰の如く体炎を纏わせ一気に空高く飛んだ。

ラルド「勝負アリだ。ナツ。」

ナツ「くっそ〜。」

エルザ「だが強かったぞ。ナツ。今までで一番いい勝負だったんじゃないか？」

ナツ「どこがだよ。ダメージというダメージを与えていねえのに。」

ラルド「何いってやがる。俺の手を見るよ。」

彼の右拳は赤く染まっていた。

ラルド「お前のパワーには恐れいるよ。」

エルザ「そんなこと言っているが、全快ではなかったのだろう?」

ラルド「ドラゴンヴォイスは極力使いたくないんだよ。」

彼のドラゴンヴォイスにはまだ秘密があるようなんだけど・・・

ラルド「さあ帰るか。じゃあな。」

彼はバトルを終えて帰っていった。

## 第11魔法：修行とS級へ

ラルドside

ラルド「ドラゴンヴォイス!!」

ゼロと別れて1週間後、俺はゼロの魔力と俺の魔力をリンクさせるための修行を一ヶ月間始めているが・・・

だが成果はあがらず、代わりに疲労と責任感が芽生えてきた。

ラルド「だ〜〜!! チックショー!! 何でできねんだよ!!!」

単純な魔力の増幅すらも、自分の魔力のほうに力が入ってしまい、とてもではないがリンクさせるなんて不可能な話であった。しかし

ラルド「・・・もう一回だ!! ドラゴンヴォイス!!」

俺は諦めない。それが俺とゼロの『自分が信じるべきものを守る』という約束であり、相棒の魔力も使えないなんて、きつとゼロに笑われる。・・・だから俺は諦めない。

ラルド「・・・俺の魔力を全部使い切って、ゼロの魔力の増幅が出来るば・・・」

やってみる価値はある。しかし、どうなるか見当もつかない。それでも俺はやるっ。

ラルド「全魔力開放!! ドラゴンヴォイス!!!」

ラルドside終了

三人称side

ラルド「全魔力開放！！ドラゴンヴォイス！！」

刹那、彼の姿が一変した。今までのドラゴンヴォイスは紅い髪に染まり、体からは紅い魔力が溢れていた。

だが今の彼は違う。燃えるような紅いボディを身に纏い、ヘルメットから鮮烈な輝きを孕む金色で腰まである髪、白い金属製の柄と三角形を象った薄緑色の光の刃で構成された一本の剣を左手に持ち、右腰には白く輝くハンドガンのようなものを付けていた。

ラルド「・・・やった・・・出来たぞ・やったよ父さん・・・やったぞ・ゼ・・・ロ・・・」ボタン！！

低い音を出し彼は地にひれ伏し、元の姿に戻っていた。無理もない。自分の生命力に近い魔力を全て使い切り、なおかつゼロの魔力を底上げたのだ。・・・倒れないほうがおかしいであろう。しかしそんな彼を見守っていた、少女が1人・・・

三人称 side 終了

ルーシイ side

ラルド「・・・やった・・・出来たぞ・やったよ父さん・・・やったぞ・ゼ・ロ・・・」ボタン！！

ラルドが倒れた。

ルーシイ「ラルド！！」

私は駆け寄り、彼の容態を確認した。

ラルド「・・・ルー・・・シイ・・・か？・・・」

ルーシイ「ええそうよ。私が見ていたからよかったものを。どうするつもりだったのよ。」

私はラルドに肩を貸し、「私の家に行つて、少し休みましょぅ？」  
と言った。

ラルド「・・・見・・・てた？・・・お・れを・・・か？」

ルーシィ「／／／つえ、ええまあ・・・」

ラルド「あり・・・が・・・と・・・う・・・な。ルーシィ・・・」

ルーシィ「・・・どういたしまして。あなたがいない間大変だったのよ？ミストガンっていう人が来るし、ラクサスがナツに喧嘩うつてマスターがちょっと怒るし、ナツなんか「S級にいきて〜!!」って言うって大変だったのよ。」

ラルド「そうか。」

ルーシィ宅

ナツ&ハッピー「おかえり」「あいさー!!」

彼らは不法侵入し私の部屋で筋トレしていた。

ルーシィ「私の部屋ー！！！！」

私は前回同様、回し蹴り&空中ジャンプで顔面破壊を狙った！！

ナツ&ハッピー「くほう！！！！」

ラルド「なあ……寝っころばっていいか？」

ルーシィ「ああ。そこで寝て？」

ラルド「……ああ」

ナツ「俺決めたんだ、ルーシィ、ラルド。」

ラルド&ルーシィ「??？」

ナツ「S級に行くぞ!!!ルーシィ、ラルド。」

ハッピーがS級のクエストボードに張ってあつたらろう用紙を見せてきた。

ラルド&ルーシィ「どうしたんだよそれ……!!」

これが私たちの初のS級クエストになった。

## 第12魔法・悪魔の島 ガルナ島へ

ルーシイside

ルーシイ「ちよつとどういう事?!?!?」

ハッピー「勝手に取ってきたんだ、オイラが。」

ルーシイ「ドロボー猫……!!!!!!」

ナツ「とりあえず初めてだからな。2階で一番安い仕事にしたんだ。それでも700万J<ジユエル>だぞ。」

ルーシイ「ダメよ!!あたしたちにはS級に行く資格はないのよ。」

ナツ「これが成功したらじっちゃんも認めてくれるだろ。」

ルーシイ「本当にいつもメチャクチャなんだから。自分のギルドのルールくらい守りなさいよね。私は行かない。二人でどうぞ。」

ナツ「……ラルドは?」

私の布団で寝ていたラルドはゆっくりと起き上がり、

ラルド「……そんな事……愚問だな。」

やっぱりラルドね。ちゃんとしていると言っか、なんと言っか……

もちろん行くに決まってるだろう?何を聞いてんだよ。」

ルーシィ「つて行くんかい!!!!」

ラルド「ああもちろん。その2階とやらに行きたいし、皆で行ったら楽しいし、いつてみようぜ?」

ハッピー「あい。島を救ってほしい、つて仕事だよ?」

ナツ「行ってみようぜ?」

ルーシィ&ラルド「島?」「」

ナツ「呪われた島、ガルナ等。」

ルーシィ「呪・・・!!絶対に行かないっ!!!!」

ナツ「ちえーっ!!じゃあ帰ろ」「ハッピー「あい。」

ラルド「あ、俺も行くわナツ。今日泊めてくれや。」

彼らは窓から飛び降りた。

ルーシィ「あれ・・・っ!!!?紙おきつばなし?」

そうだこれでは私が

「盗んだみたいじゃない!!どうしょおー!!・・・お?」

私はふと依頼書目が行った。そこには「報酬700万」+金色の鍵、



ルーシィ「大丈夫よ。・・・多分。」

この時の俺の予想は見事的中した。

船乗り「何しに行くか知らねえが、あそこに行きたがる奴はいねえよ。海賊だつて避けて通る。」

今ので何人目だろうかずつとこのよな返答だ。

ルーシィ「はあ〜どうしよう。」

ナツ「決まりだな泳いでいくぞ。」

ラルド「俺もだ。それが一番てつとり速いだろう。」

ルーシィ「ラルドまで〜」

ガリ　ん？誰だ？

グレイ「見つけた。」

ルーシィ「グレイ!!??どうしてここに!?!?」

グレイ「ってことはマスターにばれたか？」

グレイ「連れ戻して来いとジーさんの命令だ。いまならまだ破門を免れるかもしれねえ。」

ルーシイ「破門!!」

ナツ「いやだねオレはS級に行くんだ!!」

グレイ「お前らの実力じゃあ無理だからS級って言うんだよ!!  
・それにこの事がエルザに知られたら・・・」

ルーシイ&ハッピー「エルザにしたら?」

ナツ「俺はエルザを見返すんだ!!こんなトコまで来て引き下がるわけにはいかねえ!!」

グレイ「マスター直命だ!!引きずってでも連れ戻す!!怪我しても文句いうなよ!!」

ナツ「やんのかコラア!!」

ラルド「今回は引けない。悪いが追い返してやるよ。」

グレイは右手に氷を、ナツは左手に炎を、俺はメドロアを打つ準備をしたが・・・

船乗り「魔法?あんたら魔導士だったのか?」

ナツ「ん?ああ」

船乗り「まさか・・・島の呪いを解くために・・・」

ナツ「オウ!!」

ルーシー「まあ一応・・・」  
ラルド「S級なんてくそくらえだよ。俺たちが解いてやる!!」  
グレイ「行かせねーよ!!」

船乗りの人は体を震えさせ、気になる一言を発した。

船乗り「・・・乗りなさい。」

ラルド「ハア!？」

ナツ「マジで!？」

ルーシー「おおっ!!」

グレイ「何!？」

刹那ナツと俺は行動に移った。

ラルド「ナツ!!」

ナツ「オウ!!」

グレイ「ふんごっ!!」

俺とナツはそれぞれ反対方向からグレイの顔面を蹴った。  
結果変態は気絶した・・・

ラルド「乗せろ!!」

ルーシー「ちょっと、グレイも連れて行くの？」

当たり前だ!!次はきつと・・・

ナツ「コイツが戻ったら次はエルザが来る!!」

ルーシィ「ヒイイツ!!!」

そういう事だ・・・俺はまだ死にたくはない・・・あの風紀委員が来たら・・・死ぬ・・・

ラルド「S級の島に行くぞ!!!」

ナツ「オウ!!!」

数時間後 船の上で変態が目を覚ましたちよつと後

ルーシィ「今更なんだけど・・・ちよつと怖くなってきた。」

グレイ「てめ・・・人を巻き込んでおいて何言ってるやがる・・・」

ラルド「心配するな。こいつも現地につけば、一緒に行こうとか言い出すぞ?」

グレイ「つーかオッサン!!!何で急に船を出しやがった。」

そうだ、始めコイツは『海賊でも避けて通る』と言った。つまりは行きたくなかったはずだ。それなのにどうして・・・

船乗り「俺の名前はボボ・・・かつてはあの島の人間だった・・・逃げ出したんだ、あの忌まわしき呪いの島を・・・」

ラルド「その呪いって・・・なんだ?」

船乗り「禍は君たちにも降りかかる。あの島に行くことはそういう事だ。君たちに解けるかね？」

そう言つて、船乗りは自分の左腕を見せてきた。

船乗り「悪魔の呪いを。」

彼の左腕はララバイによく似ていた。肩から肘までは木のようだが、肘から先は、悪魔と呼ぶに相応しく、漆黒の色に染まっていた。

ここから始まるS級クエスト。これはS級ですむほど楽な仕事ではないと後々実感することになった。

月明かりが照らす悪魔の島

ガルナ島

俺たちが向かうその島の一角で

なにやら不思議な儀式が行われているとは

この時はまだ、だれも知らなかったんだ・・・

### 第13魔法・厄災の悪魔 デリオラ（前書き）

2話と6話を少し編集しました。

少し読みやすくなったと思います。

編集に長い文章で時間がかかってしまいました。

夏休みになり、このような更新速度ではまずいと思います・・・

明日から積極的に行きたいと思います。

追伸：感想ページをユーザーからのみに間違えてしてしまいました  
が、直して皆様から感想をうけつけれるようにしました。誤字、脱  
字があれば指導してくださいと申していましたが、すみませんでし  
た！！

それでは、本編スタート！！

### 第13魔法・厄災の悪魔 デリオラ

ラルドside

グレイ「おっさん・・・その腕・・・」

ルーシィ「呪いって・・・まさか・・・その・・・」

船から、1つのしまのようなものが見えた。

船乗り「・・・あれがガルナ島だ・・・」

ルーシィ「ねえおじさん・・・ってあれ？いない？」

グレイ「落ちた!?!」

ラルド「つち。ハッピー!?!」

ハッピー「あいさー!?!」

頼むぞハッピー。まだ気配はあるんだ、きつと海の中に・・・

ハッピー「ぷはあ・・・いないよ?」

ラルド「なんだと!?!じゃあどこに?」

ルーシィ「うそ・・・どうなってんのよ・・・」

ラルド「大丈夫だ!まだ気配はあるきつとどこかに・・・って・・・」

うそだろ？」

ナツ「ん？何の音？」（酔っています）

ルーシィ「きゃあああ！！」グレイ「大波！！」

見てのとおり、俺たちの前には今まで見た事もないような大波が押し寄せてきた。

ラルド「くそっ！！任せろ！行くぞ、右手に宿りし全てを燃やし尽くす竜の炎よ、左手に宿りし全てを切り刻む竜の風よ、二つをあわせて、喰いな！消滅魔法メドロ・・・」ハッピー「怖いよー！！ラルドー！！（涙）」ちよっ！！ハッピーどけ！！」

説明するまでもないだろう、ハッピーが俺の顔一面に抱きついてる事は・・・

グレイ「飲まれるぞ！！」ルーシィ「ハッピー！！船を持ち上げるのよー！！」  
ラルド「それ以前にどけ！ハッピー！！」ハッピー「無理だよー！！怖いよー！！」

つど！つと俺たちの視界いっぱいに覆いかぶさった瞬間。

ルーシィ「きゃあああ！！」グレイ「くそっ！！！！てめえらのせいだー！！」  
ラルド「ちよつと待て！！死ぬー！！！！！！」

そのわずか数秒後みんなは意識を失った・・・

・・・翌日・・・

ラルド「・・・つう、つく・・・あれ？ここは・・・！！ 皆無事か！？」

辺りを見渡すとすでにみんな起きていた。

ルーシィ「ラルドが一番最後に起きたのよ？」

ラルド「・・・あ。そうなんだ。でどうすんだ？」

俺はもう一つ気になる事がある・・・あの船乗りだ・・・気配はあったはずなのに、姿が見えなかった・・・こんなこと・・・初めてだ。そう「気配」はあったんだ。

ルーシィ「うん。それを話していて簡単に説明するよ？ここはもう気づいていると思うけど、ガルナ島よ。まずはこの島唯一の村・・・つまり今回の依頼主がいるところに行こうと思うの？あの変態と一緒に・・・」

ラルド「・・・行ったとおりだろう？」

グレイ「そんな事はもういいだろう？それより・・・行くつぜ。」

一同「''''オウ！！''''」

ラルド「……ってなんでお前が仕切ってたよ。」

グレイ「いいじゃねーか……別に」

それにしても……呪いか……初仕事でえらい目に会いそうだけ  
……

夕方、日が沈みかけた頃……

グレイ「立ち入り禁止ってどんな村だよ……」

同感だ……

ルーシィ「開けてくださーい!!」

返事がない、ただの屍のようだ……すまん……

ナツ「まいったなあ」

ラルド「なら壊そうぜ?」

ナツ「お!いいね、そ」『ルーシィ』「ダメ!!」『……』

村の人「何者だ。」

っお。返事があつた・・・

ラルド「魔導士ギルドのフェアリーテイルだ。依頼を受けてここに来た。」

村の人「依頼が受理された報告は入っていない。」

あ、ヤベエな。考えてなかった。

グレイ「何かの手違いで遅れてんだろう？村に入れねえなら帰るけど？」

ナツ「オレは帰らんぞ！！」グレイ「黙ってる。」

村の人「・・・全員紋章を見せる。」

さすがグレイだ、頭が回るね〜

皆はフェアリーテイルの紋章を村の人に見えるように見せた。

村の人「・・・入りなさい。村長を呼んでこよう。」

村の中に案内された俺たち・・・そこでもう一度「悪魔の呪い」を見た

村長「よくぞ来てくださつた。魔導士の方々・・・さっそくですが、これを見てください。・・・皆の者、布を取りなさい。」ばさっ

・・・ある者は腕、ある者は足、ある者は頭、各々場所は違つが、たしかにそれは人間のそれとは一変していた・・・

グレイ「やはり」

ナツ「スゲエモミアゲ！！！」

グレイ「そこじゃねーよ！！！」

ラルド「・・・漫才やつてる場合じゃねえだろう。」

俺は冷静にツツコんだ。

村長「・・・驚かしてしまつたかな？この島にいる者全て・・・犬や鳥も例外なく、このような病にかかつております。」

グレイ「言葉を返すようだが何を根拠に『呪い』だと？やはり病と考えられないのか？」

村長「何十人という医者に見てもらいましたが・・・このような病はないとのこと。それにこんな事になつてしまつたのは月の魔力が原因ではないかと考えています。」

ルーシィ「月の魔力？」

それは気になる話だな何を根拠に・・・いったいなんだこの島は。

村長「元々この島は古代からの月の光を蓄積し、島全体が月のように輝くすばらしい島でした。しかし数年前、突然月の色が紫に変わり始めたのです。」

ナツ「紫？そんな月は見たことがねーぞ。」

ラルド「俺もだ。いろんなところを旅してきたが・・・そんな話は一度も聞いたことがない。」

村長「外から来た者は皆そういのです。だが・・・現にこの島の月は紫になった・・・そして紫の月が現れてからワシ等の姿が変わり始めた。」

ハッピー「月が出てきた!!!」

紫の月・・・

グレイ「気味悪いな・・・コイツは・・・」

村長「これは月の魔力の呪いなのです。」

刹那・・・村の人々が苦しみました。

次の瞬間、彼等は悪魔そのものになっていた。全身漆黒の体表や、棘のついた腕や、斑点のある足や角などが・・・

これは何だ？俺は感じた、こいつ等は人間ではない。と

村長「驚かせて申し訳ない・・・紫の月が出ている間、ワシらはこのような醜い悪魔の姿になってしまふのです。これを、呪いといわず何と言えよいのでしょうか？朝になれば皆元の姿に戻ります。・・・しかし中は元に戻れず心まで失ってしまうのです。」

ルーシィ「そんな・・・」

村長「心を失い、魔物と化してしまった者は殺すと決めたのです。」

ヒデエ・・・なんで・・・なんでそんな事が出来るんだよ・・・

親であるレギオンと会えなくなった彼だから分かる・・・そんなことあってはならないと・・・たくさんの闇ギルドを潰しまわった彼でも、人や生き物は・・・決して殺さなかった。それが彼の決意であり、父に会いたいがための・・・道しるべであったのだ。それを否定された気持ちになったのだ・・・

ナツ「元に戻るかもしれねえのにか!!!?」

村長「放っておけば皆が殺され、幽閉しても牢など壊してしまう。」

だから・・・だからワシも息を殺しました。心まで悪魔になった息子を・・・」

そう言つて息子の写真を見せてきた。

ルーシィ「その人・・・ええ!!!?だつて私たちその人『グレイ』しつようやく消えちまつた理由が分かつたぜ、そりゃあ・・・うかばれねえなあ・・・」(幽霊?・・・)」

そのとおりだ、その写真には昨日の船乗り・・・ボボがいた。幽霊か・・・それは違うな・・・昨日は心配があつたんだ。必ずいるはずだ。

村長「さぞ有名な魔導士とお見受けします。どうか島を救ってください・・・このままでは全員心を奪われ、悪魔に・・・」

ラルド「そんな事させねえ!!」

村長「私たちの呪いを解く方法はただひとつ・・・月を破壊してください。」

場所は変わり宿へ・・・

ハッピー「見れば見るほど不思議な月だね。」

ルーシィ「ハッピー早く窓閉めなさいよ。月の光を浴びすぎると、あたしたち悪魔になっちゃうのよ?」

ナツ「それにしてもまいったな。」

グレイ「さすがに月を壊せつてのはな・・・」

ナツ「何発殴れば壊れるのか、見当もつかねえ。」

ラルド「俺のエンシエント・ノヴァならこ壊れるかもな・・・」

グレイ「お前ら壊す気かよ!!無理なんだよ、そもそも月を破壊するなんてな。」

ルーシィ「そうねえさすがにどんな魔導士でもそれは無理よ・・・」

ナツ「でも月を壊せつて依頼だぞ。できねえってんじゃフェアリーテイルの名折れだろう?」

グレイ「できねえモンはできねえんだよ!!第一どうやって月まで行くんだよ。」

ラルド「それもそうだな・・・」

ルーシィ「『つきを壊せ』っていつのはきつと、被害者の観点から出てくる発想じゃないかしら?きつと何かほかに呪いを解く方法があるはずよ。」

だといんだがな・・・

ナツ「よし!!だったらあしたは島を探検だ!!」

ハッピー「あいさー!!」

グレイ「考えるのは明日だ・・・」

ルーシィ「そうねあたしも眠たいし・・・寝よ・・・ってこんな獣と変態の間でどうやって寝ると!!??ってあれ?ラルドは?」

ラルドside out

三人称side

紫の月が出ている中で彼・・・ラルド・エグフィードは空を見上げていた。

ラルド「(父さん・・・何か方法はあるよな。俺は村の人達を助けてあげたい、頼む・・・力を貸してくれ・・・)」

そんな事を思っている彼に不意に近づく影が・・・

ルーシイ「こんなところでなにしているの?」

ラルド「・・・ルーシイか。いやちよつとな・・・」

ルーシイは何かを考えてこんな事をいった。

ル・シイ「ねえラルド。ナツのお父さんのドラゴン<イグニール>は火竜つて字があつたのラルドのお父さんのレギオンはどんな字があるの?」

ラルド「・・・分からないんだ。俺は父さんと過ごした日々は覚えているのに、魔法に関してと、父さんの字と、この剣の名前を知らないんだ。いや、覚えていないのかな?」

ルーシイ「……………そうなんだ。ラルドは2つの滅竜魔法が使えたよね。」

ラルド「ああ。昔からだ・・・」

ルーシイは少し考えて1つのことを言った。

ルーシイ「私も一緒に考えるよ?一緒に思い出そうよ。」

ラルド「ルーシィ・・・ありがとう。」

ルーシィ「うん。」

ルーシィは飛び切りの笑顔で言った。後に彼女の魔法が原因で、彼の本当の力を目覚めさせるとは、誰も思いもしなかったであろう。

翌日

ナツ「早エよ」

グレイ「まだめっちゃ朝じゃねーか・・・」

ラルド「ふあ〜・・・」

ルーシィ「誰のせいで眠れなかったと思っているのよ！！出発よ出発！！猫！！起きろ！！！！」

ハッピー「あい」

今は日が昇り初めてすぐである。

村人「早いですね。辺りが悪魔だらけでは眠れませんでしたか？」

彼は皮肉っぽく言った。

ルーシィ「そうじゃないの気にしないで。月を壊す前に島を少し調査してもいいですか？」

村人「どうぞ。しかし森の中にある・・・あ、行っちゃた。」

三人称 s i d e o u t

ラルド s i d e 森の中へ

グレイ「ん？」

ナツ「何だ？」

ラルド「気をつける。何かいる!!！」

ちなみにルーシィはホロロギウムという柱時計のような精霊にはいつている。

チューー

えっ!?!これはいつたいなんでShouka?メイド服を着た身長40メートルくらいの巨大ねずみがそこにいました。

グレイ「でかー！ー！ー！！！」

ホロロギウム「『ルーシィ「あんたたち早くやっつけなさいよ」』と申しております。」

ルーシィはホロロギウムの中に入っている間は声が外に届かないので、ホロロギウムが代わりに話してくれる。

ナツ「何か吐き出すぞ。」

ラルド「グレイ！！！」

グレイ「ああ、俺のアイスメイク：シールドで・・・」

ねずみ「ぷはあ〜〜！！！」

言うまでもないだろう。口臭ビームだ。

グレイ「くさー！ー！！何だこのにおいはあ〜！！！！ナツ！！ラルド！！なさけねえぞ！！そっか、お前ら鼻いいもんな！！！！逃げろ！！！！！！」

ルーシィ「ひいひい！！！」

ホロロギウムはダウンした。口臭ビームによって・・・

ラルド「くそ！！なんかねえのかよ？」

グレイ「任せろ！！アイスメイク：フロア！！！」

グレイは地面を凍らせて、ネズミを滑らせた。

ナツ「ナイス！！！！」

ルーシィ「あ！見て！！建物がある！今のうちにあそこに避難しましょう！！！」

ラルド&グレイ&ナツ「「今のうちにボコるんだ！！！！！！！！！」」

ルーシィ「……………」

建物の中へ

ルーシィ「うわー広いね……………」

グレイ「ぼろぼろじゃねーか。」

ナツ「いつの時代のもんだあコリヤ。」

ラルド「……………人の気配がする。中には魔導士もいるな……………」

ナツ「見るよなんか月の紋章があるぞ。」

グレイ「この島は元々月の島といわれていたらしいからな。」

ルーシィ「月の島に月の呪い……………月の紋章。この遺跡は怪しいわ

ね。」

ハッピー「ルーシイ見てー？」

見るとそこには骨を持ったハッピーが・・・

ルーシイ「犬か!！」

ナツ「それにしてもボロいな・・・これ床とか大丈夫か？」

ガんと地面に一蹴り。刹那地面に亀裂が走り・・・割れた・・・ベ  
こんと

ルーシイ「ばかーーーーー!!!!!!」

ナツ「なんて根性のねえ床なんだーーーー!!」

グレイ「床に根性もくそもあるかよ!！」

ラルド「つーかどこまで落ちるんだ!?!?コレ!！」

ルーシイ「ハッピーなんかならないの?」

ハッピーは先ほどの骨をのどに詰まらせている。

ルーシイ「食べられるモンじゃないからーーーー!!」

地下へ

ラルド「オイ！！皆大丈夫か！？」

ナツ「お前が最後だよ。」

ラルド「・・・そつか・・・」

いつも最後の目が覚めるんだよな！

ナツ「せつかくだから探検しようぜ。」

グレイ「オイ！！これ以上暴れんじゃねえ！！」

ナツ「お？何だ？あれ・・・」

グレイ「どうし・・・」

ラルド「！！コイツは！！？」

皆が目を向けた先にはゼレフの魔法である、厄災の悪魔 デリオラが凍っていた。

グレイ「デリオラ！！？ばかな！！！何でデリオラがここに！！？あり得ねえ！！こんな所にある訳がねえんだ！！あれは・・・あれはっ！！！」

ルーシィ「ちよつと落ち着いてグレイ！！ねえなんなのコイツは！！？」

グレイ「デリオラ・・・厄災の悪魔・・・あのとこの姿のままだ・・・」

・どつなつてやがる……」

カッカッカッルーシィ「!しっ誰か来たわ!!隠れましょう……」

俺たちは岩場に隠れ、相手が来るのを待った……

????「人の声した……この辺り……」

????2「おおーん」

1人はオールバックの背が小さく、眉がいわゆるくらい太い男と、  
変な耳飾をつけている男がいた……

????「昼……眠い……」

????2「おおーん。」

????「オマエ月の雫くムーンドリップ>浴びてね?」

????2「浴びてねえよ!!!飾りだよ!!!分かれよ!!!!!!」

????「冗談だ。からかつただけだバカ。」

????2「おおーん。」

ルーシィ「ムーンドリップ?呪いのことかしら?」

……ムーンドリップ……たしかあれは……つくそ!!!思い出

せない

?????3「ユウカさんトビーさん、悲しい事ですわ。」

ユウカ「シエリー。」

トビー「おおーん。」

シエリー「アンジェリカが何者かにやられました・・・」

トビー「ネズミだよ!!!」

シエリー「ネズミじゃありません・・・アンジェリカは闇の中を駆ける狩人なのです。そして・・・愛。」

ルーシィ「強烈に痛い奴が出てきたわね。」

ナツ「あいつらこの島のモンじゃねえ。匂いが違う。」

ラルド「ああ・・・しかも呪われている感じがしない。」

ユウカ「侵入者・・・か」

シエリー「もうすぐお月様の光が集まるというのに・・・なんて悲

しい事なんでしょう。零帝様のお耳に入る前に駆逐いたしましょう。  
そう・・・お月様が姿を現すまでに・・・」

！！！！そつか月の魔力だ！！！！そこまでは思い出した後は・・・

ユウカ「だな・・・」

トビー「おおーん。」

ラルド「行ったか・・・」

ナツ「何だよ。とっ捕まえているいる聞き出せばよかつたんだ。」

ルーシィ「まだよ。もう少しもう少し様子を見ましょう。」

ややこしくなってきたなあ。それにしてもあいつらはいったい何を  
する気なんだ？

グレイ「くそ・・・あいつ等デリオラを何のためにデリオラをこん  
なところに持つてきやがつたんだ・・・つか、どうやって封印の  
場所を見つけたんだ？」

封印だと。デリオラを封印した者がいるとは聞いたが、まさか本当  
とはな・・・

グレイ「コイツは北大陸の氷山に封印されていた。10年前・・・  
イスバン地方を荒らしまつた不死身の悪魔・・・俺に魔法を教え  
てくれた師匠、ウルが命をかけて封じた悪魔だ。この島の呪いとかど

う関係しているかわからねえが……これはこんな所にあつち  
やならねえもんだ。零帝……何者だ……ウルの名を汚す気なら  
たたじゃすまさねえぞ……!!」

始まるのだ……過去と過去の戦いが……俺たちが水を差しては  
いけない、覚悟を……

### 第13魔法・厄災の悪魔 デリオラ（後書き）

ラルドの剣の名前を考えているのですがいい名前が見つかりません。

そこで、皆さんにこの剣の名前を決めるためにアンケートをとりたいと思います。この剣の特徴は

？刀身が蒼く、蒼穹の空を思ふような色合いの剣

？命令一つで魔物のような顔が剣から出てきて相手の魔力を喰らい、自分の魔力へと変える

の2つです。カタカナ、漢字、問いません。

期限は、ファントムロードのジョゼとラルドの一騎打ちをする時くらいがbestです。

アンケートの方法は感想ページの一言のところにおねがいします。

皆さん、どうか宜しくお願いします。

## 第14魔法・氷対氷 過去の因縁

三人称 said

ナツ「オマエの師匠が封じた悪魔？」

グレイ「ああ・・・間違いない・・・」

ルーシィ「もしかして、島の呪いって、この悪魔のせいなの？」

さすがルーシィというべきかそれは1つの答えでもあろう・・・

ナツ「おし。そーゆー事なら、この悪魔ぶっ倒してみつか。

その瞬間グレイの右拳がナツの頬に振りかざされた。

ナツ「ぐお！！（ドガア！！）グレイ！！てめえ・・・何しやがる  
！！！！」

グレイ「火の魔導士がコレに近づくんじゃねえ・・・氷が溶けて、  
デリオラが暴れちまう・・・」

ラルド「簡単に溶けてしまふのか？ソレは？」

彼の言い分はもっともだ。火の魔法でコイツが暴れるのなら、評議  
員はとうの昔に2重に封印をかけ、隔離したはずである。

グレイ「！！いや・・・ウルはコイツに絶対氷結くアイスドシエ  
ル>つー魔法をかけた。ソレは溶ける事のない氷・・・いかなる

爆炎の魔法もつてしても溶かす事の出来ない氷だ・・・溶かせないと知ってて、なぜコレを持ち出した？」

ナツ「なんだよ。殴られ損じゃねえか。」

ラルド「簡単だ。さっきの奴を追えばいい。」

ソレも一理ある。だが今ベストなのは・・・

グレイ「・・・月が出るまでここで待つんだ。島の呪いもデリオラも全て月に関係しているはず。奴等ももうすぐ、月の光が集まると言っていた。」

今現時点では、奴らの目的もはっきりしていないのだから、得策と  
言えよう。

ナツ「オレは無理だ！！追いかける！！！！」

グガーっとすぐに眠った獣・・・

ルーシィ「本当・・・コイツって本能のままに生きているわよね。」

ハッピー「あい。」

グレイ「(ウル・・・オマエの名を汚すような奴をそして、オマエ自身を奪おうとしている奴等を・・・許さねえ！！)」



そこには総勢約60名ほどの人が、儀式のような物をしていた。

ルーシィ「月！？本当に月の光を集めているの？それをデリオラに当ててどうする気なの？」

ラルド「ベリア語の呪文・・・！！思い出した・・・こいつらムーンドリップを使って、デリオラを復活させる気なんだ。」

ナツ「何！？」

グレイ「バカな・・・アイスドシエルは絶対に解けない魔法なんだぞ・・・」

ラルド「ソレを溶かすのがムーンドリップ。1つに収束された月の魔力は、いかなる魔法をも解除する事が出来る・・・」

ナツ「あいつ等ア・・・」

ルーシィ「待つて。誰か来たわ。」

ユウカ「くそ・・・昼起きたせいで眠い。けっきょく侵入者も見つからなかったしな。」

トビー「本当にいたのかよっ！！」

シェリー「悲しいことですわ・・・零帝様。昼に侵入者がいたようなのですが・・・取り逃がしてしまいました。」

零帝「侵入者……」

グレイ「(?!?) この声……」

ナツ「あいつが零帝？」

ラルド「だろうな。周りの奴と魔力が違いすぎる……かなり強いぞ……あいつは。あの儀式みてえのをしているやつ等は魔導士じゃねえな……まずは零帝を片付けよう。」

ルーシィ「待つて。話はまだよ……」

零帝「デリオラの復活まだか？」

シェリー「この調子では、今日か明日には……」

零帝「いよいよだな……」

グレイ「(間違いない!あいつは……あいつは!!!)(」

零帝「侵入者の件だがここに来て邪魔されたくないな。この島は外れにある村しか人はいないはず……村を消して来い。」

一同「了解」

ナツ「何!?!」

ラルド「ナツ!!頼む!!」

ナツ「え?何を・・・分かった!!」

ナツは天に向かってブレスを吐き、叫んだ。

ナツ「邪魔しに来たのはおれ達だ!!」

ルーシィ「ナイス!!ナツ。」

ラルド「行くぞ皆。」

零帝「何をしている。とつとつ村を消して来い。邪魔する者、それを企てた者全て敵だ。」

ナツ「なんでえ!!?!」

次の瞬間、雄たけびを上げながら走る者が1人・・・

グレイ「てめええええ!!!!そのくだらねえ儀式とやらを止めやがれええ!!!!」

零帝「フン。」

お互いが打ち出した魔法は同じ魔法であった。氷VS氷・・・互いの氷は地面を這いながら、ぶつかり合うと上に上昇し砕け散った・

グレイ「リオン。てめえ自分が何をやっているか分かってるのか？」

リオン「ふふ。久しいな、グレイ。」

ラルド「何！？」

グレイ「何のまねだよ！！コレあ！！」

リオン「村人が送り込んできた魔導士がまだかオマエとは、知って来たのか？偶然か？早く行け、ここはオレ一人で十分だ。」

零帝リオン以外の者たちは村へと向かった。

ナツ「行かせるか。」

グレイ「よせナツ！！動くな！！」

刹那ナツの体が頭、腕、足を除く部分がこおった。

グレイ「ハッピー！！ルーシィを頼む。」

ハッピー「あい！..！」

ラルド「炎竜の鉄拳！！..！」

リオンは氷のシールドを瞬時に作り出し、防御した。

リオン「隙をつくって女と猫を逃がしたか・・・」

ナツ「フェアリーテイルの魔導士を甘く見るんじゃないやねえぞコラア！  
！あ？どうおおおおお！！何しやがる！！グレーーーーーー！  
イ！！！」

グレイは凍ったナツを蹴りとばし突き落とした。

リオン「相変わらず無茶をする。仲間ではないのか？」

グレイ「アレはその気になれば氷ごと中身を破壊できる魔法だろ。」

リオン「なるほど。それでオレの魔力の届かない所へやった訳かやればできるじゃないか。」

グレイ「いい加減先輩面すんのやめてくんねえかな。リオン、おまえはもうウルの子じゃねえ。」

リオン「おまえもさグレイ。ウルはもうこの世にはいない。」

顔につけていた甲冑のようなもの脱ぎそう言った。

グレイ「デリオラを封じるために命を落としたんだ！！！！ウルが残した物をてめえは壊そうとしているんだ！！！！」

リオン「記憶をすりかえるなグレイ。ウルはおまえが殺したんだ。

よくおめおめと生きられたものだな。名前を口にするのもおこがましい。」

そう言いリオンはグレイに氷の塊を投げつけ、吹っ飛んだ。

ラルド「グレイ!!!」

グレイ「リ・・・リオン。」

リオン「どうした？うしろめたくて手を出せんか？ならば邪魔しないでほしいな、俺はデリオラを復活させる。」

グレイ「・・・させねえよ。」

だがグレイの瞳には迷いがあった・・・

グレイ「・・・ラルド・・・」

ラルド「分かってるよ。手は出すな、だろう？ここで見ておく。思いっきりやれ。」

グレイ「ああ。」

氷対氷の決闘が幕を開ける。

リオン「行くぞグレイ、久しぶりに手合わせをしよう。アイスメイク：イーグル!!!」

グレイ「アイスメイク：シールド!!!」

リオンは鳥を、グレイは盾を造形したが、リオンの魔法はグレイの盾に当たることなく、盾の周りからグレイへと攻撃した。

リオン「おまえは物質の造形が得意だった、‘静’のアイスメイク。オレの造形は生物・・・‘動’のアイスメイク、動き回る氷だと忘れたか。」

グレイ「ぐはあ！！つくアイスメイク：ハンマー！！」

リオン「アイスメイク：エイプ！！」

今度はグレイが攻め、リオンが守ったが、グレイの魔法はリオンへと届くことはなく、猿の氷に阻まれた。

リオン「話にならん、造形魔法に両手を使うのも相変わらずだ。」

グレイ「ウルのお教えだろ。片手での造形は不完全でバランスもよくねえ。」

リオン「オレは特別なんだ。ウル力も、とうの昔に超えてしまった。」

グレイ「うぬぼれんなよ・・・」

リオン「その言葉おまえに返そう。一度でもオレに攻撃を当てた事があつたかな。」

グレイ「あの頃と一緒にすんじゃねえ！！アイスメイク：アイスゲイザー！！」

グレイはリオンの氷の間欠泉を当てた・・・はずだった。

リオン「一緒だ・・・俺はおまえの兄弟子でありおまえよりも強かった。オレは片手で造形ができたがおまえには出来なかった。なんも変わらん。互いの道は違えど、オレ達の時間はあの頃のまま凍りついている。アイスメイク：スノードラゴン！」

グレイ「ぐはあ！！！」

リオンは氷の竜を作り出し、グレイに当てた。

リオン「・・・だからオレは氷を溶かす。塞がれた道を歩き出す為に。ウルはオレの目標だった。ウルを超える事がオレの目標だった。それをおまえに奪われた。もう二度とウルを超える事は出来ないと思っていたんだ。だが、1つだけ方法があった。ウルですら倒せなかった・・・あのデリオラを倒す事が出来れば・・・オレはウルを超えるられる。夢の続きを見られるんだ。」

グレイ「正気か？そんな事が目的だったのか！！？デリオラの・・・恐ろしさはおまえもよく知っているはずだ。」

その瞬間、リオンの顔が引きつった。

グレイ「や・・・やめる・・・無理だ・・・！！！」

リオン「『無理だ』『やめる』・・・だとう？」

グレイ「うわああああっ！！！！！」

リオンはグレイの足元から氷のやりのような物が飛び出た。

リオン「・・・あの時、オレ達もおまえに同じ言葉をかけた。忘れたわけであるまいな・・・おまえがデリオラなんか挑んだからウルが死んだんだぞ！！！！おまえにウルの名を口にする・・・資格はない！！！！消える！！！！消え失せる！！！！」

リオンはどこかに消えていった。

ラルド「大丈夫か？グレイ・・・今応急処置をするからな・・・嵐竜の吐息！！」

グレイの体にある傷が少しだけ回復した。

そこにナツもやってきた。

ナツ「だせえな・・・派手にやられやがって。」

グレイ「ナツ・・・オマエ・・・なんで・・・ここに・・・」

ナツ「村がどつちかわかんねえから、ここまで上ってきたんだよ。」

ナツはグレイを背負ってから言った。

グレイ「・・・ナツ・・・ラルド。」

ナツ「あ？」

ラルド「……………」

グレイ「オレにはおまえらの事……言えねえ……何も……言えねえ………」

グレイは涙を流しそう言った……

ナツ「負けたくらいでぐじぐじしてんじゃねえ！！オレ達はフェアリーテイルだ！！止まる事を知らねえギルドだ！！走り続けなきゃ……生きられねえんだよ！！！」

ラルド「……迷う事もある。そんな時は仲間を……俺達を……そして自分を信じる。さっき負けたのは、迷いがあったからだ。まだ時間はある……ゆっくり考える………」

そして彼等は、村へと走っていった。物語は加速する。

## 第15魔法・過去の思いは今に・・・

ラルドsideガルナ島の村

ラルド「・・・なんだこれは・・・」

俺は驚いた・・・だっていま自分たちの体が浮き上がったような感覚になり、そして落ちていった。

ナツ「痛つて〜。誰だよこんなことしたの。」

ラルド「ルーシイに決まってるだろう。あいつバカだし。」

ナツ「あのやるー、後で一発・・・って氷が割れている。」

先ほどまで氷づけだったナツの体の氷の部分だけが粉々に砕け散っていた。

ルーシイ「作戦通りね。」

バルゴ「いえ・・・おそらく、術者との距離が離れたため脆くなり衝撃で割れたのでしょうか。」

ルーシイ「ってちょー!!グレイは!?!?」

ルーシイは傷だらけのグレイを見て俺たちに問うた。

ラルド「心配するな、リオンと戦って傷ついたんだ。応急処置はしてある。」

ルーシィ「そんな。」

俺たち3人は穴から出た。

ラルド「・・・それより。あいつらはまだ来ていないのか？」

ルーシィ「うんまだ来てないよ。」

・・・いや待ておかしいぞ。俺たちはあいつらが村に行ったあとにグレイの戦闘、そしてこっちに来た。ここにいないのはおかしいぞ。・・・いつたいあいつらはなにを・・・

村人「！！あれを見てください。」

一同は村人が指した方向・・・空を見上げた。そこにはネズミに乗ったさっきの三人組がいた。しかもそのネズミは・・・何かしらの液体を大きなバケツの中に提げて持ってきた。そこから一滴のしずくがルーシィに降りかかるうつつとした。

ルーシィ「？ゼリー？」

ナツ「ルーシィ！！」

ナツはその液体に触ろうとしたルーシィを突き飛ばした。その液体は花にかかり・・・溶けたのだ。一滴のしずくで地面までも溶けるものに俺は嫌悪感をおぼえた・・・

ラルド「何だコレは！？」



べちゃつと墓ごと溶けた・・・だが・・・

地面から村長を抱えたバルゴが現れた。

バルゴ「この村長・・・お置ききですね。」

村人たちは溶けきった自分たちの村を見て嘆いている。

ルーシィ「何とかなったけど村はひどい事になったわね・・・」

ハッピー「あい。」

向こう側から歩いてくる人影が3人・・・

シェリー「零帝様の敵は全て排除しなくてはならない。せめてもの慈悲に一瞬の死を与えてやろうと思ったのに・・・どうやら大量の血を見る羽目になりそうですね・・・」

ナツ「あ？」

ユウカ「魔導士3・・・村人約50・・・15分つてどこか。」

トビー「おおーん。」

ハッピー「忘れられているな。」

ラルド「村の皆！急いで避難しろ！！あとそこに転がっている、グレイも頼む！！」

村人「はい!!」

シエリー「逃がさない!!アンジェリカ!!」

先ほどのネズミが滑空してこちらに飛んできた・・・まではよかったです。

ルーシィ「なんであたしここにいるのー!!!!」

ネズミにルーシィが捕まったのだ。そして声がしたのもつかの間、ルーシィ&シエリーはネズミと一緒に落ちた。

ナツ「何やってんだあいつ。潰されてなけりゃアいいけど。」

いやいや潰されたら死んでるから。

ラルド「ハッピー。ルーシィを頼む。ナツ、2対2だ文句ねえな。」

ハッピー「あい!!」

ナツ「おう!!」

ラルド「俺が狼とやる。お前はキザ男とやれ。行くぞ!!」

ナツは地面を駆けてユウカのところに行った。

俺はこっちだ。

トビー「マヒ爪メクラゲ!この爪にはある秘密が隠されている・・・」

ラルド「・・・マヒか？」

トビー「何故分かった!？」

こんなバカと付き合っている暇はないな。一気に片をつけよう。

ラルド「炎竜の煌炎!！」

吹っ飛んだがこいつはタフなようだ。おおんって言って起き上がった。ならば、

ラルド「滅竜剣義・・・絶破!蒼竜牙!！」

この魔法は相手と距離をあけ高速で近ずき剣を回転しながらを突き刺し吹き飛ばす奥義であり、とんでもなく痛いらしい。

ラルド「ナツ!!終わったか？」

ナツ「火竜の炎肘!・・・おラルド。今終わったぜ。」

ラルド「そうか。なら・・・」

今この島にとんでもない殺気と魔力を持った者が上陸した。

ナツ「・・・おい、どうした？」

ラルド「エルザがこの島に・・・来た・・・」

ナツはソレを聴いて顔面蒼白になった。

ラルド「……逃げるぞ……」

ナツ「……ああ……」

翌日

ラルド「行くぞナツ。」

ナツ「ああ」

ラルド&ナツ「炎竜の……」「火竜の……」「鉄拳!!」

ドゴォ!!ドゴォ!!と数々の「柱」が音を立てて崩れていく。

半分ほど壊すと、「遺跡が傾いた」

どうしてここまでできたのか説明しよう。昨日、3人組みを倒した後に、俺たちは遺跡の近くで野宿をした。次の日ナツが、遺跡を壊して月の光を当てないと言い出した。そして遺跡を攻撃しまくって、今に至る。

リオン「貴様ら……どういつつもりだ。」

王の間のようなところでリオンが問うた。

ナツ「建物曲がっただろう？これで月の光がああ怪物に届く事はねえ。」

リオン「なんてことしやがる・・・フェアリーテイルめ・・・」

ナツ「があーーーーー！！！」

ナツはリオンの元に跳んだ。ナツの頭がリオンの体に当たったときにリオンの体は砕け散った。

リオン「アイスメイク：イーグル！！空中じゃ避けられまい。」

しかしそれはリオンではなく、彼の造形魔法・・・すなわち氷だった。しかしナツはプレスを上吐き、自分を地面へと落とした。

ナツ「残念。避けれるぞ。」

ナツはその瞬間に足から火をだし、カポエラのように回りだしソレを回避すべくリオンは跳んだ。

ナツ「空中じゃ避けれないじゃないの？火竜の咆哮！！！」

次の瞬間に一部の地面が腐敗した。そして落ちた。

ラルド「ナツ！！！」

ナツ「大丈夫だ。」

俺はナツを連れて上に上がった。え？今までなにしてたかって？傾いた階段上ってたんだよ。

上に上ると、部屋が凍っていた。

ナツ「・・・ラルド。こいつは俺にやらせる。」

ラルド「・・・了解。俺は狼をやる。」

ちなみに狼は今ここにいる。

ラルド「行くぜ狼!!」

狼「おおーん。」

ラルド「あつ!!待ちやがれ!!ナツ!死ぬんじゃねえぞ。」

ナツ「オウ!!」

屋上へ

ラルド「待て。!?つく何だコレは?・・・ぐあー!!」

しまった。俺は今結界のような物の内側にいて、結界を壊そうとしてはいろが力がいらない。

トビー「それは相手の魔力を奪う結界だ。ザルディに頼んで用意して貰ったんだ。それじゃあ俺は儀式を始めるか。」

くそ俺は・・・俺はここで見ていられるだけなのか？だったら少しでも時間を稼ぐ。

ラルド「おい！！狼。」

トビー「おおーん？」

ラルド「オマエバカだろ？魔力を奪う？だったら・・・」

俺は狼に魔力の渦を作り出し、狼を動かなくさせた。しかしもって30分だ。頼むぞナツ

トビー「おおーん」

ラルドside out

三人称side

同時刻

グレイ「リオンは昔からウルを超える事を目標にしてきた。だから

そのウルがいなくなった今ウルの倒せなかったデリオラを倒す事でウルを超えようとしているんだと思う。」

グレイはルーシィ、ハッピー、そして先ほどまで対立していたエルザにリオンという少年と自分の過去について話した。

ルーシィ「そつか・・・死んだ人を超えるにはそれしか・・・」

ハッピー「あい・・・」

グレイ「いや、あいつは知らないんだ。確かにウルはオレたちの前からいなくなつた、けど・・・ウルはまだ生きている。」

ルーシィ「え？」

エルザ「どういうことだ？」

3人は驚きの表情を見せている。無理もないだろう。死んでいると言っていたウルが生きていると聞かされたら誰でも驚く。

グレイ「10年前だ。オレの住んでいた町がデリオラに襲われた。壊滅するまで1日とかからなかった。」

グレイの回想

.....

??「デリオラ・・・うわさに聞いていたが・・・まさかここまでとは・・・」

彼女の名前はウル。氷の造形魔導士であり、後のグレイの師匠だ。

ウル「！リオンこっちに来い。生存者がいる。」

リオン「大丈夫か？」

グレイは偶然通りかかったウルたちに助けられた。それが全ての始まりだったんだ。

グレイ「デリオラ……許さねえ……絶対に……」

そしてグレイはウルたちに治療をしてもらい、ウルの弟子になる決意をした。

雪山……

ウル「まずは氷魔法の基礎からだ。グレイ……ついてこれるか？私の修行は厳しいぞ。」

グレイ「おう！！何だつてやってやらあ！！デリオラを倒す力が手に入るんだつたらな……」

彼の目は、憎しみや悲しみ、憎悪のみ宿っていた……

グレイ「!!」

グレイは驚く・・・目の前で、師匠ウルが脱いだのだ。今彼女は下着のみとなっている。

グレイ「な・・・何してんだ!!?」

ウル「おまえも服を脱げ。」

グレイ「ふざけんなっ!!こんな雪山で服なんか脱げるか!!?あんな女だろう!!!!恥ずかしくないのかよ!!」

ウル「はん。ガキの前で下着になったくらいで。冷気を操りたければ冷気と1つになるんだ。まずはそこからだ。」

グレイ「くそおおおお!!!!」

リオン「すぐに慣れるさ。」

グレイ「てめえも震えてんじゃねえか!!」

ウル「来い。走るぞ。」

グレイ「おい!!魔法教えろ!!」

リオン「いいから走れよ。オレまで基礎につき合わされているんだぞ。」

ウル「いいか?数ある魔法の中でも造形魔法は自由の魔法だ。作り

出す形は10人10色。術者の個性が最も出る魔法だ。精進せよ。そして己の形を見つけ出せ。」

市場

リオン「なあグレイ。オレたちはあとのくらいでウルを追い越せるかな？ウルはおれの目標なんだいつかウルに勝つことがオレの夢なんだ。」

グレイ「興味がないな。それに聞き飽きた。オレはデリオラを倒せばそれでいい。カさえ手に入ればあのクソ女とはおさらばだ。」

ウル「だ〜れがクソ女だつてコラア！！」

ウルはグレイの頭をこずいた。

グレイ「いつになったら強い魔法を覚えてくれるんだよ。」

ウル「もう教えているじゃないか。造形魔法は自由の魔法。自分の形を見つけた時、それは大きな力となる。」

そのとたんグレイは脱ぎだした。

ウル「てかなんでこんなトコで脱いでんのよ！！！！」

グレイ「んな！？くそお前のせいで変な癖がついた。」

人1「オイ聞いたか？デリオラの話。北の大陸のブラーゴに移動し

たらしいな。」

人2「マジで？じゃあイスバンに平和が戻ったのかよ！！」

そんな会話を聞いている少年が1人。

グレイ「・・・ブラーゴ・・・」

雪山・・・ウルの家

ウル「よせ！！デリオラに勝てるわけがないだろう！！無理だグレイ！！！！」

しかしグレイは彼女の言葉に聴く耳は持たない。

グレイ「うるせえよ。オレはデリオラを倒すんだ。父ちゃんと母ちゃんの仇を討つんだ！！なんか文句あるかよ！！」

ウル「出て行けば破門にする！！！！」

グレイ「ああ・・・せいせいするよ！！！！」

ウル「グレイ！！！！」

彼は走り出した。デリオラの元へ。

グレイ「オレが死んだら・・・もつと強い魔法を教えてくれなかったあんたを恨む・・・」

ブラーゴの町・・・

ウル「さすがに強いな・・・まさかこれほどは。」

近くではリオンとグレイが気絶している。デリオラは口を大きく開け、ブレスを放ったがウルが2人を守った。

グレイ「！・・・う・・・うわあああっ！！！！！！！！！！」

ウル「グレイ！！大丈夫だ・・・もう大丈夫だ。」

震える彼をウルは抱きしめる。

グレイ「ウル・・・なんで・・・オレ・・・破門だろう?」

ウル「いいからリオンを連れて離れる、庇いながらじゃあ戦いつらくてしょうがない。ダウンしているがな。」

グレイ「何で来たんだよ・・・オレ・・・」

ウル「以前・・・友人に自分の幸せについて考えろと言われた。そんな不幸そうな顔をしているつもりなかいんだがな・・・だって当然だろ?かわいい弟子が2人もいて、それが・・・日に日に成長している。十分幸せだよ。」

グレイは泣き出した。

ウル「その幸せを取り戻すために来た。」

グレイ「い．．．いや．．．その足．．．」

ウルの右足はひざから先がなく、代わりに氷で出来た義足がついていた。

ウル「ん？これか？もっていかれたが気にする事はない。すばらしいだろう？造形魔法は。あいつがお前の闇というなら、私にも戦う理由があるという事だ。行け。あれは私が倒す。」

グレイ「だめだ．．．おれは．．．いけない．．．こんな事に．．．なったのは．．．オレの．．．せいだ。」

ウル「誰のせいでもない。幸せを取り戻すための試練だ。」

そんな中その会話を聞いていた、少年が1人。

リオン「ウル．．．本気でやってるの？ウルは最強の魔導士、あんな怪物ごときに負けるはずはないだろう？オレはあなたが最強と信じて弟子入りしたんだ．．．あんな怪物に負けるなよ。俺を裏切るなよ．．．」

リオンの瞳は．．．濁っている．．．まるであの頃のグレイのように．．．

リオン「あなたがやらないならオレがやる。」

ウル「その構え！！一体どこでその魔法を！！」

リオン「あなたがなかなか強い魔法を教えてくれなかったから。倉庫の魔導書を読ませてもらった。こんなに強い魔法を隠していたんだ・・・アイスドシエル。」

グレイ「アイスドシエル！？」

ウル「リオン！！その魔導書、最後まで読んでないだろう。その魔法を使ったらお前は・・・つくあ」

グレイ「すごい魔力だ。」

あのウルが少しだが吹き飛んだ、コレはものすごい魔法だろう・・・だが強大すぎる力はそれなりの代償がある。

リオン「デリオラはどんな魔法も効かない。だったらこの魔法で永久に氷の中に閉じ込めてやる。」

ウル「その魔法は使ってはだめだあ！！」

ウルはリオンを凍らせた。

グレイ「ウル？何を！？」

ウル「ダメなんだ。アイスドシエル・・・使った者も身を滅ぼす・・・だがあいつを倒すにはこのまほうしかないのも事実・・・まさか私がやるうとしていた事を、リオンがやるうとするとは・・・さすが私の弟子だ。」

グレイ「やろうとしてたつて・・・」

ウル「下がってる!!。私の弟子たちには近づかせないっ!!コレで終わりだ!!バケモノオ!!!アイスドシエル!!!」

グレイ「ウルーーーー!!か・・・体が・・・」

ウルの体は白く・・・氷になっていった。

ウル「言つたろう?この魔法は自らの肉体を氷へと変える魔法だ。永久にな。グレイ、頼みがある。リオンには私は死んだと伝えてくれ。あいつの事だ・・・私が氷になったとすればこの魔法を解くため人生を棒にふるだろう。それでは私が氷になる意味がない。」

グレイ「や・・・やめる・・・やめるおお!!」

ウル「リオンにはもっと世界を見てもらいたい。それはもちろんお前もだグレイ。」

グレイは大泣きし地面に這い蹲り、頼んだ。

グレイ「頼む・・・もうやめてくれ・・・これからは何でも言う事聞くからあ・・・」

ウルはそれでも止めない。

ウル「悲しむ事はない。私は生きている。氷となって永遠に生きている。歩き出せ・・・未来へ。お前の闇は私が封じよう。」

ウルは消えそこには氷漬けのデリオラがいた。

グレイ「ウ……ウル……………!!!」

数刻後……

リオン「なっデリオラが!!!ウルは!!!?ウルはどうした!!!」

リオンは目を覚まし、グレイに問うた。だがグレイは本当のことは伝えなかった。

グレイ「……し……死んだ……」

リオン「う……うそ……だ……うそだあ……………!!!  
!オレの夢はどうなる!!!?ウルを超える夢はどうなるだ……………  
っ!!!ええっ!!!?」

グレイ「ごめん……」

リオン「おまえさえ……おまえさえデリオラに挑まなければ……  
!!!!!!おまえせいだ!!!!グレイ!!!!お前がウルを殺したんだ  
!!!!!!」

幼き少年達の涙の咆哮は誰にも届かなかった。

回想Out……………

- - - - -

エルザ「・・・そうか行けグレイ。ここは任せろ。決着を・・・つけて来い。」

エルザたちの周りには信教者のような格好をした者たちが囲んでいた。

グレイ「ああ!!」

グレイ「（あいつはウルが生きている事しらねえ。リオンを止められるのはオレだけだっ!!!!）」

青年は静かに燃え上がり、覚悟もしていた。そうアイスドシエルを使う覚悟を・・・

**第15魔法・過去の思いは今に・・・（後書き）**

次回リオンVSグレイ&最強チームVSデリオラ

少し更新が遅れると思いますが、また次回でお会いしましょう。

## 第16魔法：崩れゆく悪魔を・・・

三人称 side

グレイが凍りついた部屋を破壊し中に入っていた。

グレイ「ナツ・・・コイツとのケジメはオレにつけさせてくれ。」

ナツ「てめえ！！一回負けてんじゃねーか！！！」

グレイ「次はねえからよ。これで決着だ。」

リオン「たいした自信だな。」

グレイ「10年前、ウルが死んだのはオレのせいだ。だが、仲間を傷つけ、あの氷を溶かそうとしているおまえだけは許さない。・・・ともに罰を受けるんだ。リオン・・・」

リオン「その構え・・・！！アイスドシエル！？」

グレイはアイスドシエルの構えを取った。

リオン「貴様・・・血迷ったか！！？」

グレイ「今すぐに島の人の姿を元に戻せ。・・・そして出て行け。これはおまえに与える最後のチャンスだ。」

リオン「なるほど・・・その魔法は脅しか・・・くだらん。」

ドツ！つとグレイは魔力を解放した。

ナツ、リオンともども壁まで吹き飛ばされた。

グレイ「本気だ。この先何年たとうが・・・オレのせいでウルが死んだ事には変わりはない。どこかで責任を取らないといけない・・・」

その瞳に宿りしは決意と覚悟の瞳、10年前のグレイの瞳とは思えないほど、暗く・・・そして過去を乗り越えるべくした瞳は燃え上がっている。

グレイ「それをここにした・・・覚悟は出来ている。答える！！リオン。ともに死ぬか・・・生きるかだ！！」

リオン「・・・やりたきゃやれよその魔法・・・おまえに死ぬ勇気はない。」

グレイ「・・・そうか・・・コレで終わりだ！！アイスド・・・」

ナツ「どあほう！！」

ナツがああ魔力を突っ切って、グレイの頬に右拳を閃かせた。

ナツ「勝手に出てきて責任だの何だのうるせえんだよ。あいつはオレのものだ。」

グレイ「え・・・えもの・・・コイツはオレにやらしてくれって言っただけじゃねえか！！」

ナツ「『はい了解しました』ってオレが言ったかよ。お？やるか？」

グレイは胸倉をつかむ代わりにマフラーを掴んだ。

グレイ「あいつとの決着はオレがつけなきゃいけねんだよ！！・・・  
・死ぬ覚悟だつて出来てんだ！！！」

ナツはそのグレイの腕を掴み言った。

ナツ「死ぬ事が決着かよ・・・逃げてんじゃねえぞコラ。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴと傾いていた遺跡が元に戻った。

ナツ「どーなつてんだコリヤあ。」

グレイ「コレじゃあまたデリオラに月の光が・・・」

そんなところにおばさんがやってきた。

ザルディ「お取り込み中失礼。そろそろ夕日がでするので遺跡を元に戻らせていただきます。」

リオン「ザルディ・・・お前だったのか。」

ナツ「オレとラルドが苦勞して壊したのに・・・どうやって元に戻した？どうやって戻したーーーーー！！！！！」

ザルディ「ほっほっほさて儀式を始めましょうか。」

ナツ「じょ・・・上等じゃねーか！！！！ナマハゲーーーー！！！！！」



屋上へ

ルーシィは屋上へ上がったがそこには結界の中で倒れているラルドがいた。

ルーシィ「ラルド!!」

ラルド「……ルーシィ……俺のことはいい……あいつを……倒してくれ。儀式を……やれさせるんだ……」

結界の外からラルドは言った。

ルーシィ「……分かったわ。開け!! 巨蟹宮の扉……キャンサ  
ー!!」

キャンサーは狼の腹を切り裂いた、おおーんといいながら倒れた。ソレと同時に結界は消え、儀式は終わったかのように思えた……

トビー「バーカ気づけよ!! 儀式はもう終わってんだよ!!」

最後の月の光がデリオラへと降り注がれた。

ラルド「ルーシィ地下に行くぞ!!」

ルーシィ「うん。」

ラルドは自分自身に嵐竜の吐息を使い回復し、地下へ・・・デリオ  
ラのもとへと走っていった。

同時刻、グレイたち

グレイ「何も見えてねえやつがウルに勝つだと!!!? 10年はええ  
よ!!! 出直して来い!!!」

グレイは氷で作った剣で切り裂いた。しかしソレは氷となって砕け  
散り本人は後ろにいた。

リオン「アイスメイク：スノータイガー!!!」

リオンは氷のトラを作り出し、グレイへと向かった。

グレイ「アイスメイク：プリズン!!!」

グレイはそのトラを氷で作った檻で閉じ込める。

グレイ「これがお前の姿か、リオン哀れな猛獣だな。」

リオン「くだらん!!! 貴様の造形魔法などぶっ壊して・・・!!!」

リオンはグレイのつくった檻を壊そうとするがまったく壊れない。

グレイ「片手での造形はバランスが悪い。アイスメイク：アイスキヤノン！！」

リオンは吹き飛び倒れた。

グレイ「ウルの教えだろう？」

『ぐあああああああ！！』

グレイ「この声・・・忘れるわけがねえ・・・やるしかねえ・・・  
アイスドシエル」

グレイも地下へとかけていった

デリオラの前

グレイ「どけえ！！コイツを倒すには・・・コレしかねえ！！」

その前にナツが現れ・・・

ナツ「死んでほしくねえからあの時止めたのに・・・オレの思いは届かなくなったのか？」

グレイ「ナツ・・・」

その瞬間ラルドが来たがとき遅く、デリオラ溶け、ナツに拳を振り

下ろした。

グレイ「よけるー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ナツ「オレはあきらめねえ！ー！」

その瞬くまにラルドがナツとデリオラの間に現れ、デリオラの拳をもろに受け、吹き飛んだ。

ドゴオ！！と壁をめり込ませ・・・ソレでも立っているがラルドは大量の血を流し意識は朦朧としている。

グレイ「ラルドー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ラルド「だ・・・だいじょうぶ・・・だ・・・それより・・・コイツを倒すぞ・・・ドラゴンヴォイス・・・エンシエント・ノヴ・・・え？」

デリオラはオレに拳をぶつけただけで静止していた・・・次の瞬間に・・・砕けた・・・

リオン「10年間・・・ウルの氷の中で徐々に命を奪われ・・・俺達はその最後を見ているのか？」

リオンは自分の拳を地面にたたきつけた。

ウル「かなわん・・・オレにはウルを越えられない。」

ナツ「すげえな・・・オマエの師匠!!」

グレイの頭にあの言葉がよぎった。

ウル「（お前の闇は・・・私が封じよう。）」

グレイ「ありがとうございます・・・師匠・・・」

グレイは大量の涙を流し、どこか悲しそうな表情をうかべている。

ラルドは自分の治療をしリオンを交えて話し合った。

そしてすっかり落ち着いたりオンを交え、紫色の月と村人について話し合う。

三年間、同じムーンドリップを浴び続けていたりオン達には何の変化もない事や、村人達が一番怪しいと思われる場所に来なかったこと、1度もリオンたちに干渉してこなかった事それらを総合して考えたら、いつの間にか合流したエルザたちとともに村へ向かった。

## ガルナの村

村に着くと驚いた事に元どつりになっていた。エルザは村人に一つの質問をする。

エルザ「何故、遺跡の調査をしなかったのだ？」



ナツ「ソレ投げてつき壊すのか？スゲー……………!!」

ラルド&ルーシィ&グレイ「」（）いやいや、無理だから。（）  
「「「

エルザ「いくぞ。」

ラルド「・・・了解。ドラゴンヴォイス!!」

エルザ「!!ナツ!!」

ナツ「おう!!火竜の鉄拳!!」

エルザは月に向かって槍を投げた。

エルザ「届けエー……………」

するとどうだろう。

月では無く、空に大量のヒビがはいり間もなく、空を覆った紫色の膜が粉々に碎け、金色に輝く綺麗な月が顔を出した。

これが、ガルナ島を襲った呪いの真実だった。

エルザ「こういうことだ分かったか？ラルド。」

ラルド「ああ。村人は元々この島の人は皆悪魔だったってことだな。」

皆「……………えええ……………!!!!!!!!!!?」

?????????」「」「」

グレイ「マ……マジ?」

村人「は……はい……まだちよいと混乱していますが。」

ルーシイが1人で悩んでいる中で

ルーシイ「どうなってんの?コレ?」

ラルドが説明。

ラルド「つまりは記憶障害だ……おそらくこれは悪魔にのみ効果があるんだろうな、自分が人間と思いついていたんだよ。」

ルーシイ「きゃあああ!……!」

??「魔導士の皆さんありがとうございます」

村長「ボボ……」

ルーシイ「幽霊!……!」

ハッピー「あわわわわわ。」

グレイ「船乗りのあっさん!??」

ボボ「胸を刺したくらいじゃ俺達は死なねえだろうが。ツハツハツハ。」

グレイ「あんた船の上から・・・!!!」

また消えたと思ったグレイだが、翼を使って飛んだだけだった。

ボボ「俺は1人だけ記憶が戻ってこの島を離れたんだ。自分の事を人間と思っている皆が怖くて怖くて」

村長も翼を広げボボの元へ飛んだ。

村長「ボボーーーー!!!」

エルザ「ふふ悪魔の島か。」

ナツ「でもよお皆の顔みてっと・・・悪魔って言うより天使だな。」

その日の晩、記憶が戻った悪魔達と共に宴を開く。

悪魔達は、それは楽しそうに歌い、踊り、騒いだ。そう、フェアリーテイルのように

悪魔といっても、人間とはなんら変わりは無かったんだ。

ジークレイン「ラルド・エグフィード・・・評議員からの依頼をこなしてもらおうとするか・・・」

不快に笑うジーク・・・その裏はいつたい・・・

第16魔法・崩れゆく悪魔を・・・（後書き）

この物語は先にロキ編を行い、オリジナルエピソード、ファントムロード、楽園の塔へと続きます。

ラルドの力を開花させるためですので、どうかご了承ください。

## 第17魔法・星霊王と星竜のレギオン

三人称 side

ガルナ島から帰って来たラルド達・・・しかし報酬はラルドを含み一部の暴走が原因と言う事で、追加報償の黄道十二門の鍵のみを貰って帰る事となった。しかしそんな中、罰を免除する変わりにすぐに仕事に行くは目になった。

場所は鳳仙花村

マグノリアより西にいった小さな村で、東洋建築の並ぶ観光地でもありなにより温泉がある。

今回の依頼は近くの砦跡に住み着いた盗賊団を撃退・・・もしくは討伐してほしいという依頼。しかし、早く終わったので旅館で一泊する事になったラルド一行達。

旅館内

ラルドは夕食を済ませて今は部屋で寝る準備をしている・・・はずだった。

ナツ「始めっぞー!!」

ハッピー「あい。」

ナツは浴衣に着替えて枕投げの準備をしていた。

グレイ「あ？何だよ？」

ナツ「旅館の夜つつたら枕殴りだろうが!!！」

グレイ「枕投げな。」

エルザ「ふふ・・・質のいい枕はすべて私が押さえた、貴様らに勝ち目はないぞ。」

エルザの手には枕が二個握られており、後ろには枕の山があった。

グレイ「やれやれ。」

ナツ「オレはエルザに勝ーっ!!！」

ナツの投げた枕は・・・

エルザ「甘い!!！」

グレイ「ぐほ!!！」

グレイに当たった。

グレイ「ナツ、てめえ!!！」

グレイはナツに自分が使おうとしていた枕を投擲した。

ナツ「ぐほお。」

エルザ「やるな。」

そこにラルドが1つの提案をする。

ラルド「こっからはチーム戦だ。俺とエルザ対あと皆な。」

ナツ「臨むところだ!」

ハッピー「あい。」

グレイ「負けねえぞラルド!」

エルザ「いくぞ!」

わいわいがやがや・・・そんな中ルーシイが腕を振りながら。

ルーシイ「よし・・・私も参加しよう。」

流れ弾・・・流れ枕がルーシイの顔面と腹に直撃し、そのまま旅館の外まで吹っ飛んだ。

ルーシイ「やっぱりやめよう・・・死んじゃう・・・」

ルーシイはその後少し散歩して何かあつてからから帰ってきた。

ラルドside

次の日・・・フェアリーテイル

ナツとグレイは枕投げで多少の怪我をして今喧嘩している。無論、エルザと俺は怪我はしていない。

グレイ「だいたいなんでてめえは枕投げごときでムキに何だよ。」

ナツ「オレはいつも全力なんだよ。」

グレイ「そのワリには負けてたじゃねーか。」

ナツ「はあ！？負けたにはおまえだろう！！？」

ナツとグレイはルーシィに問うた。

ナツ&グレイ「ルーシィ！！勝ったのはオレだよな！！？」「」

ルーシィはものすごく怖い顔で言いやった。

ルーシィ「うるさい。」

ナツ&グレイ「……………ごめんなさい。」

ルーシィはつーんとしている。

ラルド「どうした？ルーシイなんかあったか？」

ルーシイ「ラルド・・・実は昨日ロキが・・・ううんなんでもない。」

ラルド「（ふーん）・・・そうか。ならいいんだ。」

ルーシイ「ちよつと私1回家に帰るね。」

ラルドの目が光ったのはまた別の話。

ルーシイ宅

ルーシイ「というわけなの。クル爺。」

クル爺「ほむ。」

クル爺はルーシイの契約している星霊で、星霊についてはわからないことはならない。

ルーシイ「渡す、ついカツとなっちゃって手をあげちゃったけど・・・  
・どどん冗談じゃないないような気がしてきて。」

ラルド「冗談じゃないだろうな。少なくともあいつは今やばい状態

だ。何とかしないと……」

ルーシィ「うんそうね……ってなんでラルドがいるの？」

ラルド「つけてきた。それはそうとルーシィ何があった。」

ルーシィ「うん実は昨日、実は昨日、ロキが私に抱きついてきて……『僕の命は後わずか』とか言っつて、その時は女の子を口説く、泣き落として言っつてからかわれてただけど……」

ラルド「そういうことか。俺も付き合っぜ。」

ルーシィ「うん……ありがとう。ラルド。クル爺ロキに関係がある星霊魔導士を調べて、お願い。」

クル爺「（ラルド？はてどこかで）分かりましたルーシィ様、ロキ様に関係がある魔導士はカレン・リリカ様です。」

ルーシィ「カレン？」

ラルド「ルーシィ知っつているのか？」

俺はルーシィに当然のように聞いた。

ルーシィ「うん。かなり有名だった星霊魔導士よ。ブルーペガサスに入っつていたんだけど3年前に仕事中になくなっつたの。」

3年前……ちょうどロキがフェアリーテイルに入っつたのと一緒くらいだな……

クル爺「ルーシイ様、ラルド様とお話があります。申し訳ありませんが席を外してもらっていてもよいですか？」

ルーシイ「うん分かったわ。終わったら閉門してね。ラルド、私は今からフェアリーテイルに行くけど部屋を荒らさないでよね。」

ラルド「あい。」

?どついうことだ星霊が俺に話なんて・・・

クル爺「あなたは、ラルド・エグフィールド様ですね？」

ラルド「ああそうだけど・・・クル爺・・・だっけか？星霊が俺になんのようだ。」

クル爺は一拍置いて話し出した。

クル爺「あなたの育て親・・・星竜レギオンの話です。」

!!父さん・・・

クル爺「レギオン様は星霊界と人間界を自由に行き来できる唯一の存在であり、我らが王。星霊王と親しき仲でございました。すみませんこれ以上は・・・」

ラルド「いいんだ・・・十分だよ、何も分からなかった父さんのことが少しだけ分かったんだ。十分だよ。」

クル爺「・・・それでは。」

クル爺が消えると同時に俺は走り出した、フェアリーテイルへ友を救うためにしかし彼の胸には少しながら喜びもあった。

フェアリーテイル

ん？騒がしいな。いったいどうしたんだ。

ラルド「ミラ。どうしたんだ？」

ミラ「！！ラルド。ロキがギルドをやめるって言ってどこかにいっちゃったの。」

何だと！？もう時間がないのか？

ラルド「マスター！！カレン・リリカの墓を教えてください。」

マスター「ん？その森の奥の滝に囲まれている場所だが・・・」

ラルド「ありがとうマスター！！」

ロキは必ず助けるから・・・待ってるよみんな。

カレンの墓の前

あれは……

ルーシィ「目の前で消えてく仲間を放っておけるわけないでしょ！」

俺は彼女らに駆け寄る。

ラルド「ルーシィ！！俺の魔力を使え。」

ルーシィ「ラルド……うん。」

ロキ「ラルド！！ルーシィ！！一度にそんなに魔力を使うな！！開かないんだよ！！契約している人間に逆らった星霊は星霊界には戻れない！！やめてくれ。星霊と同化してるじゃないか！？これじゃあ2人まで一緒に消えてしまおう！！これ以上僕に罪を与えないでくれーーーー！！」

ロキは泣きながら叫ぶがソレに応ずる俺らではない。

ルーシィ「なにが罪よ！！そんなのが星霊界のルールなら私が変えてやるんだから！！」

ラルド「ロキ……俺たちを信じろ！！必ずおまえを死なせたりはしない！！」

刹那、回りの空気は一変し、大きな人……否星霊王が現れた。

ロキ「星霊王！？」

ロキはその巨人を見て叫んだ。だがそれだけのことだった。

星霊王「古き友・・人間との契約において我ら、鍵を持つものを殺める事を禁ズル」

腕を組み、喋りだす。

星霊王「直接では無いにしろ、間接にこれを行ったレオを星霊界に帰る事を禁ズル」

ルーシィ「仲間の為に仕方なかったじゃない！」

ルーシィが俺たちを代表するかの様に叫ぶ。

星霊王「余も古き友の願いには胸を痛めるが・・・」

ルーシィは星霊王の前に立ち、腕を振るいながら叫ぶ。

ルーシィ「古い友なんかじゃない！！目の前にいる友達の事を言ってるの！！ちゃんと聞きなさいヒゲオヤジ！！これは不幸の事故でしょ、ロキに何の罪があるっていうのよ！！」

ルーシィはそう言いながら、魔力を集中させる。

ロキ「もういいルーシィ！僕は誰かに許してもらいたいんじゃない！！罪を償いたいんだ！！このまま消えていきたいんだ！」

ラルド「黙ってる。ルーシィがおまえを救ってくれるはずだ・・・」

俺の言葉にロキは驚いたような顔をした。

ルーシィ「罪なんかじゃない！！仲間を想う気持ちは罪なんかじゃない！」

その瞬間にルーシィが星霊を呼び出した一体ではない・・・今ルーシィと契約している星霊全員をここにだ。

ロキ「星霊が同時にこれだけ・・・」

目を丸くしてさらに驚くロキ、しかし星霊はすぐに消えてルーシィはその場に倒れ込んだ。

ラルド「あんたも星霊なら分かるだろう！！？ロキの気持ちが！！」

ロキはルーシィを支えこう言い放った。

ロキ「なんて無茶を・・・一瞬とはいえ、死ぬ危険もあるんだぞ！」

星霊王は目を瞑り少し黙り考ているようだ

星霊王「古き友にそこまで言われては、間違っているのは法の方がもしれんの・・・同胞の為に罪を犯したレオ。そのレオを救おうとする古き友・・・その美しき友との絆に免じこの件を例外とし、レオ・・・貴様に星霊界への帰還を許可する」

ルーシィ「いいトコあるじゃないの、ヒゲオヤジ・・・」

だがロキは何か言い分があるようだ。

ロキ「僕は・・・」

涙を流すロキに星霊王は声をかけた。

星霊王「まだ罪を償いたいと言うのなら、その友の力になり命をかけて守り、生きる事を命ずる。」

そして、ロキの後ろに扉が開く

ロキ「ありがとう・・・ラルド、ルーシィ・・・そしてこれからは、ルーシィ・・・君の力となるよ・・・」

そしてロキは消え、黄道十二門の獅子宮のレオの鍵がルーシィの手の中に・・・

星霊王「おぬし・・・ラルドと言ったな？」

ラルド「ああ。」

星霊王「レギオンから伝言を頼まれている。『お前は炎と嵐の魔法を同時に使う事で星竜として覚醒する。この意味が分かるか？本当は俺の魔法は1つだったが、星竜の滅竜魔法は覚えることが難しい。だからまず先に、2つの滅竜魔法を覚えさせ、それを同時に使うことでいち早く覚えさせようとしたが・・・星竜の滅竜魔法を教えられなかった。が、その2つの滅竜魔法を同時に使う事が出来たなら・・・おまえに、星竜の力が宿るだろう。おまえの力を信じているぞ・・・ラルド』・・・ちゃんと伝えたぞ？ラルド。」

ラルド「ああ・・・ありがとう。」

父さん見ていてくれ。俺、星竜を力を手に入れる・・・だから・・・  
安心しているよ。

**第17魔法・星霊王と星竜のレギオン（後書き）**

次回からオリジナルエピソードです。お楽しみに!!

**第18魔法・雷雲を司りし一角獣デイーマ(前書き)**

スイマセン更新遅れましたが、書けました。

それではどうぞ。

## 第18魔法・雷雲を司りし一角獣デーマ

ラルドside

評議員議長「……と言うわけで、そなたドラゴンイーターのラルド・エグフィードに一角獣デーマの討伐……または撃退を行ってもらいたい。よいな？これは評議員直々の命令だ……」

ラルド「……あい。」

あゝあ……なんでこんな事になったかと言うと……

2日前……フェアリーテイル

マスター「ラルド。ちょっとこのクエストに行ってくれんかのう？」

ラルド「分かった……行ってくるよ、じっちゃん。」

しかし俺はとんでもない事をして帰ってきた。

マスター「……」

ミラ「まさか……本当に？」

ラルド「……はい。ワツファルの塔を……壊してしまいました。」

「

ワッファルの塔とは、この世界の文化遺産でもある建物である……  
が今回の仕事はバハムートという怪物を撃退するのが仕事だが……  
そいつをドラグナーモード状態のメドローアで倒したところこうな  
ったのだ。

ミラ「……まあ大丈夫よ……それなりに……」

マスターは顔面蒼白で、ミラは可能な限り俺を励ましてくれている。  
が翌日……悲劇が起こった……

1日前

評議員の使いが来てこう言った。

使い「ラルド・エグフィードよ今すぐエラに来るのだ。」

……どうしようかな……俺……墓は星がきれいなところに立  
ててくれよ……

本日

メンバー？「ついに文化遺産まで壊しおったか……」

メンバー？」・・・さて・・・どうしたのか・・・」

俺は裁判台のところに立たされ、評議員たちに色々言われている。

ジークレイン「いいじゃねーか。そんなもの情報操作かなんかすりゃあいいじゃねーか？そんな事は・・・それよりもじじい、デーマはどうする？ちようどいい。コイツに行かしたらいいんじゃないの？」

評議員たちはざわつき始めた。が

評議員の議長「・・・分かったそれがよからう、ラルド・エグフィードよ、罰を与えない代わりに一角獣デーマを討伐、または撃退せよ。場所はオルドラんだ、まずはその町に行き詳しい事を聞くのだ。」

おいおい、それくらい教えてくれないのかよ。まあいいや、速いところ出発しよう。

数日後オルドラン

ラルド「ここか・・・」

オルドラン、魔法で産業をするという最新の魔法技術が導入されている町。しかし今は、ある問題で頭を抱えている町なのだ。それはいうまでもないだろう？

ラルド「まずは村長のところか・・・」

どんな奴が相手なのだろう。そんなことを考えながら歩いていった。

村長「デーマとは別名雷撃一角獣・・・聖獣と昔から称えられ、その名のとおりに雷を操り、その魔力は聖十大魔導士をも超えていると伝えられています。お願いしますどうか・・・どうかこの町を救ってください。」

おいおい・・・まじかよ、なんでそんな聖十より強い奴と俺がしなきゃいけないんだよ・・・罰ゲームかよ。

ラルド「・・・分かった。だが今は情報がほしい。詳しく教えてくれ。」

だが仕事は仕事だ。まあ命令されただけだけど・・・出来なかったら名折れだからな。

村長「ありがとうございます。デーマはその角で雷雲を操り、雷を落として攻撃したり突進したりします。そしてものすごく速いのです・・・場所はあの山・・・ルパープ山脈の頂上です・・・どうかお願いします。」

ラルド「分かった。」

## 雪山、ルパープ山脈

ラルド「寒いよ、父さんどうしよう。死んじゃうよ。」

あの後雪山に登った俺だがかなり寒い・・・凍死してしまいそうだ・・・戦闘になったら暖かくなると思うけど。

ラルド「デーマ・・・どこかで聞いたことがあるな。」

そうだ俺はデーマを聞いたことがあるのだ。昔・・・どこかで・・・と、そんな事を言っていたらもう頂上だ。

ラルド「・・・どこだ？」

ラルド side out

三人称 side

突如として雷雲が発生した。その大きさはあたり一面覆われている。

ラルド「来る・・・」

巨大な雷と共に姿を現したのは、雷撃一角獣のデーマだ。額にはユニコーンのように一本の角が生えていて、たてがみや尻尾などの体毛を持つが、皮膚は鱗状であり、角は雷を纏っている。体が蒼く、原理は不明だが、その角には雷撃、雷雲を自在に操る力があるようだ。大きさは高さはラルドと同じくらいで、横は3mはあるだろう。

デーマ「クオオオオウ!!」

ラルド「勝負だ!!」

デーマは突進、ラルドは炎竜の鉄拳で向かい打つ。双方の拳と額がぶつかった瞬間に小さな爆発が起こり両社とも後退した。

ラルド「パワーは互角・・・だったら・・・炎竜の咆哮!!」

デーマ「クオオオオウ!!」

ラルドとデーマはブレスと額の角に溜めた電気を放ってきた。それたちはお互いにぶつかり、爆発とともに相殺したのだ。

だがラルドはソレで攻撃が通ると思ってもいなかった。

ラルド「目くらましだよ？サイクロン!!」

デーマ「クオオオオウ!？」

デーマは空高く飛んだ。そこにラルドは追撃する。

ラルド「コレで決める！！滅竜剣義・・・炎覇獄竜陣！！」

デーマを巻き上がる炎の渦に自分ごと閉じ込め鳳凰の如く体に炎を纏わせ一気に上昇した。がそんな攻撃で聖十大魔導士をも超えている聖獣ではない。

デーマ「クオオオウ！！」

デーマはその炎をもともせず、空から雷を多数落としてきた。その数は7発・・・かわしきれたのは3つまで、残りの4発は当たった。

ラルド「ぐあああ！！」

肉の焦げるいやなおいがする。彼の体表は焼け焦げ、血が吹き出ている。

ラルド「くっそ！！まったく効いてねえ・・・どうすれば・・・」

彼の脳裏に浮かんだのは父からの言葉、『お前は炎と嵐の魔法を同時に使う事で星竜として覚醒する。この意味が分かるか？本当は俺の魔法は1つだったが、星竜の滅竜魔法は覚えることが難しい。だからまず先に、2つの滅竜魔法を覚えさせ、それを同時に使うことでいち早く覚えさせようとしたが・・・星竜の滅竜魔法を教えられなかった。が、その2つの滅竜魔法を同時に使う事が出来たら・・・おまえに、星竜の力が宿るだろう。おまえの力を信じているぞ・・・ラルド。』

ラルド「（ぶつつけ本番だ！！やるしかない）」

ラルドは左手に嵐竜の魔力を・・・右手に炎竜の魔力を・・・今残っている全ての魔力を出した。そしてソレらを合わせると白銀の魔力に変化した。その白銀の魔力を剣で喰らった。

ラルド「う・・・うあああー！！！！」

ラルド「（何だコレ力が・・・力が溢れてくる。ドラゴンヴォイスの比じゃない！！）」

すべての魔力を取り込んだラルドの瞳は紅く・・・まるで血のように紅く染まっていた。

ラルド「・・・行くぞ！！」

さっきまでのラルドは何処に行ったのか？素早いディーマにも遅れをとらないスピードで、ディーマに接近した。

ラルド「星竜の・・・碎牙！！」

自らの爪、腕に星竜の魔力を纏わせ、斬りつけた。

ラルド「星竜の銀炎！！星竜の銀嵐！！」

銀色の炎に、銀色の風をディーマへとぶつけた。その威力は絶大だ。ラルドのことをラルドだと言いきれる者はこの戦闘を目にしたことの無い者以外なら言いきれるが、今この戦闘を見ている者がいるなら、そんなことを言える者はいらるのだろうか・・・いや、いまい。それほどまでに彼は進化した。そう・・・星竜の覚醒だ。

ラルド「星竜の咆哮！！」

・ラルドのブレスは射線上全ての物を消滅させたが、彼は気を失った。  
・

第18魔法・雷雲を司りし一角獣デューマ(後書き)

## 第19魔法・真実と後悔

ラルドside

ラルド「ん？ここは・・・」

白い天井に、薬品のおい・・・すぐに病院だと分かった。

そして次に映ったのは、先ほどまで戦闘をしていた一角獣のディーマがいた。

理解するまで約3秒。そこから奇声を発するまでおよそ2秒。

ラルド「……………うわあああああああ！！！！！！！！！！」  
なんだよこれ！！どつきりか？どつきりだよなあ！！？そうじゃな  
つから俺・・・食われるー！！！！どつするどつする・・・いや  
落ち着け、きつとまだ

ディーマ「クオオオオオウ！！」

ラルド「ぐはあー！！」

ディーマの回し蹴り！！効果は抜群だ！！ラルドはHPの半分を失  
った・・・違うだろ！！俺！！

医者「どうしました！？」

振り向くとそこには血相を変えた医者？がいた。

ラルド「あ……いや大丈夫です。……えつとこいつは？」

医者「ああその馬ですか？」

つえ？馬つて。デーマギー！！つて言つてたジャン！！

医者「その子はあなたをここまで運んだ張本人ですよ。あなたが運ばれてすでに5日が過ぎ非常に危ない状態でした。その子が運んでくれなかつたら、今頃……」

まじかよ！！いやでも俺はコイツと一戦交えたんだぜ？何で律儀に俺を病院まで運ぶんだ？つか馬つて何だよ馬つて。村人の間ではこいつは雷撃一角獣やら聖獣とか言っていたのになんだよこれ。ん？待てよ。

ラルド「えつとここは？」

医者「ここはリーゼリ村の病院です。知らなかつたんですか？」

ラルド「えつと……すいません。地図とカレンダーを……」

医者「はい、分かりました。こちらです。」

俺はそのカレンダーを見て驚いた。日付はちょうどあの日から5日目だが、ここはオルドランから300キロほど離れている……。あの日の戦闘から体力が残っていたのか？いやそれ以前に300キロをも1日で走れるのか？

デーマ「クオオオオウ……」

ラルド「・・・ディーマ・・・まさかおまえ・・・」

今思い出した。ディーマとは・・・

父さんの娘だ・・・

言い方がおかしいかもしれない。正確にはディーマは父さんに育てられたんだ。父さんはあの時・・・

.....

およそ8年前

レギオン「ラルド。おまえに話がある。」

ラルド「何？父さん。」

レギオン「　　という奴を・・・オレがもしもの時になったら、探してくれないか？」

ラルド「　　？」

レギオン「ああ・・・もうひとりのオレの・・・娘みたいなやつさ・・・だが2年前にはぐれてしまい生きている事は分かるんだが・・・どこにいるか・・・」

ラルド「まかせて父さん。　　は僕が探すよ。」

俺は当時、胸をドンッと叩き胸を張って答えた。

レギオン「始めはあいつのことが分からないかもしれない、あいつもおまえの事が分からないかもしれない。だが・・・あいつを頼むぞ・・・ラルド。今あいつは、ほかの奴からデューマと呼ばれている。」

ラルド「デューマ？」

レギオン「ああ。それがあいつの今の名前だ。あいつを・・・  
って呼んでやってくれ。」

ラルド「デーマだね。わかった・・・探してあげるよ。父さん。」

レギオン「ありがとうな・・・ラルド」

オレは父さんからありがとうって言われるのが・・・好きだったんだ。かなうなら・・・もう一度だけでもいいから・・・

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

ラルドside out

三人称side

ラルド「・・・テ・・・ティア・・・なのか？」

ティア「クオオオオウ」

ラルドは瞳に涙を浮かべ、頬に一滴の雫をこぼした時・・・ティアに抱きついた。

ラルド「ティア・・・会いたかった・・・ごめんな・・・おまえを攻撃して・・・」

ティア「クオオオオウ・・・」

こっちこそごめん、あいたかったよと・・・そう言っているように聞こえた。

ようやく再会したラルドとティア。父の約束を果たしたラルド・・・

兄弟と共に新たなスタートを切ったラルド、ティア。

蒼き白馬に乗りたる星竜の物語が・・・今・・・幕を開ける。

## 第20魔法・蒼き白馬に乗りたる星竜の怒号！！

三人称 side

前回からの話から5日後、ラルドは退院してディーマ・・・もといティアと一緒に散歩したりご飯を食べたりしていた。ちなみにティアの主食は肉と野菜・・・もう馬とは言えないだろう。

だがそんなところに1人のフェアリーテイルの魔導士が現れた。

????「ラルド。」

ラルド「ん？お前は・・・確か・・・」

ラルドがこのクエストに来る前にフェアリーテイルによったが、大半の人に止められ行けなかったところにこの魔導士・・・ミストガンが来て、眠り魔法で皆を眠らせ俺はその隙に全力疾走で走りギルドを後にしたのだ。

ミストガン「・・・フェアリーテイルが襲われた。」

ラルド「・・・な！？・・・相手は？」

ミストガン「魔導士ギルド・・・ファントムロード・・・」

ラルド「ファントム！！！」

ファントムとはマスターはジョゼ。エレメント4というS級魔導士に匹敵する魔導士が4人所属。妖精の尻尾とは戦力は均衡しており、

昔から仲が悪く対立しているギルドだ。

ラルド「冗談じゃねえ!!今すぐ行くぞ。」

ミストガン「待て・・・それだけではない・・・ルーシィがさらわれ、マスターが倒れた。」

ラルド「んな!?!」

フェアリーテイルのマスターは聖十大魔導士といわれ、大陸で10番にはいるほどの魔導士だ。

そのマスターが・・・倒れた。

ミストガン「原因は魔力の枯渇・・・今は魔力が無いんだ・・・俺は今からファントムの支部を潰して回る・・・ラルド・・・お前は」

ラルド「ああ。まかせろ。フェアリーテイルは俺がなんとかする。」

ミストガン「頼んだぞ・・・ラルド」

ミストガンはそういうと、消えた。だがラルドには問題があった・・・

ラルド「どうやって行ったら・・・ミストガンが言うにはもう時間はない。」

ラルドは移動手段が無かった・・・今現在、フェアリーテイルにファントムがジューピターを発射しようとしているところだ・・・今からじゃ間に合わない・・・

ティア「クオオオオウ!!」

ラルド「え？乗れって？・・・分かった。」

ティアに乗ったラルド・・・刹那・ティアは走り出した。何よりも速く・・・その者たちを目で捉え切れる者などいない・・・かすかに出来た足跡が何かを通ったことは分かるが・・・そのとき・・・彼らはそこにはいず・・・ギルドへと向かっていた・・・

ラルド「お前速いなあ・・・これなら間に合うぞ!!頼むぞティア!!」

ティア「クオオオオオウ!!」

その頃ギルドは・・・

エルザ「まさか・・・こんな方法で攻めてくるとは・・・予想外だ・・・」

エルザの言葉に皆外に出ると・・・フェアリーテイルの後ろに広がる海の方からファントムのギルドが歩いてきている。

「魔導集束砲ジュピター用意・・・」

マスタージョゼの言葉とともにファントムのギルドからかなり大きな鉄でできた筒が出てきた。

「消せ……」

その瞬間に鉄の筒の先端に魔力が集まっていく。

エルザ「マズイ……全員伏せろー！ー！ー！」

エルザは叫びながらフェアリーテイルのギルドの前まで走り出した  
！！

エルザ「換装！！金剛の鎧！！」

ナツ「エルザー！ー！ー！！」

ナツはエルザの元に走ろうとする……だが

グレイ「よせ！！ナツ。今はエルザを信じろ！！」

グレイがナツの体を掴んだ瞬間……ジュピターが発射された。

だがエルザの鎧はジュピターを消し去った……しかしその代償は大きかった……エルザ……戦線離脱。今の彼女はもう動けないだろう……それほどまでにすさまじいダメージを負っている。

ジエゼ「マカロフ……そしてエルザも戦闘不能……もう貴様らに凱歌は上がらねえ

ルーシー・ハートフィリアを渡せ！！」

ルーシイは瞳に涙を溜め込みファントムのギルドへと歩もうとするが  
エルザ「仲間を売るくらいなら死んだ方がマシだ!」

フェアリーテイル「「「「オオー!!!!」」」」

ナツ「俺たちの答えはなにがあっても変わらねえ!お前らをぶっ潰してやる!」

ジエゼ「ほう・・・ならばさらに特大のジュピターをくらわせてやる!」

そしてジュピターが魔力を溜め始めたのと同時にファントムからフードを被って剣をもった幽霊みたいな奴らが大量に出てきた。

マカオ「おい!ジュピターを撃つんじゃねーのかよ!」

ワカバ「撃つはずねーよ!自分の仲間もいるんだ・・・はったりさ」

マカオとワカバが言い争っている中にカナが入り込む。

カナ「いや撃つよ・・・あれはジヨゼの魔法シェイド・・・人間じゃないのさ・・・ジヨゼが作り出した幽鬼の兵士・・・」

ミラ「そして・・・ジュピターが発射されるのは・・・約15分程度

そこにナツが

ナツ「俺が行く・・・15分だろ・・・やってやるよ・・・ハッピー！」

ハッピー「あいさー!!！」

ハッピーがナツを抱えファントム内部に先ほど発射されたジュピターを打った筒の中から潜入した。

グレイ「エルフマン!!俺たちも乗り込むぞ!!！」

エルフマン「おおう!!！」

グレイとエルフマンは別行動でファントム内部へと入っていった。

その頃ラルド達は・・・

ラルド「ん?あれは・・・」

はるか彼方に見えるのは黒い煙・・・ラルドはティアに風魔法で加速させようとするが・・・

風魔法が使えない。

ラルド「え?・・・なんで?」

ティア「クオオオオウ!!！」

ラルド「んな!?!」

ティアはこう言った『元々1つの魔法を分離して使っていただけ・  
・今のあなたは私と戦闘した時の4つの魔法しか使えない』と

ティア「クオオオオウ」

続けて『だけど安心して・・・あなたにコレを・・・』

そう言つてティアは1つの魔導書を取り出した。

ラルド「これは!?!?」

ティア「クオオオオウ、クオオ!!(それは星竜の古文書よ・・・ラ  
ルドが星竜の力を取り戻したときに渡してって言われてる。さソレ  
に魔力を込めて!!)」

ラルド「ああ。」

ラルドは古文書に魔力を込めた瞬間、信じられないほどの情報量が  
頭の中に入ってきた。それは、回復魔法、飛行魔法、破壊魔法、補  
助魔法など、多種多様の魔法が頭の中に流れ込んできた。そしてソ  
レが終わった瞬間・・・ラルドの背中に純白の澄んだ羽が生えた・  
・それはまるで金属のような光沢があり、それは見る者を魅了させ  
るほどの物だ・・・その姿はまるで竜というよりは天使だった・・・

ラルド「これは・・・」

ティア「クオオオオウ(それは、星竜だけが持っている翼・・・レ

アバードよ。その翼は攻撃にも飛行にも使えるけど、魔力の消費量が半端じゃないから消して。」

ラルド「・・・どうやって?」

ティア「クオオ?クオオオオウ(今までのとおりによればいいの。背中の翼を切り離すようなイメージで魔力供給を断ち切るのよ。)」

ラルド「分かった。」

ラルドは背中の翼を消さずに、いろんな魔法を試したが時間はない・・・急げ!!ラルド・エグフィード!!

そんな中ミラとルーシィは・・・

ミラ「ルーシィこっち来て!隠れ家があるの!戦いが終わるまでそこに隠れてて」

ルーシィ「そんな・・・私のせいで皆戦ってるのに・・・何で・・・」

ミラ「違うわよルーシィ・・・皆やられた仲間の為、ギルドの為、そしてあなたを守る為に・・・この戦いに皆誇りを持つてるの・・・だから言う事聞いてね・・・」

ミラはそう言うところルーシィの顔の前に手を構えて眠りの魔法を使っ

た。もちろんルーシイは眠った。

ミラ「リーダー！ルーシーを隠れ家へ！」

リーダー「うい．．」

リーダーと呼ばれた男は自分の体に馬車を描き、それが現実に現れた．．．その中にルーシーを入れて馬車は隠れ家へと向かった。

ミラ「お願いね．．．」

馬車が走り出すとミラは顔だけルーシーに変身して、倒れているエルザをギルドの中において出てきてこう叫んだ。

ミラ（顔だけルーシイ）「あなた達の狙いは私でしょ！！今すぐギルドへの攻撃はやめて！！」

しかし

ジエゼ「消えろ．．．ニセモノめ。」

ミラ「（え？そんな．．．）」

ジエゼ「始めから分かってたんですよ．．．狙われていると知っている人間を前線に置いておく訳が無い．．．とね。」

ミラ「（私は何でこんなにも無力なんだろう！？ラルド．．．助けて．．．）」



破壊力を生み出し、ジュピターを消滅させファントムのギルドの左側を少しだけ削り飛ばした。

ラルド「皆！！だいじょうぶか!？」

ラルドが聞くのと各々が返事をした。それは強い意志が込められていたが・・・彼らの体はもうボロボロだ。そんな様子を見たラルドは・・・

ラルド「そうか・・・」

と言い残し、ファントムの前へと駆けていった。

ジヨゼ「ばかな!?!?どうして生きている!!そして・・・なぜデーマに乗っている!!お前は・・・なんなんだ!?!?」

ラルドは冷たく・・・そしてマグマのような熱を帯びた声で言った・・・

ラルド「俺が何者でもかまわない・・・だが、俺は今まで・・・自分が信じる者・・・仲間のために戦ってきた。俺は・・・目の前に敵が現れたのなら・・・叩き斬るまでだ。・・・ジヨゼ!!お前は俺の仲間を傷つけた!!俺はお前を許さない!!待っている・・・必ずお前を斬る!!俺は・・・皆のために・・・負けられないんだよ!!..ジヨゼー!!..!!..!!」

怒れる星竜の咆哮・・・その声はきつと・・・

皆に届く・・・

## 第21魔法：対決！！エレメント4！！-？

ラルドside

ラルド「滅竜奥義・・・流星・・・」

ミラ「ラルド！！待って！！今中にはエルフマンにナツ、グレイがいるの！！」

ラルド「んな！？嘘だろう？くそ！！」

今中にナツやグレイたちがいる・・・それだけで俺の使える魔法は激減する・・・だったらティアと・・・

ラルド「ティア！！錯乱するぞ！！俺は飛んで移動する。お前は・・・帯電して移動だ！！」

ティア「クオオオウ！！」

その瞬間、突如空が黒くなった・・・そんな空から一筋の雷光がティアへと降り注いだ。ティアの体はより蒼くなり、美しくもなった。

それだけではない・・・今までの魔力量をはるかに超えている・・・それは俺のドラゴンヴォイスと同じようなものだ・・・今ティアは、スピード、パワー、俊敏さ、動体視力など全ての身体能力が上昇している。

そんな俺たちをどう思ったのか分からないが、ジョゼは次の命令をだした・・・その命令とは・・・

ファントムをファントムMK、2にしろというものだ。いきなり何を言っているのだと言われるかもしれないが、先ほどまでギルドだったものが巨人へと変貌したのだ・・・

驚いているフェアリーテイルを尻目に、巨人は魔方陣を描き出した。

ミラ「・・・あれは・・・アビス・ブレイク!!!?」

アビス・ブレイクとは禁忌魔法の1つで、その破壊力から禁忌とされてきた魔法であるが・・・その魔法をジョゼが使おうとしている。

ラルド「・・・禁忌魔法の1つだぞ!!!ジョゼ!!!」

ジョゼはマイクでこちらに言ってきた。

ジョゼ「構わん・・・お前らごとこの町を消してくれよう!!!」

その通りだ・・・この魔法は使われるとギルドどころか・・・町まで吹き飛んでしまう魔法なのだ。

ラルド「・・・ミラ・・・あの魔法・・・発動まで・・・何分だ?」

ミラは強張った表情で答えた。

ミラ「分からない・・・でも多分・・・約10分・・・」

ラルド「そうか・・・だったら・・・ティア!!」

ラルドはファントムの入り口に指差し、

ラルド「中に入るぞ!!」

ティア「クオオオウ!!」

そうして、ラルドはレアバードを解除しティアに乗ってファントムへと潜入した。

ラルド「（待っている・・・ジヨゼ・・・）」

三人称 side out

グレイ side

ジュピターを発射されたがラルドが止め、オレ達は今アビス・ブレ

イクを止めるべく、別行動している。

グレイ「ん？雨・・・なんか降ってたか？」

俺は外から魔導巨人を止める方法を探す事にした。

が外には雨が降り出し、そこに傘をさした一人の女性が歩いてきた

ジユビア「しんしんと・・・そう・・・ジユビアはエレメント4の一人にして雨女、しんしんと・・・」

グレイ「エレメント4か？・・・」

エレメント4！！ちょうどいい・・・こいつから情報を聞き出すか

ジユビア「まさか・・・竜喰いのラルドが生きているとは・・・計算違いでしたわ・・・」

グレイ「ラルドはそう簡単にやられやしねえよ。あいつは星竜の力を身につけて帰ってきた・・・いまのあいつならジヨゼにも勝てるだろうよ。」

俺はラルドがバカにされたと思いはジユビアを睨み

グレイ「悪いけど女だろうが子供だろうが仲間を傷つける奴あ容赦しねえつもりだからよお」

するとジユビアは頬を赤らめた・・・なんだ？コイツは？

ジユビア「そ・・・そう・・・私の負けだわ・・・ごきげんよう・・・」

「  
後ろを振り返り来た道を帰っていく……って

グレイ「オイオイオイッ！なんだそれ！！」

「うち！この巨人の止め方……こいつなら知ってるかも知れねえんだ

グレイ「待てコラ！この巨人の止め方知ってるのか！！」

いきなりジュビアが振り返ってきて

ジュビア「ウォーターロック！！」

俺を水の球体に閉じ込めた

グレイ「（しまった！罨か！！まじ……息が……）」

そんなグレイを神があざ笑うかのように、グレイの横腹の傷口が開いて血がにじみ出た。

グレイ「ゲウ！！」

ジュビア「まあ！どうしましょ！怪我をしていらしたなんて！はやくとかなきゃ」

ジュビアが慌てている！なんかよく分からんが今のうちだ。

パキィィンと水を凍らせてそのまま砕いて脱出した、はいいん  
だが、傷口が痛む……

それに・・・なんかこいつさつきからおかしいぞ・・・

グレイ「やってくれたなあ、コノヤロウ・・・」

なんかまた頬が赤くなりやがった・・・

グレイ「痛てて・・・」

今度はこつちからだ！！

グレイ「アイスメイク：ランス！！」

グレイの手のひらから魔法陣が出現して氷の無数の槍がジュビアに向かって飛んでいく

グレイ「え？・・・」

俺はかなり驚いた・・・いや・・・驚愕したと言つべきか？ランスがあいつの体を貫いたと思ったらそのまま抜けていった。

ジュビア「ジュビアの体は水で出来ているの・・・しんしんと・・・」

グレイ「水だあ！！？」

俺はさらに驚いた・・・普通体が水で出来てるなんてありえねえだろ！どんな魔法使つてんだよ・・・  
ファントムってこんな奴ばつかなのか？

ジュビア「さよなら小さな恋の花・・・ウォーターライター！」

ジュビアは水の斬撃を手から放ち、俺へと飛ばしてきたが、

グレイ「何いってやがんだ、コイツ！」

俺はよく分からん事を言ってきたジュビアの攻撃をギリギリで避け

グレイ「つく！アイスメイク：アックス！」

氷でできた斧でジュビアに攻撃したがジュビアの体がザバァンと音をたてながら斧が通り過ぎた。

グレイ「つち！」

ジュビア「あなたはジュビアに勝てない・・・今ならまだ助けてあげられる・・・だからお願いルーシーを連れてきて頂戴・・・そしたらジュビアがマスターに話して退いてもらおうわ。」

なにいつてんだこいつ！

グレイ「ふざけた事言ってるじゃねえぞ・・・もうお互い退けねえとこまできてんだろうが・・・」

俺はジュビアを睨みながら。

グレイ「ルーシーは仲間だ・・・命に代えても渡さねえぞ・・・」

するとジュビアは傘を落としてこの世の終わりみたいな顔をした・・・

グレイ「おい・・・どうした「グスンツ」え・・・」

なんでここで泣くんだよ・・・

ジユビア「キイイイイイイ！！」

おいおいおい！！今度はなんか急に怒り出したし！！なんだよこいつ！！

グレイ「ジユビアは許さない！ルーシィを決して許さない！」

なんだ！あいつから湯気が出てきたぞ・・・てかなんでルーシィにキレてんだよ・・・マジ意味わかんないし・・・

グレイ「あち！！熱湯か！！？」

熱湯か・・・どつりで湯気が出てるはずだ・・・それにしてもこれ何度あるんだ？相当熱いぞ・・・

ジユビア「シエラア！！」

なんか変な事を言いながらあいつの体が液体になってこつち向かってきた。

グレイ「アイスメイ・・・」

う！こいつ・・・俺が魔法を発動する前に！

グレイ「はええ！！俺の造型魔法が追いつかねえ」

ジユビアは俺に熱湯の液体のまま向きをすぐに変えて突っ込んできやがる！

グレイ「時間を稼ぐか・・・！」

俺は近くにあった窓ガラスを割り下におりて、走って距離をとった、しかしジユビアがそのまま俺に突っ込んできた。

グレイ「っち！アイスメイク：シールド！！」

オレは大きな氷の盾を作り出したが・・・

ジユウウウウ

グレイ「ゲ！まじかよ・・・」

俺のシールドが熱湯で溶けやがった・・・どんだけだよ・・・

グレイ「あつ！！皮膚が焼けて・・・」

俺が腕を押さえた瞬間にジユビアの熱湯となった中に取り込まれた。そのまま上に向かっ外に押し出された。

グレイ「クソ！！凍りつけ！アイスメイク：ゲイザー！！」

ジユビアの熱湯がだんだんと凍っていく・・・

ジユビア「そんな！雨まで凍りに・・・なんて魔力なの！！あああああああ！！」

ジュビアは叫びそして凍りついた・・・そして氷の部分だけが砕けていく

パキイン

グレイ「どーよ・・・熱は冷めたかい？」

俺は倒れているジュビアに声をかけた、するとジュビアが空を見上げて

ジュビア「あれ？雨がやんでる・・・」

グレイ「お！やっと晴れたか・・・」

ジュビアは目から何故か涙を流している・・・

グレイ「で？まだやんのかい？」

俺が聞くとジュビアがなんか真っ赤になってそのまま気を失った・・・  
・最後まで変な奴だったな・・・

グレイSide out

三人称side

その頃エルフマンは巨人を止める為にエレメント4に聞こうして大地のソルと戦っていた。

ソル「あなた・・・昔妹さんがいましたね・・・」

ソルはエルフマンの攻撃を避けながら喋っている。

ソル「あなたは昔全身テイクオーバーに失敗し・・・暴走した・・・妹さんはそれを止める為に命を落としてしまった・・・違いますか？」

エルフマン「ビーストアーム！鉄牛！！」

エルフマンはソルの言葉を無視して鉄牛の鉄の腕でソルを殴りにいったが簡単に避けられた。

ソル「ノン・ノン・ノン3つのNOでお話をしませんか？」

ソルはエルフマンを蹴り飛ばした。エルフマンはかなり疲れている。

ソル「もうファイナレですか？」

エルフマン「（こいつ！見かけによらず強え・・・）」

そんな中、巨人に捕まったミラの姿が目に入った。

ミラ「エルフマン・・・もう止めて・・・」

エルフマン「何で・・・泣いてんだよ・・・絶対に・・・姉ちゃん

の涙は見ないって決めたのに・・・

エルフマンが立ち上り全身を魔力が包み込もうとしている・・・

エルフマン「（やるしかねえ！全身テイクオーバー！！）」

しかしエルフマンの体から魔力は消えていく。

エルフマン「（リサーナ・・・）」

エルフマンの頭の中にリサーナの顔が浮かんだ

ソル「やはりあの噂は本当でしたか・・・あなたは過去の妹さんの事がトラウマで全身テイクオーバーが出来なくなっているんですね・・・

エルフマン「だまれ！！」

エルフマンが叫び拳を振るおうとするが、

ソル「無理をするものではありませんよ？今ので大幅に魔力がダウンしていますね・・・プラトールソナート！！」

ソルの手から土でできた拳が放たれる。

エルフマン「ぐわ！！」

そしてエルフマンは壁に叩きつけられた・・・そらに

ソル「あなたには永遠に過去をさ迷ってもらいますよ・・・封印魔

法メセラヴィー!!」

ミラ「エルフマン!!」

ミラの声はもう彼には届かない。

エルフマンを土がどンドンおおっていく・・・

そして彼は過去の世界へと向かっていく、

第22魔法・対決！！エレメント4！！ - ? (前書き)

お久しぶりでス。すいません試験と被ってしまつて更新が遅れました。

## 第22魔法：対決！！エレメント4！！-？

エルフマン side

俺たちは3人兄弟だった・・・2人じゃないの？と言われるかもしれないが3人兄弟だった・・・そう・・・だったんだ・・・ミラジエーンが長女・・・俺・・・エルフマンが長男・・・そしてもう一人・・・次女のリサーナ・・・だがりサーナは2年前に死んだ・・・2年前の事故・・・いや・・・事件で・・・皆は事故だって言っているけど・・・俺は事故だと思う・・・だって・・・リサーナは・・・

オ（・・）レ（・・）が（・・）殺し（・・）た（・・）ん（・・）だ（・・）か（・・）ら

225

エルフマン side out

エルフマンの見ている風景がいきなり景色が変わった。

そこには15～16歳の時のナツがりサーナとハッピーとマゲノリア南口公園の木の下で話している。

そこにエルフマンとミラが歩いて来て・・・

エルフマン「お〜いリサーナ、仕事だ仕事」

リサーナ「え？今帰ってきたばかりじゃない・・・」

エルフマン「S級だよS級！姉ちゃんが受けたクエストのサポートに行くんだ」

ナツ「ずり〜ぞ〜！なんだよそれ！！」

ハッピー「どんなクエストなの？ミラ」

ミラ「緊急討伐さ・・・獣の王ザ・ビーストって言う奴をやりにくいさ、ナツも行くか？いい経験にもなるしさ、」

ナツ「いいのか？」

「な！！姉ちゃん！俺は反対だぞ！漢たるとも一人で家族を守るべし！！」

ナツ「なにケチくせー事言っただよ！いい〜じゃね〜か。」

そしてミラ達はザ・ビーストの討伐に行く事になった・・・  
のだが・・・あんな事件がおきるなんて・・・誰も想像はしていなかったんだ・・・

場所は変わり・

ビースト「グオオオオ!!」

ビーストが暴れているのだ。ミラは町の中でビーストえお食い止めようとしている。・・・そんな中リサーナが魔法・・・アニマルソウルで鳥になって飛んできた・・・

リサーナ「ミラ姉!!」

ミラ「リサーナ!!」

リサーナ「町の人を避難させたよ!!・・・エルフ兄ちゃんは何？」

ミラ「・・・あれだ・・・」

そういつてミラはビーストへと視線を送った・・・

ミラ「ザ・ビーストをテイクオーバーしたんだ・・・それで逆に奴の力に負けて、暴走したんだ・・・」

リサーナはミラを見ると右腕が折れていると気づいた。おそらく・・・ミラを助けようとしたエルフマンが、ビーストをテイクオーバーしたが奴の力に負けて暴走した・・・テイクオーバーとは、術者が相手を体の中に取り込むことで強大な力にすることだった・・・がそれはリスクを伴う・・・それがコレだ・・・

・・・リサーナは何かを決心したかのようにビーストの前へと歩いていった。

リサーナ「エルフ兄ちゃん・・・帰ろう・・・エルフにいちゃ・・・」

リサーナが言い終わるまでに・・・ビーストは拳を振り下ろした。リサーナははるか彼方へと吹き飛んでいった・・・ソレを見たミラが血相を変えてリサーナの元へと駆けていった。

ミラ「リサーナ!!」

リサーナは左腕が折れて、内臓もやられているようだった・・・

そんなところにビーストの前に、1人の青年が現れた。

ラルド「・・・かすかに人の気配を感じる・・・」

ゼロ「ああ・・・恐らく・・・あいつに取り込まれたんだろう・・・」

それは・・・幼き日のラルドたちだった・・・

ゼロ「・・・助けるぞ・・・ラルド・・・」

ラルド「ああ・・・炎竜の咆哮!!」

ラルドの炎のブレスはビーストへと当たり次の攻撃に繋がった。

ラルド「サイクロン!!」

風の魔法を使い、奴を中に浮かした後に・・・

ゼロ「ラルド!!今だ。」

ラルドは異次元から魔導書取出しソレを開いた。

ラルド「OK・・・デイスペル!!」

その魔法はビースト・・・もとい、エルフマンの体を光で包み、元の体へと戻った。もちろん意識はない。

ラルド「・・・よし。」

しかしそれで全てが救われた訳ではなかった。

ミラ「リサーナ!!しっかりしろ!!」

遠くでミラの声が聞こえる・・・その声を聞いたラルドは、

ラルド「ゼロ!!そいつの・・・ビーストの近くにいろ!!」

と言い放ち、ミラの元へと駆けていった。

ラルド「大丈夫か!?!しっかりしろ!!今すぐ治療を・・・」

その時だった、急にリサーナの魔力が消え・・・息を引き取った・・・

ミラ「う・・・う・・・リサーナ?起きろよ・・・リサーナ

！！リ・・・リサーーーーナーアーーーー！！！！」

ラルド「・・・（俺は・・・他人を・・・守れないのか？）」

ゼロ「ラルド・・・行くぞ・・・」

ラルド「・・・ああ。」

そうして2人は闇へと消えていった。

エルフマン「リサーナ・・・」

ギルドの皆は葬式を開く事になった・・・葬式が終わった後エルフマンが1人で墓の前で泣いていた・・・

エルフマン「俺の・・・俺のせいでリサーナが・・・うう・・・」

そこにミラがエルフマンを抱きしめて、

ミラ「エルフマン・・・あなたのせいじゃないよ・・・生きてるものはいつか必ず死ぬんだ・・・」

ミラの言葉にエルフマンはシンが昔言っていた言葉を思い出した

ミラ「リサーナが言ってた・・・死んだものは生きかえらないけど・・・その人の事を思っていればその人は思ってる人の心の中で生きつづけるんだ・・・」

ミラも泣いて話をしている。

エルフマン「俺はもう・・・姉ちゃんの泣くところを見るのはいやだ・・・絶対に俺が守って見せるんだ!!」

時は戻り現在・・・

ミラ「エルフマン・・・エルフマン!!」

エルフマンがもう少しで岩に吞まれるかと思ったその時に目を覚ました。

エルフマン「・・・なんで・・・泣いてんだよ・・・もう・・・姉ちゃんの涙は見ないって・・・誓ったんだ・・・」

突如エルフマンの体から光が溢れ出し、岩が崩れていく。

エルフマン「なのに・・・何で泣いてんだよ!!全身テイクオーバー!：ビーストソウル!!」

岩が完全に飛び散った瞬間・・・そこには、ザ・ビーストと瓜二つのエルフマンがたっていた。

ソル「んな!？」

エルフマン「グオオオオ!!」

エルフマンは吼える・・・そう・・・あのと時のように・・・

ソル「ラトール・ソナート!!」

ソルは先制すべきと考えたのだろう、土で作った拳を飛ばしてきた。

ソル「ノンノンノン、油断でしたねえ」

しかしエルフマンは傷一つつかず、ソルに拳を何度も振り下ろした、  
そう・・・何度も・・・

そこにラルドがやってきて・・・

ラルド「エルフマン!!もう決着はついている!!やめるんだ!!」

ティア「クオオオオウ!!」

エルフマン「グルルル・・・」

エルフマンはそう頷くと攻撃をやめミラの元へと駆けて行った。

ミラ「エルフマン・・・」

エルフマンはミラを捕らえている巨人の手を強引に緩め、ミラを抱きしめた。

エルフマン「姉ちゃん・・・こんな姿・・・二度と見たくなかった  
だろう?コレをうまく操れなかったせいで・・・リサーナは・・・  
でもコレしかなかったんだ・・・姉ちゃんやフェアリーテイルの皆

を守るためには、オレが強くならなくちゃって」

ミラ「リサーナはあなたのせいで死んだんじゃないのよ・・・あの時だって、あなたは必死で私たちを守るうとして・・・」

エルフマンはビーストソウルを解き、こう続けた・・・

エルフマン「守れなかったんだ・・・リサーナは死んじゃった・・・」

ミラ「私は生きているわ・・・2人で決めたじゃない・・・リサーナの方も生きようって・・・」

エルフマン「姉ちゃん！」

エルフマンは泣き出した・・・その涙には2年ものものがつまっていたんだ・・・

第22魔法：対決！！エレメント4！！ - ?（後書き）

え？何でラルドたちを出したって？だってゼロえお久しぶりにだしたくなっただからですよ。

次回エルザVSアリア&ナツVSガジル&エルザVSジヨゼ&ナツの  
が になるです。それではまた次回でお会いしましょう！  
う！！

第23魔法・決着！！VSエレメント4 俺を、私を・・・超えていけ！！

三人称side

エルフマンがソルと戦っている頃ナツは

ナツとハッピーはグレイ、エルフマンと別れて魔導巨人の止め方を探して走っていた。

アリア「悲しい・・・炎の翼は堕ちてゆく・・・ああ、そこに残るは竜の屍・・・」

ナツとハッピーのまえにアリアが姿を現したのだ。

ナツ「・・・あ!？」

ハッピー「ナツ、こいつエレメント4だよ!」

アリア「我が名はアリア・・・エレメント4の頂点なり、ドラゴン狩りに推参いたした」

そしてナツとアリアの戦いが始まった・・・

その頃ラルドとエルフマンたちはグレイと合流していた・・・

エルフマン「・・・なんか・・・巨人の動きが遅くなってねえか？  
・・・」

ミラ「確かに・・・魔方阵を書くスピードが遅くなってきている・・・」

ラルド「・・・生体リンク魔法・・・か・・・」

みんなはラルドの方向に一斉に向いた。だがラルドは続ける・・・

ラルド「おそらくこの巨人は生体リンク魔法で動いている・・・現  
に、エレメント4を倒す度に、この巨人から魔力が薄れていつてい  
る。エレメント4・・・つまりアリアを潰せば・・・この巨人はと  
まる。」

グレイ「だったら話は早い。いくぞ。」

みんなはアリアの元へと走り出した。

そんな中ミラが妙な事を言ってきた・・・

ラルド「目？」

ミラ「ええ……アリアは自分の強大な魔力を普段目を閉じてる事で抑えているの……だからアリアに目を開けさせてはだめ……目を開けるまでに叩かないと……」

そんな中ラルドが何かを感じ取った。

ラルド「！！……ルーシイの魔力だ……」

グレイ「え？」

ミラ「何言ってるの？ラルド……ルーシイは今隠れ家に……」

ルーシイの所在はミラにしか分からない……ミラはルーシイを眠らせ、リーダーダスに隠れ家に向かわせた。……が、

ラルド「多分……場所がばれたんだ……おそらく、ドラゴンズレイヤーのガジルに……」

ミラ「……ガジル……」

ラルド「ああ……ドラゴンズレイヤーの鼻はかなりいい……俺はルーシイを助けに行く……みんなはアリアを……」

ミラ「分かったわ……まかせて……」

ラルドはティアに乗り、走り出した。

ナツたちは・・・

ナツ「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

ナツはアリアにかなり苦戦している・・・

「（そんな・・・こんな一方的にやられるナツは初めて見る・・・）  
」

ハッピーが見ている光景は・・・見えない魔法にナツがやられている所だった・・・

アリア「よくぞここまで立っていられる・・・たいしたものだ」

ナツ「くそっ!!」

ナツは拳に火をまといながらアリアに向かっていく・・・しかし

アリア「我が空域の魔法の前では手も足もでまい!」

アリアの手から魔法陣は出現してはいるがなにも起こらない・・・  
そしていきなり

ナツ「ぐお!!?」

ナツがなにかにやられて吹っ飛ぶことだけが分かる・・・

ナツ「まだ立つかサラムンダー。」

「倒れる訳にはいかねえんだろ・・・ジュピターも止められず・・・俺はフェアリーテイルの魔導士なんだ！！ラルドがだけじゃねえ！！燃えてきたぞコノヤロオ！！」

ナツ「火竜の咆哮！！」

アリア「上には上がいるのですよ・・・若き竜よ・・・」

アリアはスウウウつと消えてナツの背後に回り込む・・・ナツは心配がなくなったアリアを探す・・・

ナツ「どこに消えやがった・・・」

ハッピー「ナツ！！後ろ！！」

アリア「終わりだサラムンダー・・・あなたにマカロフやヒドウンフェアリーと同じ苦しみを与えてやるっ・・・」

ナツは声がした瞬間後ろを振り向くがすでにアリアは魔法をかけていた・・・

アリア「空域【滅】！！その魔力は空になる・・・」

ナツ「やば！・・・う・・・あ・・・が・・・」

ナツを包む魔力はナツの魔力を流出していく・・・

「え・・・？」

ナツを包む魔力が突如消える・・・

ハッピー「エルザ!!」

ナツの目の前にはボロボロのエルザが立っていた・・・

ナツ「エルザ・・・動いて大丈夫なのかよ?・・・」

ナツがエルザに話かけようとするが・・・

エルザ「こいつがマスターを……………」

エルザの怒りの気迫のようなものにナツはビクツとする・・・

エルザ「私達の親に・・・仲間に手を出したのはこの男だな・・・」

┌

アリア「ふふふ・・・悲しいな・・・私に聖十大魔導師・・・そして更にサラマンダーとティターニアの首まで私にくれるとはな・・・」

┌

「だまれ!マスターが貴様などに勝てる相手ではない!!貴様が卑怯な手を使った事くらい分かる!!」

アリアは不気味に笑う・・・そして目隠ししている布を取り始める

アリア「そうですか・・・しかしティターニアとこうして戦うには私も本気を出さねばなりません・・・」

マカオ「お・・・おい！魔法陣が完成したのか！！」

カナ「ここまでなのか・・・」

外で巨人の作り出した魔方陣・・・アビスブレイクが光だしている・

アリア「来い！エルザ・・・死の空域【零】発動！この空域はすべての命を喰いつくす・・・」

アリアが構えを取ると周りの魔力が吸い取られていく・・・

エルザ「命を食う魔法だと・・・なぜそこまで簡単に人の命を奪えるんだ！！貴様らは！！」

エルザは剣を換装してアリアに切りかかっていく。

アリア「さあ、楽しもう・・・」

アリアは不気味に笑い死の【零】の空域をエルザに飛ばした。

アリア「あなたにこの空域が耐えられるかエルザ・・・」

エルザは空域を切り裂きながら進んでいく。

アリア「え！？バカな・・・空域が切り裂かれて・・・」

エルザは驚いている隙に天輪の鎧に換装してアリアに近ずき・・・

エルザ「天輪・ブルーメンブラット!!」

エルザの周りに浮いているすべての剣がアリアを四方八方から貫いた・・・

エルザ「貴様などにマスターがやられるわけがないだろう・・・いますぐ己の武勇伝からけしされ!!」

ナツ「エルザ!!」

エルザは倒れてしまった・・・無理もない・・・ジュピターを防ぎ、アリアを倒したのだ。

エルザ「ナツ・・・」

そのすぐ後に・・・

ジョゼ「フェアリーテイルの皆さん・・・我々はルーシィを捕獲しました」

エルザは齒を食いしばって悔しそうな顔をしている・・・

ジョゼ「これで一つ目の目的は達成されたのです・・・」  
「キャアアアアア」

音声からルーシィの悲鳴が聞こえる・・・

ジヨゼ「・・・聞こえたでしょ？我々に残された目的はあと一つ・・・  
貴様らの皆殺しだ！クソガキども！！」

ジヨゼはシェイドを強化し再び襲わせた・・・

外ではみんなの悲鳴が聞こえてくる・・・仲間の悲鳴だ・・・

エルザ「ナツ・・・力を解放しろ・・・お前にはまだ眠っている力がある・・・」

ナツ「眠ってる力・・・」

ナツに俺が話すとエルザが

エルザ「お前は私を越えていく男だ。自分を信じ・・・貫き・・・  
呼び起こせ！！」

ナツは走る・・・ルーシイの元へ・・・そんな中、ラルドと偶然にも合流した。

ラルド「ナツ！！」

ナツ「・・・ルーシイが捕まった・・・」

ラルド「・・・分かっている・・・お前はとうするっ」

ナツ「ガジルを．．．ぶっ飛ばす!!」

ラルド「．．．そうか．．．だったらルーシイはまかせる．．．俺はジョゼをやる．．．」

ナツ「んな!?無理だ!!あいつは．．．」

ラルド「お前こそ、ガジルやれんのか?．．．魔力だって0に等しいじゃないか．．．」

ナツ「．．．それでも．．．やる．．．繋がる心が．．．俺たち! !フェアリーテイルの力だ!!」

ラルド「．．．お前は1人じゃない．．．俺が．．．みんながついている．．．コレを持って行け．．．」

そういつてラルドは左手に炎を纏わせナツに突き出して言った。

ナツ「．．．銀色の炎．．．」

ラルド「．．．これは星竜の炎だ．．．持つて行け、そして開放し  
る．．．竜の力を魂を．．．そして．．．竜の心を、俺の炎で俺を  
超えていけ、ナツ!!．．．だが忘れるな、この炎はきっかけを与  
えるだけだ．．．己の壁を越える．．．信じる．．．己が魂を．．．  
ルーシイを頼むぞ．．．ナツ．．．」

ナツは無言で頷き、彼の炎を手に取り、喰らった．．．

ナツ「．．．任せろ．．．みんなを頼むぞ、ラルド。」

ラルド「ああ・・・」

そうしてふたりはお互いハイタッチをしそれぞれの向かう場所へと走っていった。

奮いたてる！！竜の魂の鼓動を！！

守れ！！仲間の心を！！

繋がる絆が、フェアリーテイルの力だ！！

第23魔法・決着！！VSエレメント4 俺を、私を・・・超えていけ！！（後

次回、ナツ&ラルドVSガジル&ジョゼ！！

第24魔法・限界を超える！！仲間を信じる！！ドラゴンフォース！！！！

三人称 side

ここはファントムの中樞・・・そこにルーシイが捕まっている。両手首と両足首に拘束具をつけられている。ガジルは右手にナイフを持っている。

ガジルは右手に持っていたナイフをルーシイへと投げた。

ガジル「ヒヤハ！！」

まずい！！当たる！！といったことをファントムのメンバーが各々口に出している。

しかし・・・

ガキイイン！！と甲高い音を立てて床が崩れた・・・いや、吹き飛んだと言うべきか・・・そのナイフを口に挟んだナツが舞い降りた。

ガジル「やっぱりな・・・匂いで気づいていたぜ。」

ナツ「ウオオオオオオオオー！！！！」

ナツは怒りの雄たけびをあげ魔力を解放した。

ルーシイ「……………火竜くサラマンダー>・・・」

ナツの体を纏っている炎は竜の姿を映し出していた。

だが、ただの炎ではない・・・所々白い部分もあり翼はキラキラと  
淡く、白銀に輝く光を放っているその姿はまるで・・・

白炎竜　いまここに・・・

ナツ「ガジルウウウーウウウツツッ!!」

ナツの右拳は白炎を纏いガジルの右頬に向けて振り下ろした。

ガジルは吹っ飛びファントムの魔道士の元へと・・・

ガジル「どけえ!!」

ガジルは回りにいるファントムの魔道士を殴り飛ばしたがそのガジルの眼前にはナツが拳を振り上げてきた。

ルーシィ「あんなナツ・・・見たこと無い・・・」

そこにルーシィを拘束していたものはずしていくハッピーがいた。



ガジル「ギヒツ・・・」

ナツ「ウワアアア!!」

殴ったナツが悲鳴をあげた。殴った部分は魚の鱗みたいになっている。

ルーシィ「何・・・あれ・・・」

ハッピー「体を硬化させたんだ!!」

ルーシィ「硬化？」

ハッピー「簡単に言うと、体の外側の部分・・・皮膚とかそういう部分を鉄に転換させたんだ。」

ガジルが右腕をナツめがけて振り下ろした。

ナツはソレを左手でガードするが、

ポキッと音を立てて、ナツの左腕があり得ない方向に曲がった。

ルーシィ「折れ・・・」

ハッピー「鉄竜の鱗が、攻撃力を何倍にも増加させているんだ!!」

ナツはその瞬間少しの間があった。好機と見たのか、ガジルが両腕を振り上げ手のひらを合わせた。

ガジル「滅竜奥義！！業魔・鉄神剣！！！」

ガジルは両腕を巨大な剣に変え、それを振り下ろした。

その瞬間にナツは後ろに跳んだが、時すで遅し・・・左肩から右わき腹まで切り裂いた。

ナツ「グワアアアアーアアア！！！」

だが後ろに後退したぶん傷は浅かった。もう一度言おう、切り裂いたのだ。切断しているわけではない・・・だがナツはそのダメージに耐え切れなかったのか地にひれ伏した。

ルーシィ「ナツウウウーウーウウ！！！！！」

ガジル「ハア・・・ハア・・・ギヒ・・・オレの勝ちだ。サラマNDER、ん？もうそろそろギルドが潰れるなあ・・・ちょうどいい、お前にも見せてやるよ。」

そう言い、ガジルはナツの後頭部を持ち宙に上げフェアリーテイルが見えるところまで向かった。

意識が朦朧としているナツが見たのは・・・崩れていくギルドだった。

刹那・・・ナツの中で何かがあふれ出てきた。

ナツ「声が聞こえる・・・これは・・・ルーシイ？オレの名前を呼んでいるのか？・・・あゝあ・・・フェアリーテイルが崩れちまつたし・・・もう・・・だめだな・・・ラルド・・・ごめんな・・・  
・約束・・・守れそうに無いや・・・約束？」

鼓動が早く・・・そして熱くなる・・・

ナツの脳裏に浮かんだのはあの時の言葉・・・

ラルド「ルーシイを頼むぞ・・・ナツ、俺はジョゼをやる・・・俺はあいつを許さない！！なあナツ・・・ギルドって何だと思う？俺は形と心だと思う。俺たちがフェアリーテイルである限り・・・俺たちは繋がっているんだ。行くぞ、ナツ。守るべき者たちのために・・・」

ナツ「（そうだ・・・オレは・・・約束したんだ・・・ルーシイを守るって・・・オレには力があるんだ！ラルドに貰った、新しい力

が………ここで！！今！！解放する！！目覚める！！オレ  
の中に眠る！！竜の力！！！！」

ナツ「ドラゴンフォース！！！！！」

ナツを掴んでいたガジルが吹き飛んだ……

ガジル「何だ！？この魔力は……」

ハッピー「何？……あれ……」

ルーシー「きれい……」

ナツの姿は、白炎に身を包み、銀色に輝いている。

ナツ「今までの借り……全部かえしてやるよ！！！」

ナツは床を踏みしめ一気に跳躍し両腕に火の玉を形成し、ソレを投げた。

ナツ「ジェット……ドロイ……レビィ……ルーシー……フ  
エアリーテイル……どれだけのものを傷つければ気が済むんだ！  
！お前らわぁー！！！！！」

ガジルも負けじと反撃をした。

ガジル「鉄竜の咆哮！！！」

ナツは両腕を前に突き出しソレを掻き消した。

ガジル「オレは・・・最強の・・・」

ナツ「これで終わりだアアアア！！！星火・竜演舞！！！」

両手両足に炎を纏い、まるでダンスをするかのように連撃を叩き込んでいく。そしてフィニッシュは・・・ガジルを天高く吹き飛ばし、ナツもソレを追うように跳躍した。そしてガジルとの距離が完全に縮まり、上下が逆になった瞬間に両腕を天高くあげ巨大な火の玉を作り、ソレを投げ込んだ。

ナツ「ウオオオオオオー！！！！」

その火の玉はファントムのギルドさえも崩した。

ナツ「・・・これで・・・おあいこな・・・」

ルーシィとハッピーは涙を流し喜びを表現している。

その頃ジョゼたちは・・・

グレイ、エルフマンがジョゼの攻撃によって気を失っている・・・そしてジョゼとたいじしているのはエルザだ。しかしエルザも息を切らしすでにボロボロであった。そんなエルザをジョゼは魔法によって宙に上げた。

エルザ「(すまない・・・みんな・・・後はまかせた。)」

エルザは魔法剣を操り、自分の腹に刺した・・・はずだったが・・・  
突如周りが明るくなり、エルザの剣は途中で止まった。

・・・足音が聞こえてくる・・・

ラルド「いくつもの血が流れた・・・仲間の血だ!!俺のせいであ  
くさんの仲間が涙を流した・・・血を流したんだ・・・もうた  
くさんだ・・・ここで終わらせてやる!!」

エルザ「ラルド・・・」

ラルドは右手に蒼剣を持ち、銀色の魔力が溢れている。

ジョゼ「私とやり合うというのか?小僧・・・」

ラルドは左手に左腰に刺してあるハンドガンを握った・・・通称Z  
バスターの銃口をジョゼに向け・・・

ラルド「・・・それが・・・仲間のためなら!!」

今この戦いに終止符が打たれようとしている。白銀の戦士と漆黒の  
魔道士・・・神はどちらを味方するのか

第24魔法・限界を超える！！仲間を信じる！！ドラゴンフォース！！！（後書

次回・ラルドVSジヨゼ

ついに剣の名前が明らかになります。結構単純ですよ。

ヒントは第11魔法・修行とS級です。

次回またお会いしましょう。

## 第25魔法・覚醒

三人称 side

崩れかけたファントムのギルドの中でたいじする2人の魔道士・・・  
1人はラルド・エグフィード、フェアリーテイルの魔道士だ・・・  
そのものは竜喰いの字を持ち、新たな魔法・星竜の滅竜魔法の使い  
手だ。もう1人はジヨゼ・ポーラ、ファントムのマスターだ・・・  
非常に冷血でこの若さでここまでの魔道士へと上り詰めた。そのジ  
ヨゼをハンドガン・・・もとい、Zバスターの銃口を向けているラ  
ルド。

ラルド「ティア・・・みんなを外に・・・」

ティアは小さく頷くと、エルザの元へ行った。

エルザ「・・・え？」

当然の反応だろう・・・エルザはティアを知らない。

ラルド「・・・エルザ。そいつにそこに転がっている2人をティア  
に乗せて外に行ってくれ・・・巻き込まない自信が無い。」

エルザ「・・・分かった。」

そう頷くとエルザはティアにグレイをエルフマンを乗せミラを抱え  
て走った。

ジヨゼ「っふ・・・小僧が出てきたんだ・・・雑魚はいりませんよ・

・・・」

ジヨゼは頬を少しだけ吊り上げて言った。

ラルド「俺の仲間だ・・・バカにしてんじゃねえよ・・・お喋りはここまでだ・・・行くぞ・・・」

ラルドはZバスターの引き金を引いた。と同時にジヨゼは動き出した。

ジヨゼ「シェイド!!」

ジヨゼは自分の魔力でシェイド・・・闇の剣士をつくりそれを盾にし、4、5体を俺に向かわせてきた。

ラルドはそれらを剣で切り裂いていく・・・1体目、2体目、3体目とシェイドを消していく。

5体目を切り裂いた瞬間に、

ジヨゼ「デットウェイプ!!」

ジヨゼは右腕からドロクロのような気持ちの悪い魔砲が放たれる・・・

ラルドは左腕のチャージしていたZバスターの引き金を引いた。

それは先ほどのバスターとは思えないほどに威力、大きさなど全てが勝っていた。

バスターがデットウェイプに当たった瞬間にはじけて爆発、相殺し

た。と同時に剣とバスターを腰に収めた。

ラルド「ジャツジメント!!」

空に巨大な魔法陣が現れ、そこから人ほど光の柱が大量に降ってきた。

ジヨゼはそれを恐れる様子も無く、かわしながらラルドに近づいていった。

ジヨゼ「その魔法・・・自分の周りには打てないでしょう?」

ラルド「っく。」

ジヨゼの言い分はもつともだ。強力な魔法ほどどこかに決定的な弱点がある。

この魔法で言うと、自分自身に攻撃が当たらないようにするために自分の周りに落とせない。それをジヨゼは一瞬で見切ったのだ、やはり腐っても聖十魔道士だ・・・

ジヨゼ「もう一回行きますよ・・・デットウェイプ!!」

至近距離で放たれた魔砲、ソレをかわす術は・・・あった。

ラルド「レアバード!!」

ラルドは金属のような光沢があり、真っ白な翼を召喚して飛んだ。

ジヨゼ「まったく・・・ずるいですね・・・そんなものがあるなん

・・・て!!」

ジヨゼは両腕からどす黒い魔砲を高速、かつ大量に放ってきた。

ラルド「星竜の咆哮!!」

ラルドのブレスは射線上にあるものを破壊、消滅させながら進んでいく。

そしてソレはジヨゼに当たると爆発した。

ラルドは空中に浮遊したまま、チャージしたバスターを取り出し天に向けて放った。

ジヨゼ「グワアア!!」

ジヨゼはラルドのブレスが当たる直前に一瞬でラルドの上をとり魔法を使って一気に仕留めようとしたが、ラルドはその意図に気づき上に向けてバスターを放ったのだ。

だが星竜の攻撃はやまない。

ラルド「星竜の翼爪!!」

ジヨゼにこれでもかと言わすぐらいの連続攻撃・・・だが

ラルドの攻撃が当たった瞬間にジョゼがはじけた。

ジョゼ「どこを見ているのかい？」

ラルド「!？」

ジョゼ「もう一発・・・デットウェイプ!!」

今度は避けれない。デットウェイプをまともに受けた・・・

そのままラルドは地面へと落ちた。

ラルド「ぐっ・・・な・・・何だ・・・今・・・の・・・は・・・」

少しずつ、ゆっくりと立ち上がるラルドにジョゼはこう告げた。

ジョゼ「なぐぐに・・・シェイドですよ。もつとも、シェイドを使ったのはあなたのバスターが当たった後ですが・・・」

ジョゼはラルドの攻撃が当たる前にシェイドを身代わりとして作り、背後に回りこみ魔法をつかったのだ。

ラルド「・・・だったら・・・」

ラルドは剣を取り出し、魔力を込める。そしてそのまま剣を振り上げ、振り下ろした。

次の瞬間剣から膨大な量の衝撃波と魔力の塊がジョゼへと向かっていった。

それがジヨゼに当たった瞬間、ラルドは距離を詰める。

ラルド「ウオオオオオオオオ!!!」

ラルドは剣をジヨゼへと振り下ろした。かろうじて直撃を免れ、魔法で防御したがこれには反応できない。魔力の塊を剣の前に出すだけで精一杯だった。

だがラルドの剣はその魔力の塊に当たった瞬間に柄だけ残り、砕け散ってしまった。

ラルド「……え? ……」

思考が停止する。その瞬間にジヨゼが、両腕に魔力を溜めて放った。

ラルドは吹き飛んだ……

ラルド「(おかしい!!なんで俺の剣がこんな簡単に……)」

立ち上がるうとしているラルドにジヨゼはこう告げた。

ジヨゼ「おや……まだ戦おうというのですか……いいでしょう……もつとも折れた刀はもう使えないでしょうが……」

だがそんな言葉とは裏腹にラルドの表情は穏やかなものだったのだ。思い出したのだ……剣の名前を……

ソレは7年前の7月1日……

回想 ……

.....

レギオン「ラルド・・・お前にこの剣をやるう・・・」

そう言ってレギオンは、蒼い剣を差し出した。

ラルド「何？これって・・・」

レギオン「それは剣だ。だが驚くなよ？これは剣に魔力を込める事ができ、しかも命令1つでドラゴンの口が現れ、相手の魔法を喰らい自分の魔力にするのだ。まだあるぞ、今の形が本当の形ではない。」

ラルド「どういう事？」

レギオン「・・・いずれおまえに会うものがヒントをくれるぞ。」

ラルド「・・・？・・・」

レギオン「いずれ分かるさ・・・名前だけだぞ？」

ラルド「うん」

レギオン「それは・・・」

.....  
.....

ラルド「・・・行くぞ・・・ゼロ・・・お前の力なんだろう？使わせて貰うぜ。」

ラルドは折れた刀を前に突き出した。そして魔力を込めた。

これは何だ？だれもがそう思うだろう。先ほどまで蒼かった柄は真っ白な金属になり、柄の先は赤い玉がついていてその周りを白い金属が覆っている。刀身は三角形を象った薄い蒼い色の光の刃で構成されている。

ラルド「・・・星剣・・・スターレイヴアー！！新の名はZセイバーだ！！！！」

ラルド「これで終わらせる。」

ラルドはZセイバーを裏手に持ち、バスターを左手に持って跳躍した。

ラルド「これが・・・お前の最後だア！！！！」

左手に持ったバスターを連続でチャージと発射を繰り返した。そして弾幕の嵐が止んだ瞬間にセイバーを裏手に持ちジヨゼへと向かって滑空する。

ラルド「煌け！！」

裏手に持ったセイバーで四方八方に高速に移動しながら切り裂き、そして切り裂いていく。

ラルド「鮮烈なる刃!!」

そしてそのスピードは目にも見ない速度まで上がっていく・・・

ラルド「輝け!!極光!!」

セイバーを裏手に持ったまま切り上げジョゼをはるか上空へと飛ばした。そんなジョゼをフルチャージしたバスターを放ち、レアバードで追う。

そして・・・その距離が零になり上下の位置が逆転した時・・・

ラルド「吼えろ!!プラスト・オブ・ドライブ!!」

セイバーに全魔力を込め、セイバーを白くし、はるか上空からファントムのギルドへ叩きつけた瞬間にその地面から大量の光の柱を生み出した・・・

ジョゼ・・・戦闘不能・・・

ラルド「・・・俺の・・・俺たちの・・・勝ちたア  
ー!!!」

いまここに1つの戦争の終止符が打たれた・・・だが・・・これが  
新たな冒険の幕を開けることにもなるのであろう・・・

## 第26魔法・戦いの後に

ラルドside

ファントムの奴らはジヨゼがやられた事で皆それぞればらけていった・・・

ジヨゼは評議員に捕まったらしい・・・

ギルドに戻ったら戻ったで、質問攻め・・・『アレは何の魔法だ？』  
『その銃は？』 『剣は？』 などといろんな事を聞かれまくったよ・・・  
・まあそのような質問にも丁寧に答えるのが俺なんだが・・・もう滅茶苦茶だった・・・

マスターが壊れたギルドを見ていると

ルーシィ「あ・・・あのマスター・・・」

マカロフ「んー？おまえもずいぶん大変な目にあっただのう・・・」

ルーシィはまだ自分のせいと思っっているらしく暗い顔をしている・・・  
・俺は声をかけようとしようとしたんだが・・・

レビィ「そんな顔しないのルーちゃん・・・みんなで力をあわせた大勝利なんだよ」

ジェット「ギルドは壊れちゃったけどな」

ドロイ「そんなのまた建てればいい」

包帯やら巻いて傷だらけのレビィやジェット、ドロイがルーシィに声をかける。

ルーシィはなんだかまた泣きそうな顔してるし・・・まだ自分のせいで責めつつづけてる・・・

ミラ「ねえ、ルーシィ・・・あなたが自分を責めたってみんな喜ばないわ・・・だからね、笑って勝利を喜びましょ・・・ね」

ミラに続きみんなルーシィを励ます。

マスター「楽しい事も、嬉しい事もすべてとまではいかんが、ある程度共有できるそれがギルドじゃ」

ラルド「周りを見てみるよ・・・みんなお前の事を・・・ルーシィのことを思っている。俺たちは仲間であり・・・同じギルドであり・・・そして、家族なんだ・・・泣きたい時には泣いて・・・笑いたい時は笑えばいい・・・俺もここにきて知る事ができたんだ・・・ここが俺の・・・俺たちの家なんだって・・・もちろんルーシィ・・・君の家でもある。最後だけ・・・君に会えて本当によかったと思う・・・」

マスターは皆を見回しながら語り出す・・・

マスター「一人の幸せはみんなの幸せ・・・一人の怒りはみんなの怒り、そして一人の涙はみんなの涙・・・自責の念にかられる必要はない・・・君にはみんなの心が届いとるはずじゃ・・・君はフェアリーテイルの一員なんだから・・・」

俺たちの言葉にルーシィは涙を流した。

だがそんな話もつかの間ってやつ？ルーンナイトつつつ評議員直属の魔道士がきたんだけど・・・

ルーンナイト「全員この場を動くな!!」

と云ってマスター+1つまり俺の事ね？評議員に連行されたんだよ・・・

評議員、裁判中・・・

マスター「ぐんぐんぐんぐんすび〜」

評議員の議長、他の評議員の人もポカーンとしている・・・ウルテ  
ィアとジークなんか笑ってるよ？マスター

後ろで自分の番を待っていた俺が声をかける・・・

ラルド「マスター・・・マスター・・・起きてくださいマスター」

シンの声で起きたのかマカロフは慌ててピシツとする。

「あゝマカロフさん？まさか裁判中に寝てたりしませんよね？」

評議員の一人が聞く・・・

マカロフは目をそらして笑って誤魔化す・・・

議長「では次・・・ラルド・エグフィード!!」

呼ばれた俺はマスターと入れ替わり裁判が行われる。

議長「単刀直入に言おう・・・ラルド・エグフィードを聖十魔道士に認定す」『断る。』・・・つな!？」

はあゝ？何で断ったかって？そんなもん決まってるじゃん。

ラルド「フェアリーテイルにはマスターがすでに聖十です・・・つまり同じギルドに2人もいることになる。仕事がうちにはっか回ってきたらどうする？また闇ギルドが増えるかもナ？」

議長「!!!?・・・いや、しかし!!」

ラルド「しかし何だ？俺が間違っているか？まあ、もつとも・・・俺に聖十の称号を与える代わりにフェアリーテイルを無罪にしてくれるのなら話はべつだけだ？」

そう、これを言い出すために断つたのだ・・・だが現実は甘くない。

ジーク「ふざけるな！！あれだけの被害を無罪にしろというのか！！」

議長「・・・・・・・・いいだろう。」

ジーク「じじい！！」

よしっ！！もらったぜ・・・

議長「ただし、ラルド・エグフィードは我々の依頼を受けてもらう事になるが・・・かまわないか？」

ラルド「ええ・・・かまいません。」

そう言い。俺とマスターは評議員を後にした・・・

その頃・・・

ジーク？「つち・・・ふざけやがって・・・このままでは計画が未遂に終わってしまう・・・急がなくては・・・」

数日後・・・

ナツ「騒ぐぞ〜飲むぞ〜食うぞ〜!!!」

フェアリーテイル「『『『オオオオオオオオ!!!』』』」

簡単に説明しよう・・・俺たちの裁判が終わって数日が経過しみんなの取調べも終わってフェアリーテイルは無罪となった・・・を、祝うために現在修復中のギルドの前でキャンプファイアー&決戦後パーティをやることになったのだ!!!・・・まあ俺は今修復中のギルドの上でミストガンと話しているけど・・・

ミストガン「・・・すまないな。ラルド・・・」

ラルド「何言ってるやがる・・・お前のおかげでフェアリーテイルを守れたようなもんだろう?」

そういうこと・・・コイツが俺に教えてくれなかったら今俺はみんなを助けられなかった・・・ちなみにマスターはファントムの襲撃後すぐに魔力が戻って目を覚ました。

ミストガン「だが俺は・・・」

ラルド「気にすんなよ・・・それよりもこの剣と銃のことなんだが・・・」

ミストガン「・・・それはこの世界の素材ではないな・・・どこか別の世界で作られたものようだ。」

ラルド「そうじゃなくて。この武器の性質？っていうのかな？それを教えてくれよ。」

本編では語らなかったが銃はゼロに授かっていたが、彼が家の片隅に隠していたため使用したのはジョゼ戦が初めてだった・・・

ミストガン「・・・まずは剣だ・・・その剣は自分の魔力を交換して刃を構成するようだ・・・魔力が切れればただの柄だけになっってしまう。そして銃・・・剣と一緒に自分の魔力を弾丸に変換して打ち出すみたいだな・・・そして剣は状況によって形態を変えることができるみたいだな・・・」

ラルド「形態？・・・」

ミストガン「ああ。双剣に鞭に槍・・・いろいろある・・・あとこれをもつていけ。」

そういつてミストガンは3つのチップを取り出した。

ラルド「それは？」

ミストガン「これは、銃・・・もしくは剣にこのチップを取り付けることでフレアチップは炎・・・フローズンチップは氷・・・ライトニングチップは雷に属性を変化することができる。」

3つのチップを貰った俺は、

ラルド「ありがとうな・・・」

ミストガン「礼には及ばん・・・それは元々お前のものだからな。」

ラルド「!?!?まさかおま!?!?」

ミストガン「さらばだラルドまた会おう。」

そう言つてミストガンは逃げるように俺の目の前から消えた。

ラルド「・・・っふん。昔とまったく変わらないな・・・」

ミラ「ラルド!?!?!」

すると下からミラの声が聞こえてきた。

ミラ「今日はあなたが主役なのよ?はやく来なさいよね?」

ラルド「ああ・・・今行くよ!?!」

そして俺たちは朝まで飲み明かしたのだ・・・明日以降の未来は分からない・・・でも俺たちは・・・

今を精一杯生きるんだ・・・

第1章 完

## 第27魔法・フレデリックと……えっ、ヤンデリカ？

ラルドside

俺たちは今、ミラの紹介でオニバスの街に仕事にきている。

オニバスはマグノリアより商業が盛んな大きな街……

ラルド「なあルーシィ……今回の仕事って何？」

ルーシィ「ふっふっふ……よくぞ聞いてくれました」

ちなみに俺は無理矢理連れてこされたので、依頼の内容は知らない……つかどんだけテンション高いんだよ……

ルーシィ「今回の依頼は、客足の減ってしまった劇場……フレデリックとヤンデリカを魔法で盛り上げて欲しいって言う依頼ね」

なるほど……つまり演出ってわけか……女の子がテンション高いと怖いなあ……

颯「俺もそう思う……昨日の文化祭は昨年文化祭で骨折したやつを『今回は怪我しないように気をつけるよ』って言ったから見えての通り元気ですよ！』って怒られた……」

ラルド「誰だお前は……」

颯「作者だ……今回から俺とお前の会話を挿入すーラルド」  
断るー！」……」

っち誰だよあいつは……

ラルド「おもしろそうだな……」

エルザ「しかしだな……コホン、あー、アー、あぁ」

グレイ「おい、エルザ俺たちがお芝居するんじゃないぞ？」

何する気だよ……と俺は心の中でツツコンだ……

ナツ「うつぶ……もう列車には乗らねえ……うつぶ……」

まいどまいど……かわいそうだな……

とか何とか思っていると、劇場に着いた。

俺たちの目の前のドアがゆっくり開き、中から背の低い男が出てくる。

「あの〜フェアリーテイルのみなさんですか？引き受けてくれてありがとうございます」

ルーシィは笑顔で前に出て

ルーシィ「はい 演出なら私達にまかせてください」

「それがですね・・・ちょっと困った事になりました・・・」

「「「「「?????」「」「」「」

ラビアン「不評につぐ不評で役者達は劇に出る事を恥じに思う始末なんです・・・」

ラルド「そうですね・・・」

エルザ「フン・・・座長・・・何を言ってるんですか・・・役者ならここにいるではありませんか・・・」

エルザは目をキラキラさせながら言う。

ラルド「出る気かよ!!!」

グレイ「か・・・輝いている!!!」

ラルド「そういう事で・・・俺たちが役者をしてもいいですか？座長さん」

そう言いながらも、俺も意外に役者というものをやってみたくて心の底では思っている・・・

「みなさん・・・」

「ちっ・・・素人か・・・まあやらせてやってもいいが・・・」

今度はため息をつきながら・・・

グレイ「そこはありがとうっていうんじゃないのかよ・・・」

ストーリーを簡単に説明しよう・・・悪い奴に囚われた姫を王子が救い出すという感じた・・・まあ何処も基本そうだろうが・・・なんていうか古典的なストーリーな気がする・・・

俺の役は、姫を助け出すと言う王子役だ・・・が

エルザ「私が姫役だ!!」

ルーシィ「私のほうが姫役にあってるもん!!」

ルーシィとエルザが姫役を取り合っている。2人ともそんなに姫役がやりたいのか・・・まあ女なら一度は夢見るものだから仕方ないか・・・

しょうがない・・・

ラルド「じゃあ台本を変えよう・・・」

エルザ&ルーシィ「？」

ラルド「簡単に言うと、姫を姉妹か双子という設定にして、俺が

2人を救うってのはどうだ？」

俺の提案に2人は・・・

ルーシィ「いいわね」

エルザ「それなら構わん。」

それから俺たちは劇の練習をした・・・エルザは見事に完璧な姫役を、ルーシィもエルザほどではないにしろ、うまい。

さうて・・・シヨウタイムだ！！

公演開始

公演が始まる合図のブザーが鳴り・・・終わった。

最初はルーシィの星霊、琴座のリラの演奏と綺麗な歌声から入る・

リラ「（ポロロン）遠い〜遠い〜昔の事〜 西国の王子は敵国の姫に恋をした〜」

「おお〜なんて綺麗な歌声なんだ」

「うっとりするわ」

観客はリラの歌声にうっとりしている、そこに騎士の格好をして背中にはマントをヒラヒラさせた王子こと俺・・・ラルド・エグフイードの登場だ。

キヤーーーーー!!!!!!

「誰、あの人？かつこよくない？」

「こつち向いて〜王子様〜!!!!」

俺の登場で、観客（女）のボルテージは一気に上がる・・・なんか恥ずかしいな・・・

そして俺はマントをバツ・・・と両手で払った。

ラルド「我が名はフレデリック!!!姫を助けにまいりました!!!」

キヤーーーーー!!!!!!

「私も言われた〜いい!!」

そこに姫2人がロープで吊るされて登場・・・え？

エルザ「わ・・・わた・・・わたし・・・は・・・あ・・・あの  
セイン・・・ト　　ハル・・・につ、つか　　捕まってしまいました  
」

ルーシィ「私です!!王子・・・セインハルトから私をお救い  
ください・・・」

「なんだよ!!あのガチガチは!!!!」

「それに、あのって誰だよ!!」

「つかセイントハルになってたし!!!!」

練習の時とは真逆の、エルザのボロボロさに、なんとかルーシィ  
がアドリブで乗りきろうする・・・が

グレイ「我が名はジュリオス・・・姫たちをを返してほしくば、  
私と勝負するんだ!フレデリック!!」

「セインハルト何処行ったー!!!!!!」

やばいな・・・クレームの嵐だよ・・・だがこっからだ  
!!

グレイ「くらえ!・・・氷の剣!!」

グレイは氷で出来た、剣を出しフレデリックにむけて構える。

「すげ〜」

「どうやってだしたんだ？」

ラルド「なんの！！私はこの光の剣がある！！」

とかなんとか決め台詞を言い、Zセイバーを取り出した。

キャーーーーーー！！！！

「フレデリック様ー！！」

「カッコイイー！！」

え？何アレ・・・俺のうちわ？

行動早！！！！

グレイ「ぐわー！！！！やられた〜」

いきなり吹っ飛ぶグレイ・・・

「弱！！！！」

ラルド「さあ姫・・・私と共に逃げ出しましょう」

グレイ「う・・・まだだ・・・まだ終わらんだよ！！！！いでよ！！！！我が下僕のドラゴンー！！」

倒れたままのジュリアス・・・グレイは手を上げて言うと、奥からドラゴンの着ぐるみに顔だけ出たナツが出てくる。

ナツ「ぐおおお！がああああ！！俺様はすべてを破壊するドラゴンだー！！」

ナツは口から炎を吐きながら登場する。

グレイ「くそお！！こうなったら協力して倒すしかない！！」

・・・はい？

ラルド「お・・・おう・・・」

何言ってる？めっちゃくちゃじゃ・・・

「ジュリアス！！お前が呼んだんだろくが！！」

「どついつ展開だよ！！」

俺が知りテーよ！！！！

ルーシィ「私が足止めをします！2人は逃げてください！！」

「オイオイ！姫なに言っちゃてんの！！？」

ここは予定通り！！俺たちは舞台裏へと走る。

ドスン！！

・・・はひ？

火を吹きながらナツが落ちてきた・・・

ルーシイのスカートが燃えてパニック状態・・・

ルーシイキヤー！！！！グレイ氷！・・・氷！！」

グレイ「おっしゃあ！！アイスメイクふげ！？？」

俺はグレイを踏みルーシイへと向かう。

そしてZセイバーを取り出し、フローズンチップを組み込んだ。  
刀身がさらに蒼くなる。

ラルド「光幻刃！！」

俺が放った衝撃波は氷を纏い、ルーシイへと飛んでいく。

そして俺の氷の刃は燃えているところとそうでない部分を切り離した。

ラルド「姫！！大丈夫ですか！！」

一応芝居はする。

ナツ「いてー！！！！（ゴオオオ！！）」

ナツことドラゴンは火を吐きながら起き上がる、

グレイ「ナツ！！待て！！落ち着け！！アイスメイク・ゲイザー！！！」

ラルド「お前も落ち着け！！バカヤロー！！！」

つくそ！！仕方がない……

劇場はボロボロになっていつているのに気がついたら……

ラルド「輝く御名の下、地を這う穢れし魂に裁きの光を雨と降らせん安息に眠れ、罪深き者よ！！ジャツジメント！！！」

詠唱有りのジャツジメントを使わなくてすんだのに……

光の雨はボロボロの劇場を崩壊させた。

「ッハッハッハッハ！！！」

「ブラボー！！！」

「いいぞー！！！」

「こんな劇は初めてだー」

「ブラボーー！！！」

観客はなぜか笑っている……皆……

エルザは暴走して、ナツを振り回し、グレイは脱ぎ……俺はシヨックでうつ伏せになっている。

ルーシィは観客の笑顔に手を振り笑う・・・

余談だが、このあと何回も公演したことは言うまでもないだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0168v/>

---

FAIRY TEIL 空に輝く星竜の咆哮

2011年11月16日19時43分発行